



Timor-Leste
東ティモール

Bunkyo Volunteers 2005

文教ボランティアズ 2005



Bosnia i Herzegovina

ボスニア・ヘルツェゴビナ

国内準備



学内での募金活動



茅ヶ崎駅前での募金活動



ボスニアへの支援物資



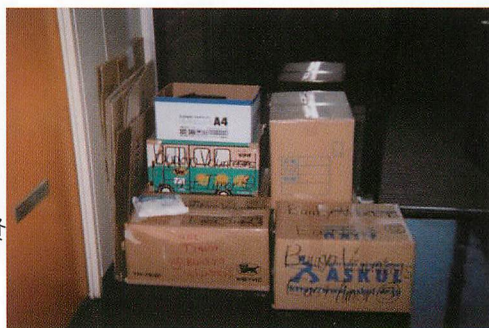
現地で披露する歌の練習中

集められた支援物資



東ティモールに持って行く鶴と衛生教育のポスターを作成中

東ティモールへの支援物資



ボスニア・ヘルツェゴビナ

出発前

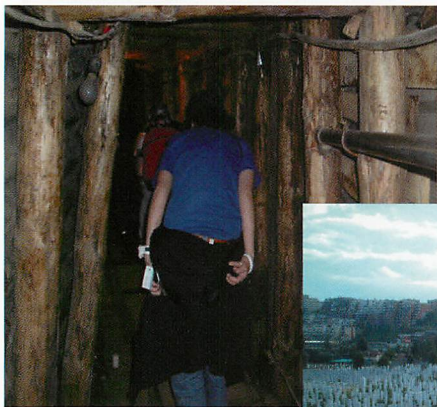


成田空港にて通関直後。「いってきます！！」



飛行機に乗せる前に物資の補強をする。

サラエボ



紛争中、物資輸送のために空港下に造られたトンネル。



サラエボでは日本のODAで提供されたバスをよく見かけた。



1984年にオリンピックが行われた会場のそばにはおびただしい数のお墓が建っていた。

フリエドール

ホームステイ先で毎晩物資の仕分けに追われた。



ハンバリンのユースセンターで歌を披露中。



ユースセンターで物資を手渡した。(ハンバリン)



阿波踊りの後、みんなで記念撮影(ハンバリン)



プレゼントしたうちわを手に子供たちが見送ってくれた。(ハンバリン)



コザラ山でイタリアのボランティア学生との交換会



紛争中、たくさんの人々が虐殺されたオマルシュカの強制収容所



おぼじき、だるまおとし、輪投げ、お手玉など日本のおもちゃで子どもたちと一緒に遊んだ。(ルビア)



ユースセンターで働いているサネラさん(写真右)に中身を説明し、物資を手渡した。(ルビア)



ユースセンターの子ども達と阿波踊り (ルビア)



お世話になった
ホストファミリーの
モーウィチ夫妻と
サカナさん



スレブレニツア



虐殺現場の向かいに造られたメモリアルパーク



4日間で7000～8000人が虐殺されたが、墓に埋葬された遺体はまだ1800体ほどしかない。



高校生との交換会で日本を紹介



紛争で家族を失った女性たちから紛争時の体験を聞いた。

市民ホールで、約200人の前で歌と阿波踊りを披露した。



2週間移動を共にしたミニバンお疲れ様でした！！

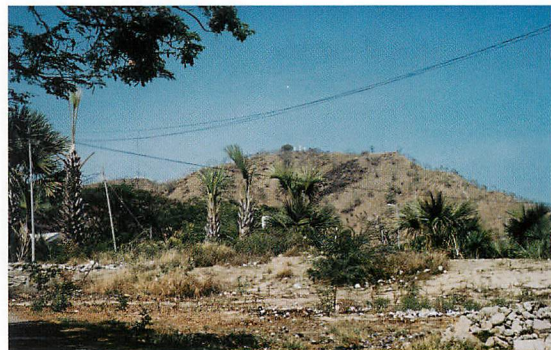


東ティモール

首都ディリ



ディリの空港に小型飛行機で降り立った。



禿山が多く、焼かれているところもあった。

OISCA



苗床作りをお手伝い。



日本の黒ポットを寄贈した。



一昨年文教ボランティアズが植えた
マングローブ。順調に育っている。



全員集合！

バウカウ



食料調達した路上マーケット。



カメラを向けると子どもたちが集まってくる。

バギア村



昨年塗ったペンキはきれいなままだった。



教会前の広場で子どもたちが遊ぶ。



みんなで布団干し。どんなにたたいても埃が出てきた。



昨年同様500ドルのファンドを手渡す。



ゴミ拾いではたくさんのゴミが集まった。



ソーラークッカー作成中。



大切に苗木を植えた。

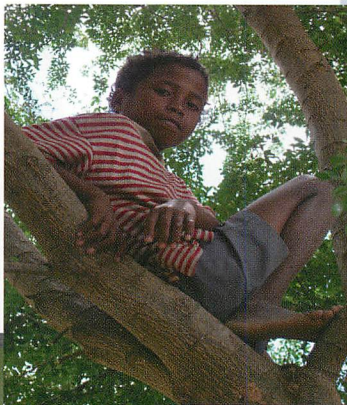


バギア村のマーケット。週2回開かれる。



物資の楽器を嬉しそうに使うこどもたち。

出来上がった
ソーラークッカーに興味津々！



孤児院の前にある小学校。
増築中だった。



フェアウェルパーティでダンスや歌のプレゼント。



タイスのお返しに鶴を渡す。

コソボ



アルバニア人小学校で子どもたちと



KLA(コソボ解放軍)の兵士の墓



ペーヤにあるアートスクールを訪問



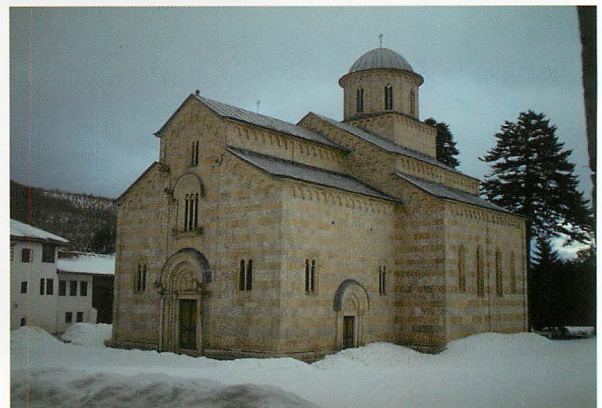
シムシアさん家族と一緒に。紛争中、紛争後のつらい体験を語ってくださった

平和活動家の高校生、ファットメイラさんに話を聞いた。



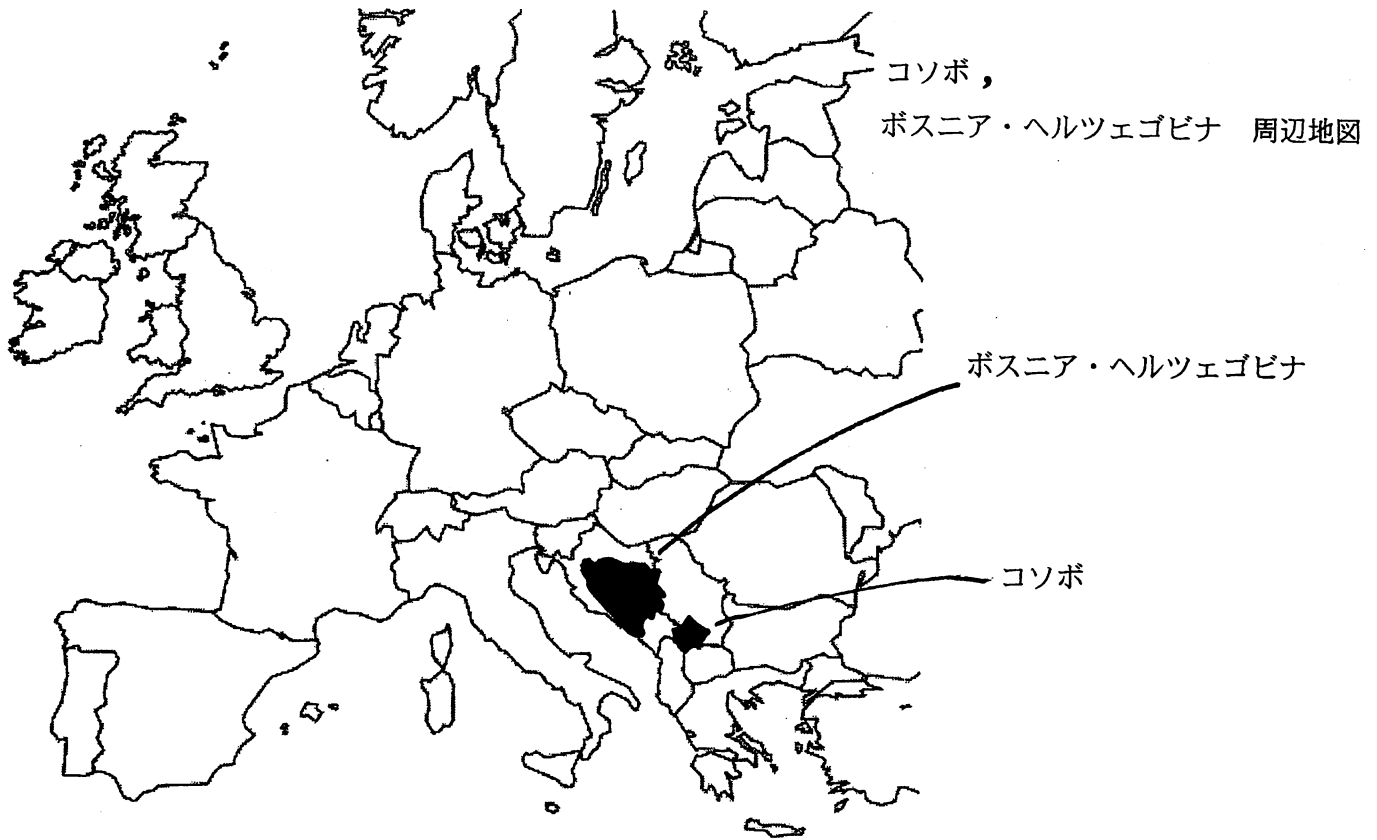
世界遺産に登録されているデチャニのセルビア正教会

セルビア人小学校で子ども達と

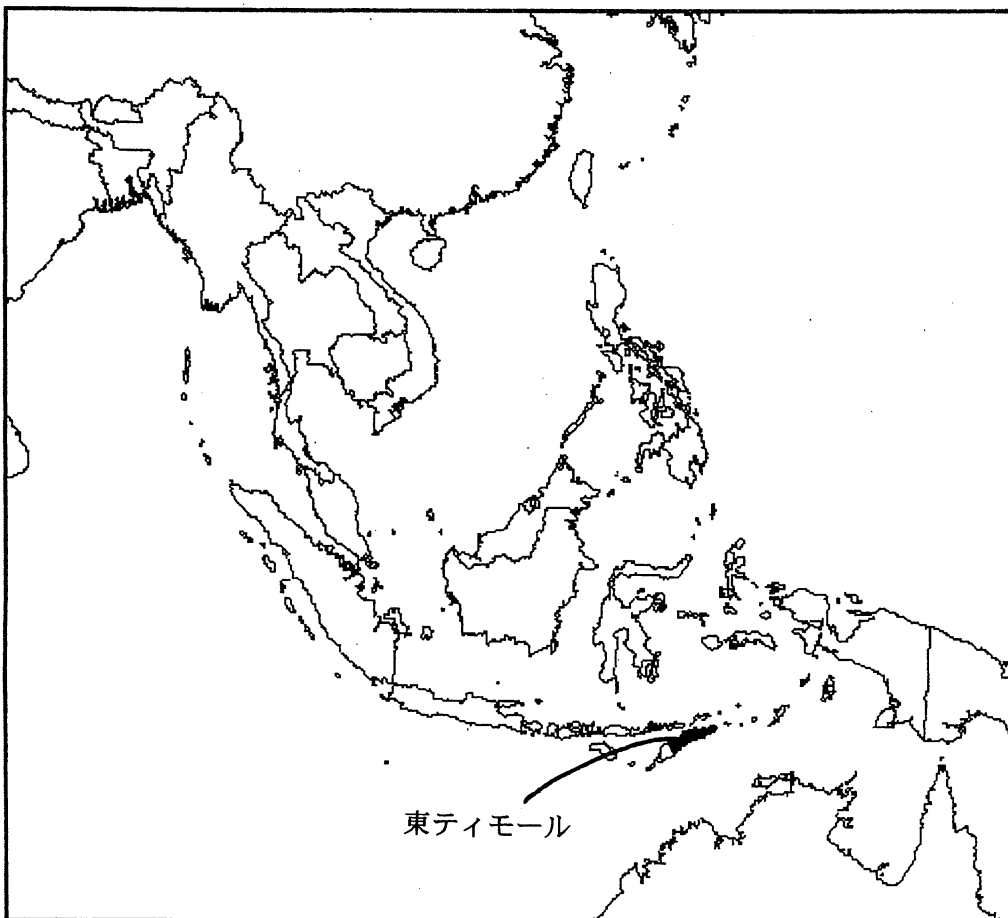


目次

I.	* ご挨拶 国際学部国際ボランティア委員会	1
	* 「Gratitude to All Who Helped the Bunkyo Volunteers」	3
	International Volunteer Advisory Committee	
	* 文教大学国際ボランティア活動5周年	
	「先駆的活動を支えてくれた多くの理解者」 国際学部教授 中村恭一	5
II.	ボスニア・ヘルツェゴビナ活動報告(2005年 夏)	9
	* 活動スケジュール	11
	* ボスニア・ヘルツェゴビナの歴史・紛争・現状	13
	* サラエボ視察	16
	* プリエドールでの活動とホームステイ	17
	* スレブレニツァでの活動	22
	* パフォーマンスとプレゼンテーション	25
	* 活動総括	27
III.	東ティモール活動報告(2005年 夏)	31
	* 活動スケジュール	33
	* はじめにー学生総括ー	35
	* 東ティモール現況	36
	* 活動報告	42
	* 終わりにー「友情から生まれたもの」ー	55
IV.	ボスニア・ヘルツェゴビナ、東ティモール活動報告	
	* 会計報告	57
	* 支援物資収集	60
	* 国内募金・支援物資・広報活動の協力者	61
	* 広報活動	62
V.	コソボ視察報告(2005年 春)	65
	* 視察スケジュール	66
	* コソボ基礎データ、アートスクール訪問	67
	* デチャニのセルビア正教会	
	アルバニア人、セルビア人地区学校訪問	68
	* フェリザイの障害者家庭訪問	69
	* ファットメイラさん、視察を終えて	70
VI.	お世話になった方々	71
VII.	あとがき	
	* 「共に生きるということ」 国際学部教授 林 薫	73
	* 「ボランティア活動に参加する学生たちへ」 国際学部助教授 生田 祐子	75



<http://worldatlas.com/webimage/countrys/europe/euoutl.htm>



東ティモール 周辺地図

Free Blank Outline Map of Southeast Asia: <http://geography.about.com/library/blank/blexseasia.htm>

ご挨拶

文教大学国際学部
国際ボランティア委員会

2001年の夏のコソボからはじまった文教大学学生のボランティア活動は今年で5年目を向かえ、ボランティアズ報告書も5冊目になります。この間、すでに100名を超える学生が現地活動に参加し、学窓を巣立った学生たちは、ボランティア活動で得たものを心に刻みつつ、社会人として日々の生活を送っています。快適でも容易でもない活動に能動的に参加することは決心がいますが、参加することを通じてさまざまな困難を抱えている人々と隣人になることができ、世界が抱える問題をより身近な問題として考え、更に自らも責任の一旦を担う存在であることを認識できるようになればたいへん素晴らしいことだと思います。

この5年間を通じてボランティアを進める上での難しさも学んできました。その一つは安全の問題です。紛争後の復興や貧困からの脱出などに直面している人々こそボランティア活動を必要としています。そのような人々が居住している地域は、治安が完全には安定せず、道路などのインフラも整備されておらず、清潔な水の供給にも事欠くようなところです。地元の人々と同じような生活をしなければ、そこで何が必要とさらされているかを理解することはできませんが、どのような場合でも学生を危険にさらすことは出来ません。このためボランティア活動の企画立案にあたっては、常に正確かつ最新の情報収集と冷静な分析が欠かせません。

本年度の活動は当初東ティモールとコソボ（セルビア・モンテネグロ内自治州）で実施する予定でした。東ティモールは独立時に対立したグループ間の和解も進められており、今は貧困削減が大きな課題です。他方、コソボはまだ対立する民族間の和解の過程にあります。和解は必ずしも順調ではありません。活動の準備段階では現地日本大使館や外務省欧州局中・東欧課などと連絡をとりつつ準備を進めてきました。しかし、出発を1ヶ月に控えた7月下旬に至って、2005年秋より開始されるコソボ独立の協議に向けた示威、テロの発生などの情勢変化が予想される事態となり、涙をのんでコソボ行きはとりやめざるを得ませんでした。期待していた現地の方々や張り切っていた学生にこのことを説明するのはたいへん心苦しいものでした。特に、学生が企画したコソボの障害者に車椅子を運搬するプロジェクトを断念せざるを得なかったことは本当に残念でした。ただ、各方面のご協力によりボスニア・ヘルツェゴヴィナに行先を変更し、長年にわたる紛争から和解と復興の途上にある地域の子供たちの支援や地域のユースセンタープロジェクトへの協力などができたことは新たな収穫でした。

これまでの5年間で学んだもうひとつの大きなことは、ボランティアを必要とする人々

へのニーズに応じていくには、多くの関係者のご理解とご協力を得なければならないということです。NGOとは異なり、現地にリエゾンを持たない大学生ボランティアでは、このことは極めて重要です。今年度もさまざまな力に支えられて活動を実施することができました。お世話になったかたがたには別項にてお礼を申し上げますが、とりわけ東ティモールではO I S C A、サレジオ会・ドンボスコの皆様、ボスニアでは在サラエボ日本大使館、JICA、プリエドールのLDA(地域開発のためのNGO)、スレブレニツァ UNDP(国連開発計画)の皆様、それから残念ながら活動はできませんでしたがコソボについては、在セルビア・モンテネグロ日本大使館、コソボワールドビジョン、コソボ人権センター、の皆様大変お世話になりました。ここで、改めまして御礼と、そしてコソボの関係者にはお詫びを申し上げます。

学生が世界とのかかわりを理解し、今後自ら積極的に隣人となっていこうとするきっかけとして、国際ボランティア委員会は、今後とも活動の企画や調整、指導そのほかの支援を行っていきたいと思います。また、学生のボランティアにはこのほかにも多くの自発的な活動があります。これらの活動はあくまでも学生の自主性に任せられるべきものですが、活動の調整や知識と経験の共有でより効果的な活動にしていくことができると思います。このためにも、国際ボランティア委員会として助力を惜しまない方針です。

今後とも、文教大学学生による国際ボランティア活動に関し、ご指導、ご意見等賜れば幸いです。

国際ボランティア委員会

林 薫 (委員長)

生田 祐子 (委員)

中村 恭一 (顧問)

Gratitude to All Who Helped the Bunkyo Volunteers

It is our great pleasure to avail ourselves of this opportunity to express our heartfelt gratitude to all who kindly helped the Bunkyo University Student Volunteers make 2005 another memorable and successful year.

The Bunkyo Volunteers visited Kosovo, Bosnia and East Timor in 2005.

Traveling to Kosovo in March, the volunteers based in Peja (Pec) visited some schools and a college to assist classes in education to introduce Japan in collaboration with the Kosova Centre for Human Rights (KCHR). They also participated in the work of Kosovo World Vision, an international NGO active in Kosovo in helping the physically handicapped people. During their stay a tense moment emerged. The incumbent Prime Minister of Kosova was indicted to the International Criminal Tribunal of the Former Yugoslavia (ICTY) in The Hague. Speculation was rife in some quarters that violent protest may be waged against the ICTY decision. The Bunkyo volunteers witnessed, however, that the citizens of Kosovo coped with the agonizing situation with poise and composure. We extend our warm appreciation to Dr. Neshad Asllani, Director of KCHR, Mr. Ali Asllani, child human rights expert, KCHR, Ms. Sharon Burton, Director of World Vision Kosovo, and Ms. Hitomi Honda WVK Programme Officer, for their kind cooperation.

In late August through early September, the volunteers visiting Bosnia were engaged in helping young people through the Youth Centers in Hambarine and Ljubija of the Prijedor region, north western Bosnia, and exchanged with all walks of life in Srebrenica, eastern Bosnia, donating in all these towns stationary, musical instruments and sports goods which were collected in and brought from Chigasaki, Bunkyo University's home town. Prijedor, as represented by the Omarska camp, is known for the ethnic cleansing of Muslim citizens in the early days of the Bosnian War, while Srebrenica was the venue where the worst massacre in the post-war Europe took place. The volunteers' visit to Srebrenica happened to be shortly after the 10th anniversary observance of the tragedy. They visited the Memorial Park cemetery on a now peaceful sprawling hill in nearby Potocari. "Never Again," pleads a line of a monument. The young Japanese who know nothing of a real war eyed the vivid scar of the savage armed conflict. "Never Again" corresponds to "No More Hiroshima." They also saw people striving hard for recovery and reunion. For these experiences in Srebrenica and Prijedor we thank a lot of friends: Mr. Alexandre Prieto, Programme Director of UNDP Srebrenica, and his staff, Ms. Patrizia Bugna, representative of Italian NGO "Local Development Agency (LDA)," and her staff, Mr. Hikaru Izumiya, Economic Development

Adviser to the Government of Bosnia and Herzegovina, to name a few. The Sarajevo Diplomatic Corps also provided the students with a rare opportunity for exchange.

The Bunkyo Volunteers have visited East Timor for these five years consecutively. In fact they visit the Pacific island country almost every summer and/or spring to help an orphanage in remote Baguia village on the foot of the near 3,000-meter-high mountain range. In the past they participated in health care service, mangrove or forest development projects, agricultural training, etc., launched by Japanese NGOs. During the latest visit in late August the volunteers, based at the orphanage in Baguia as usual, were engaged in the works - repairing the orphanage building, tree planting, donating stationary and sports goods to the village school, giving environmental education to kids and villagers. Visit to an agricultural training center in Liquica in western East Timor, opened and managed by OISCA International, a champion Japanese NGO in agricultural development assistance, is also a regular program of the volunteers. Without active participation and cooperation of local people, Mr. M. A. Gueterres (Lito), Director of OISCA Timor Leste, among others, as well as officials of the Japan International Cooperation Agency the Bunkyo Volunteers could not satisfy their mission in East Timor. We salute to all who helped the volunteers.

The last but not the least, we should mention the great contribution of faculty members and students of the Bunkyo University Shonan Campus. The Faculty of International Studies always rendered warm support for the student volunteering overseas. Many students of the campus were willing to collect a variety of materials to be donated for needy people. The alma mater of volunteers and citizens of Chigasaki were also helpful in collecting donation and in-kind contribution, so the volunteers could be constantly active.

Volunteering by the Bunkyo Volunteers is not limited to the activities in the former conflict-ridden areas of the world. To make small but notable contribution the volunteers also launch relief fund raising campaigns for the disaster-hit people - quake sufferers in Iran, Niigata (Japan) and Indian Ocean coast countries in the past and most recently those in Pakistan.

This brief note of gratitude is addressed mainly to the friends overseas. More individual names are found in the list affixed to this report. Although the report is written in Japanese, we trust that the photo section will help you to have a glimpse of the 2005 activities of the Bunkyo Volunteers. Thank you all, and see you again.

Advisers to the Bunkyo Volunteers:

Prof. Kyoichi Nakamura

Prof. Kaoru Hayashi

Associate Prof. Yuko Ikuta

先駆的活動を支えてくれた多くの理解者

国際学部教授・文教ボランティアズ顧問

中 村 恭 一

「先生、ニューヨークが大変です。飛行機が何機もハイジャックされて、それがビルに突っ込んでいるそうです。世界貿易センタービルもやられました」

2001年9月11日。私にとってもまさに忘れることの出来ない衝撃の瞬間はこうして始まった。世界中が息を呑み、戦慄してテレビの前に釘付けになったその日、私はウィーン国際空港の到着ロビーに立っていた。実はこの時、10人の文教大学国際学部学生が私と旅を共にしていた。学生たちは、NATO 史上初の本格的な空爆で知られたコソボ紛争の終結間もないコソボでのボランティア活動を無事に終えて、ウィーン空港に到着したばかりだった。NATO 軍の戦車が往来するコソボでの緊張から解放された学生たちは、意気揚々と家族にその一報をするために、連れ立って公衆電話に向かった。そしてロビー中央で荷物番も兼ねて待っていた私に向かって、最初に戻ってきた学生が興奮気味に発したのが冒頭の言葉である。

「お母さんに無事だと言ったら、“あなた、それどころじゃないのよって。”私のことは何も聞かずに、“ニューヨーク、ニューヨークが大変なんだ”って」。学生は興奮気味に続けた。まもなくこの文教ボランティアズ一行はウィーン市内のホテルで、ロビーのテレビに映し出された CNN 放送の前に声を失って立ち尽くした。世界貿易センタービルが、音もなく崩れていく。パニック映画ではない。世界中が同時に見ていたのは、紛れもなくニューヨークでもっとも高層の、端正な姿を誇ったツインタワーが現実に崩れていく様子である。

私は90年代を通じて、ニューヨーク・マンハッタンを仕事の場にしていた。従って、日本から知人、友人が訪ねてくると、世界貿易センタービルへ案内した。北館の最上階である110階にその名も“ウインドウズ・オン・ザ・ワールド”というレストランがあった。その窓辺の席に座ると、5番街中央に君臨するエンパイア・ステート・ビルでさえ下に見える。知人たちは、何よりものもてなしだとその夜景を堪能してくれた。その世界貿易センタービルが、テレビ画面とは言え、目の前で崩れ落ちていくのである。私は最上階のレストランに座ったまま、私自身が奈落に吸い込まれていくような感覚に陥った。

2001年9月11日。それは世界を変える大事件が起きた日として記憶されると同時に、文教大学国際学部の国際ボランティアズにとっては、実は“歴史的な”第1回海外ボランティア活動を無事完了させた日として、忘れられない日なのだ。任務完了 (Mission Accomplished)！ 学生たちは家族や友人たちに誇らしげに語れる一瞬を、世界貿易セン

タービル崩壊という事件にかき消されてしまったが、だからと言って新しい道を開いていった Trail-blazer つまり開拓者の役割は決して小さなものではない。

以来5年間。国際学部学生による国際ボランティア活動のたいまつは引き継がれてきた。第1回コソボ活動に参加したメンバーの一人は、国際 NGO 活動にまい進し、いまやモンゴルでの学校建設などを担当してがんばっている。また彼女の後輩の一人は、将来国際協力のプロになることを夢見て、現在青年海外協力隊員としてヨルダンで柔道のコーチをするかたわら、中東問題とアラビア語の研鑽に励んでいる。数年後彼もまた、国連あるいは NGO の一員として世界を舞台に活躍してくれるだろう。

文教大学国際ボランティアズは、関係する世界では既に十分にその名を知られている。日本の多くの NGO 指導者たちは、文教大学湘南キャンパスや彼らの事務所で文教ボランティアズと交流し、その熱意と活動に温かいエールを送ってくれている。一方コソボやボスニア、あるいは東チモールにおいて、国連関係者や現地 NGO、そして現地日本政府や援助機関の関係者には、なじみの定期的訪問者となっている。今年の夏、在ベオグラードの日本大使館から「現地治安情勢に心配あり」との強い勧告を受けてコソボでのボランティア活動を断念したときに、どれだけ多くの NGO 関係者やその向こうにいるさまざまな人々を落胆させたことだろう。

学生ボランティア活動には多くの意義がある。

まず現地で支援、援助を必要としている人々に直接協力の手を差し伸べていることである。これまで東チモールやコソボ、あるいはウズベキスタンに出かけた文教ボランティアズは、彼らの母校である中学、高校や茅ヶ崎市内の市民や学校、あるいは大学の友人たちの協力を得て集めた文房具やスポーツ用品、衣料品や楽器などを届けて、日常生活や学校生活の支援という大きな貢献をした。しかしこの物資による支援はもちろん重要であるものの、学生でなければ出来ないことではなく、また学生に可能な支援物資の量には限界がある。

何よりも大きな意味は、日本から若者がやってきて、紛争や貧困に打ちひしがれた子供や住民たちに、彼らの苦しい経験を理解し、共有しているというメッセージ、彼らが決して世界から忘れられた存在ではないというメッセージを伝えることにある。それがどれだけ大きな意味を持つかは、世界中から日本を訪れる人たちにぜひ広島や長崎も見てください、と期待する心情を思い起こせば理解できる。東チモールの山奥の孤児院には、年に一度訪ねてきてくれる文教ボランティアズのメンバーの名前を覚えている子供たちが何人もいる。訪ねてくる学生は毎年代わっているものの、子供たちは前年に来た人たちの名前を挙げ、さらにまた新たな訪問者の名を彼らの記憶の人名録に刻んで、世界とのつながりを確認しているのである。世界とつながっていることの確認が、山奥の孤児院の子供たちにどれだけ重要なことかは、現地を訪れる体験を持った人にしか分からない。劇的な別れのつらさに直面したボランティアズは、紛れもなく学生ボランティアとしてはるばる訪ねて

きた意義を実感する。

05年夏、文教ボランティアズの努力と札幌の NGO の温かい協力で、コソボの身体障害者に車椅子を届ける話が固まっていた。現地の国際 NGO でもその支援を心待ちにしていた。また別な現地 NGO にとっては、文教大学はまさに日本を見る窓口である。文教大学を通してのみ日本人の国際協力の心を知り、日本人のコソボへの友情を知り、遠く離れたアジアとのつながりを確認してきた。

しかし「治安情勢を理由にコソボ行きを断念せざるを得なくなった」と、コソボ活動指導の生田祐子助教授がなじみの現地関係者に伝えたとき、恐らく現地の人たちは「なぜ？コソボの治安で何が問題に？私たちは毎日ここで生活しているではないか」と強く感じたことだろう。コソボ人権センターの所長が送ってきたメールには、心待ちにしていた文教ボランティアズが来られなくなったことを知った無念さがにじみ出ていた。それは世界から忘れられる恐怖にも似た感情が込められていた。

コソボの治安情勢がこの夏急速に悪化した事実はない。NATO 軍による空爆直後の混乱期からずっと現地を見守ってきた私には、現地情勢についてそれなりの判断をする知識はある。しかし日本人が現地で何かのトラブルに巻き込まれたら厄介なことになると考える現地大使館に抗う術はない。現地の人に温かく歓迎されている学生たちの国際交流の意味と、現地で万が一若者たちが厄介なことに巻き込まれたらえらい迷惑だと発想する大使館の立場とは往々にして対立する。ニューヨークやロンドンでテロ事件が起きても、政府は決して危険情報を一気に引き上げたりはしないが、大使館職員の手薄なところ、政治的、経済的につながりの薄い国や地域での安全情報は、かすかな不安材料が予測されるだけでことさら厳しくなるのは珍しくない。それは面倒なことを起こされたら迷惑だからと宣言しているようにも映る。

この問題の背後には、2004年春イラクで起きた日本人拉致事件での騒ぎがあると言っても間違いでない。その騒ぎはその後の純粋な民間の国際協力活動において、大きな足かせになってしまった。拉致された活動家たちの救出を求める家族が激しく政府関係者に詰め寄った光景は、海外での日本人保護の責任を持つ外務省にとっては、決して忘れることの出来ない苦い経験となった。無謀と勇気を混同した一部の活動家の行動で、どれだけ日本の国際協力活動全般に影響が出たかということを、忘れられてはならない。(上記事件の問題点は、人道的 NGO 活動に従事していた女性活動家とその家族の意識には大きなギャップがあった。またこの女性活動家と同行者の間にもイラク訪問の動機にやはり大きなギャップがあった。後日不幸にも殺害されたフリーのベテラン・ジャーナリストの遺族の志の高さと覚悟には多くの教訓が秘められている)。

国際協力や国際貢献が求められるところは、さまざまな意味で問題を抱えている地域である。人道的な国際 NGO 活動に従事する人々は、現地での安全度と国際協力の使命感とが絡み合う葛藤から完全に解放されることはあり得ない。

文教ボランティアズにとっても「もし何かあったらどうするのか？」という命題は、活動の最初の年から、宿命的についてきた。活動が5年間滞りなく実施できた事実は、理解者に恵まれたという他はない。

その理解者の第一は、文教大学国際学部の教員一同である。私の知る限り、国際学部の中で、「もし何かあったらどうするのか」と異を唱えた人は一人もいなかった。空気はむしろ逆で、学生の活動を指導する学部の国際ボランティア委員会に対する大きな支援と支持があった。今全国の大学で国際協力の実践が大きなテーマになっている。大学が豊かな資金で大々的に支援するケースも現れた。政府の関心も高く、「紛争後の平和構築における大学の国際協力」が政府主催のシンポジウムのテーマになる。文教大学国際学部は、疑問の余地なく、国際協力の実践で先駆者的な立場、Trail-blazer であったと言えるが、この“先駆者の苦勞と誉れ”も、例え一度であれ、「何かがあったら」一瞬にして厳しい批判にさらされる危険と背中合わせである。

理解者の第二は、現地での活動を支援してくれる国連機関や NGO の代表者たちである。第1回目から、こうした人々が現地にいるからこそ文教ボランティアズの活動が可能になった。コソボでも、ボスニアでも、東チモール、ウズベキスタンでも常に現地にある国連や JICA 等の機関から大きな協力を得てきた。また生活や現地情報という面では、国際 NGO あるいは現地 NGO の支援、協力は不可欠であったが、文教ボランティアズは常にそのような活動組織の支援に恵まれた。

第三の理解者は、参加学生の保護者、家族である。保護者、家族の理解なしに学生たちを貧困や紛争後の困難に直面している地域に送り、活動させることは絶対に不可能であった。一部には家族の経済的支援もあったが、費用は学生たちなりに工夫工面している。国際協力を学ぶものが国際協力の現場に立って体験することの重要性、それには何らかの危険や不測の事態もあり得ること、しかし海の魚は海に漕ぎ出してこそ初めて手にすることが出来るということを理解してくれる家族がいなければ、指導教員も学生を現場に導くことは不可能であり、許されないことである。

最後の理解者は、言うまでもなく参加学生自身である。彼らが、国際協力の現場に立つことの重要性を理解し、そのための準備段階でのさまざまな苦勞や現地での睡眠不足に耐えて活動に挑む価値を理解しなければ、初めての海外旅行に東チモールやバルカンの地を選ぶことはないだろう。私は活動体験後に起きる彼らの多様な変化を Copernican Revolution と呼んで、大きな誇りにしている。この革命的变化はきっとその後の人生に役立つだろう。

文教ボランティアズの活動は、ただの一度も失敗は許されないという意識を徹底させた。5年間無事に活動できたのは、そのような覚悟と周到な準備に加えて、「運」という最大の実力者を常に味方に出来たからかも知れない。

ボスニア・ヘルツェゴビナ活動報告

2005年8月24日～9月7日

現地参加者

国際学部国際関係学科	4年	竹中	亮太
国際学部国際関係学科	3年	佐藤	麻美
国際学部国際関係学科	3年	先崎	美穂
国際学部国際関係学科	3年	三野	舞子
国際学部国際関係学科	2年	小林	直美
国際学部国際コミュニケーション学科	3年	後藤	沙夕梨
国際学部国際コミュニケーション学科	3年	佐藤	彩

国内活動参加者

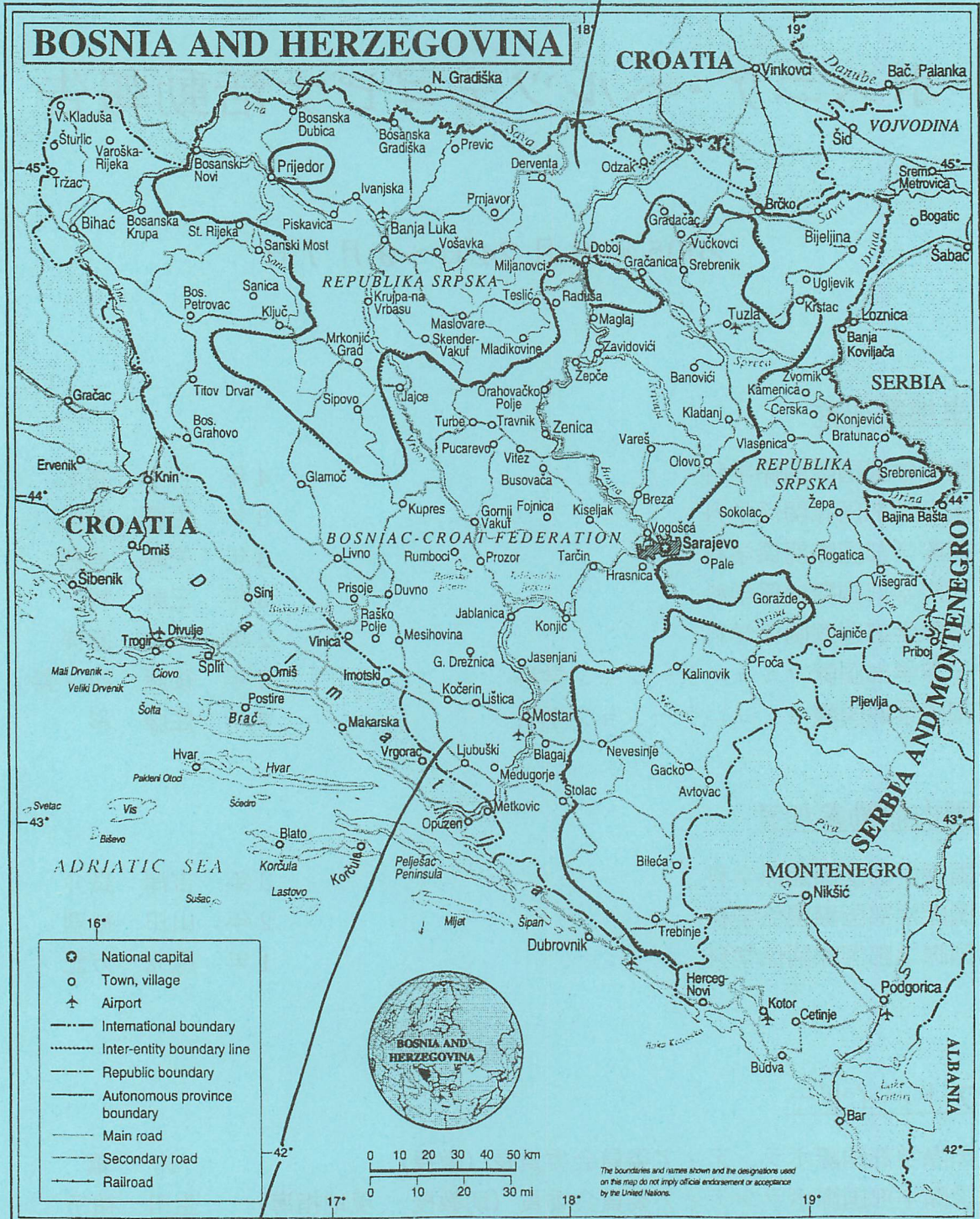
国際学部国際関係学科	3年	吉澤	良介
国際学部国際関係学科	2年	山田	裕理
国際学部国際関係学科	1年	尾立	万記

アドバイザー

国際学部国際ボランティア委員会委員長（教授）	林	薫
国際学部国際ボランティア委員会委員（助教授，現地指導）	生田	祐子
国際学部国際ボランティア委員会顧問（教授）	中村	恭一

スプリスカ共和国

ボスニア・ヘルツェゴビナ 国内地図



Map No. 3729 Rev. 5 UNITED NATIONS
June 2004

Department of Peacekeeping Operations
Cartographic Section

ボスニア連邦

活動スケジュール

- 8月24日（水曜日） 成田空港 第2ターミナル集合
・ 宅急便で送った文具類物資の受け取り
成田発<オーストリア航空052便>
オーストリア・ウィーン着
- 8月25日（木曜日） ウィーン発<オーストリア空港757便>
ボスニア・ヘルツェゴビナ サラエボ着
・ 現地 NGO とのリエゾンである泉谷晃氏（JICA 援助調整専門家/ボスニア・ヘルツェゴビナ政府・対外貿易経済省アドバイザー）と渡辺松男氏（JICA 専門家/経済政策首相アドバイザー）との会合
- 8月26日（金曜日） [午前]
・ 戦争中に救援物資調達用に作られたトンネルの視察
[午後]
・ 在サラエボ日本国大使館訪問：文教ボランティアズの活動について説明
・ オリンピックスタジアムにある墓地、サラエボ市街の見学
- 8月27日（土曜日） [午前]
・ プリエドールへ出発
[午後]
・ 地域の復興を支援する NGO である LDA のイゴールさん（通訳）とシモーネさん（職員）と合流：プリエドールでの活動について説明を受ける
- 8月28日（日曜日） [午前]
・ ホームステイ先に到着
[午後]
・ バニヤルカでオスマントルコ時代の建物を見学
・ オマルスカで強制収容所があった建物と付近を見学
・ セルビア正教会のお祭りに参加
- 8月29日（月曜日） [午前]
・ LDA の事務所で LDA の活動についてブリーフィング
・ Info Point（地域市民への案内所）を訪問
[午後]
・ NGO の PREDA（プレダ）訪問
・ UNDP が管理する公園を散歩
- 8月30日（日曜日） [午前]
・ ハンバリンのユースセンターを訪問
センターの説明/ムスリムの人々のお墓を見学
[午後]
・ アズラの家で昼食：ボスニア料理を提供するプロジェクト
・ ユースセンターで歌・踊りのパフォーマンス
・ 女性のサポートをしている団体を訪問
・ シャビチェさんの家で夕食：ボスニア料理を提供するプロジェクト
- 8月31日（月曜日） [午前]
・ ホストファミリーによる戦争体験の話を聞く
・ 修復中のユースセンターの視察
・ 戦争で未亡人になった人たちで運営する農園を視察
[午後]
・ アズラの家で昼食
・ コザラ山でパルチザンメモリアルのモニュメントを見学
・ イタリア学生ボランティアと現地ボーイスカウトとの交流会

- 9月1日（火曜日） [午前]
- ・ ルビアのユースセンターを訪問
センターの説明/子供たちと交流会
- [午後]
- ・ ユースセンターで歌、阿波踊り、日本紹介のパフォーマンス
 - ・ プリエドールの産業の中心である鉱山の見学
- 9月2日（水曜日） [午前]
- ・ スレブレニツアへ移動
- [午後]
- ・ スレブレニツアの UNDP を訪問：UNDP のプロジェクトのブリーフィングを受ける/日程の説明
 - ・ スレブレニツア市民ホールでリハーサル
- 9月3日（木曜日） [午前]
- ・ メモリアルパーク（戦争記念公園）見学
 - ・ ビジネスセンターを訪問：スレブレニツアの観光や天然資源について学習
 - ・ 博物館と図書館の見学
- [午後]
- ・ UNDP の戦争で家族を亡くした女性の自立支援プロジェクトを視察（サセの村を訪問）
- 9月4日（日曜日） [午前]
- ・ セルビア正教会を訪問：司祭とのミーティング
- [午後]
- ・ ビデオジャーナル（ビデオによる広報・記録）活動の高校生と交流：学生製作のビデオ上映とプレゼンテーション
 - ・ サッカー試合見物
- 9月5日（月曜日） [午前]
- ・ UNDP 訪問：酪農支援のプログラムについて説明を受ける
- [午後]
- ・ 農家を訪問
 - ・ セントラル小学校を訪問
 - ・ スレブレニツア市民ホールで合唱と阿波踊りのパフォーマンス
- 9月6日（火曜日） [午前]
- ・ メモリアルパークの見学
 - ・ サラエボに移動
- [午後]
- ・ 自由行動
 - ・ 泉谷氏と渡辺氏と夕食
- 9月7日（水曜日） [午前]
- ・ 在サラエボ日本国大使館訪問：ボスニア・ヘルツェゴビナでの活動報告/自由行動
- [午後]
- ・ 在サラエボ外交団昼食会議に出席
 - ・ サラエボにてボランティア活動を終了

ボスニア・ヘルツェゴビナ

基礎データ

面積	5.1 万 km ²
人口(2005 年 7 月現在)	402 万 5,476 人
首都	サラエボ
言語	ボスニア語、セルビア語、クロアチア語
宗教	イスラム教、セルビア正教、カトリック
民族構成 (2000 年)	ムスリム系 48%、セルビア系 37.1%、クロアチア系 14.3%

ボスニア・ヘルツェゴビナの歴史

ボスニア・ヘルツェゴビナはスロベニア、クロアチア、セルビア・モンテネグロ、マケドニアと共に旧ユーゴスラビアを構成していた国だ。この地域には 6 世紀末から 7 世紀初頭に南スラブ族が定住した。その後 12 世紀後半に中世ボスニア王国が建国されたが、15 世紀後半にオスマン帝国に支配されることとなった。オスマン帝国は約 400 年間ボスニア・ヘルツェゴビナを支配し、その間に多くの人々がイスラム教へ改宗した。

1878 年、カトリックの国であるハプスブルク帝国はオスマン帝国を破りこの地域を支配した。その後 1914 年のサラエボ事件をきっかけに第一次世界大戦が始まり、ハプスブルク帝国が崩壊すると、1918 年にセルビア人・クロアチア人・スロベニア人王国 (1929 年にユーゴスラビア王国と改称) が建国され、ボスニア・ヘルツェゴビナもそこに組み込まれた。この国家も長くは続かず、第二次大戦中の 1941 年にはナチスドイツの傀儡国家であるクロアチア独立国に支配された。この間、クロアチア人と一部のボスニア人はナチスと同様の人種政策を行い、主にセルビア人を大虐殺した。終戦後の 1946 年、第 2 のユーゴであるユーゴスラビア連邦人民共和国が建国された。ボスニア・ヘルツェゴビナは 1992 年までこの連邦国家を構成していた。

ボスニア紛争

(1) 旧ユーゴスラビアの解体

1980 年ユーゴスラビア建国の英雄であり、大統領であったチトーが死去する。強力な指導者を失った旧ユーゴは民族問題が表面化する。旧ユーゴはそれぞれの国で分権化が進み、各地域で大きな経済格差があった。特にスロベニアは旧ユーゴの中では経済的に最も豊かな地域だった。しかしユーゴは経済危機に陥り、スロベニアは「経済主権」の保持を目的に 1991 年に独立を宣言する。一方クロアチアでは民族主義が高まり、1991 年に独立を宣言する。クロアチアは民族自決権に基づくクロアチア人国家の創設を目指した。そのため、第二次大戦中のセルビア人大虐殺の過去から少数派になることを恐れたクロアチア内のセルビア人はユーゴスラビア国家軍隊の支援を受けて独立に反対し、クロアチア紛争が始まった。

(2) ボスニア紛争のはじまり

クロアチアの紛争は隣のボスニア・ヘルツェゴビナにも拡大した。1992 年 3 月、ボスニア・ヘルツェゴビナは旧ユーゴから独立を宣言し、ボスニアのムスリム人とクロアチア人の支持を受けたが、ユーゴスラビアとしてセルビアとのつながりを堅持したいボスニアのセルビア人は反発した。このためにセルビアの支援を受けたボスニアのセルビア人勢力と独立を求めるボスニア人 (ムスリム)、それにクロアチア人勢力が入り乱れてボスニアで内戦状態になったが、クロアチア、セルビアの軍事干渉により、ボスニア紛争という国際紛争状態になった。

紛争を終わらせるために、安全保障理事会は 1992 年 5 月解体後の新ユーゴスラビア連邦共和国 (セルビアとモンテネグロで構成) に対して経済制裁を実施した。紛争が激化してくると、ボスニアのセルビア人勢力は自らの領土拡大を目的に他民族を排除して民族の住み分けをするために「民族浄化」を行った。セルビア人勢力は強制収容所にムスリムとクロアチア人を集め、虐殺、暴行を繰り返した。そしてムスリムとクロアチア人

の女性に対するレイプを戦争の手段として使った。

ボスニアに派遣された UNPROFOR は人道援助の輸送を保護し、首都サラエボと安保理が 1993 年に「安全地域」と宣言した町（スレブレニツァ、ツツラ、ビハチ、ジェバ）をセルビア軍から保護することに努めた。セルビア人勢力のサラエボに対する攻撃を止めさせるために、北大西洋条約機構（NATO）は 1994 年に安保理決議に基づいて空爆を行った。1995 年 7 月、セルビア人勢力は「安全地域」に指定されていたスレブレニツァを占拠し、およそ 7000 人の非武装の男性や少年を虐殺した。これは第二次世界大戦後にヨーロッパで起こった最悪の虐殺事件であった。ボスニア紛争の犠牲者はおよそ 20 万で、難民となった人々はおおよそ 250 万人と推測されている。

（3）ボスニア紛争の終結

欧米諸国はこの事態に対し、ボスニア紛争を終わらせるための和平交渉に本格的に乗り出した。アメリカのクリントン大統領がオハイオ州デイトンで行った和平会談はボスニア・ヘルツェゴビナ、クロアチア、ユーゴスラビア間の 1995 年和平協定をもたらすことに成功した。それに基づいて連絡調整グループ（フランス、ドイツ、イタリア、ロシア、英国、米国）主催の会談を通して、ボスニアでの紛争を終わらせる協定がボスニア、クロアチア、ユーゴスラビアの間で結ばれた。協定ではボスニアをムスリムとクロアチア人の連邦国家と、セルビア人国家からなる連合体国家とし、領土はムスリム・クロアチア人勢力が 51%、セルビア人勢力が 49% を占めるように分割することに決定した。またこのデイトン協定では、旧ユーゴスラビアからスロベニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、マケドニアの独立が正式に承認された。セルビアとモンテネグロは新ユーゴスラビア連邦となった。

*UNPROFOR(United Nations Protection Force) : 国連保護軍

現在のボスニア・ヘルツェゴビナ

<政治体制>

政治体制は複数政党制に基づく共和制である。議会は二院制をとっている。ボスニア紛争後、ボスニアはムスリム系およびクロアチア系住民が中心の「ボスニア連邦」及びセルビア系住民が中心の「スプルスカ共和国」という 2 つの主体から構成されるひとつの国家とされた。それぞれの主体が独自の警察や軍を有するなど、高度に分権化されている。2000 年に実施された国政選挙では、中央レベル及びボスニア連邦において、紛争勃発後初めて社会民主党 BH を中心とする非民族主義政権が誕生した。しかし、2002 年 10 月の国政選挙の結果、非民族主義政権が伸び悩み、3 主要民族から成る大統領評議会議長の大統領評議会議員選挙では 3 名とも民族主義政党出身者が当選するなど、民族主義勢力が伸張した。同年 12 月、ムスリム系のテルジッチ氏（民主行動党副党首）が閣僚評議会議長（首相に相当する）に選出され、2003 年 1 月 13 日、テルジッチ内閣が発足した。

<経済>

主要産業は木材業、鉱業、繊維業、電力。今後は、観光地としても期待されている。特に、モスタルの橋は観光の目玉になるだろう。1 人あたりの GDP は 1,849 ドル（03 年推定）。失業率は公式には 44%だが、出稼ぎなどの影響を考えると失業率は 20%と言われている。通貨はコンベルティビルナ・マルカ(KM)。サラエボなどの都市部ではユーロも使うことができる。

<治安状況>

私たちが訪れた時は、治安は安定しており、危険はほとんど感じなかった。2005 年に紛争終結後 10 年を迎えたボスニア・ヘルツェゴビナでは和平は定着してきており、紛争で破壊された経済・社会インフラの回復も、国際社会の支援によって順調に進んでいる。政治的にも民主主義体制確立のための改革が進められており、2004 年 10 月の地方選挙も治安上の問題なく平穏に実施された。また、2004 年 12 月に、国際社会による治安維持の主体がそれまでの和平安定化部隊（SFOR）から EU 部隊（EUFOR）にスムーズに移行されたほか、2005 年 7 月のスレブレニツァ虐殺事件 10 周年記念式典といった大規模な国際行事も平穏裡に開催されるなど、

差し迫った危険性は低下しているとみられる。

<地雷>

紛争の際に埋設された地雷は未だ完全には除去されていないが、埋設場所はほぼ特定されており、引き続き除去活動が行われているので、紛争中に前線だった地域等の危険地域に立ち入らない限り事故の心配はほとんどない。

<民族>

イスラム教のムスリム人、セルビア正教徒のセルビア人、カトリックのクロアチア人が住んでいる。3民族は人種が違うわけではなく宗教の違いによって区別されているため、外見でどの民族に属するのかは分からない。

<言語>

ボスニア語とセルビア語とクロアチア語。この3つは方言程度の違いしかない。ボスニア語とクロアチア語の表記はラテン文字だが、セルビア語はキリル文字を使う。

参考文献

- 『ユーゴスラビア現代史』 柴 宜弘 岩波書店 1996年
『ボスニアで起きたこと』 伊藤芳明 岩波書店 1996年
『国際連合の基礎知識』 国際連合広報局 財団法人世界の動き社 2002年
外務省ホームページ http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bosnia_h/data.html
CIA ホームページ <http://www.odci.gov/cia/publications/factbook/geos/bk.html#Econ>

竹中 亮太 先崎 美徳



スタリモスト（モスタルの橋）

Sarajevo (サラエボ)

はじめに

サラエボはボスニア・ヘルツェゴビナの首都。各国の大使館や主要な建物が集中している。道も整備され、いくつかの主要な建物は再建されていた。しかし、アパートなどはまだ再建されることなく当時の傷跡を今に残している。紛争中、サラエボの市民は、隣に住んでいる違う民族の人たちのことを追い出しはしなかった。なぜなら、サラエボ市民はみな、ミリャッカ川 (Miljacka) をわたって反対側に行った人を敵とみなし、同じ砲弾の危険にさらされている人は同胞とみなしていたのだ。これは、ボスニア紛争の中でもサラエボだけだった。

オールドタウン

サラエボの中心街にあるオールドタウンの入り口にはシンボルとなっている小さな塔のようなものがある。その広場には多くの鳩が群れを成している。地面が見えないほどの多さだ。そこを進んでいくと町の中にも関わらずモスクが存在し、夜遅くには多くの人でにぎわう。川縁には国立図書館があり、今は復興中だ。紛争の最中に砲撃に合い未だ傷が残っている。1914年のサラエボ事件の現場はオールドタウンのすぐ近くにある。歴史にもある第一次世界大戦のきっかけでもあるこの出来事だが、モニュメントが建つ訳ではなく、道を挟んで反対側に小さく記録として残されている程度のものだった。また、紛争中には、オールドタウンを囲んでいるミリャッカ川 (Miljacka) を挟んだ状態でセルビア人の砲弾が毎日のように飛んできたようだ。未だに、壁には砲弾の後がはっきりと残っている。また、オールドタウンを少し離れ市街地のほうへ向かうと、活気あふれる市場がある。これは青空市場と呼ばれている。この市場では、紛争中に裏にある山から砲弾が飛んできて大勢の犠牲者を出した。今は記念碑が建っているが、誰もがそのようなことがあったなど覚えていないように、市場でいきいきと働いている様子を見ることができた。



トンネル

サラエボ包囲 (1992年5月～1995年12月) の期間、このトンネルはサラエボ市民の生命線だった。1993年初め、ボスニア政府軍 (ABH) によって、軍事目的のためにトンネルが極秘に掘られ始め、同年7月に完成した。トンネルは、幅約1.2m×高さ約1.6m、全長約760m。内部は木材で補強され、トタン板で壁がつけられている。その中に、トラック用の線路が敷設されている。このトンネルは体を屈めて入らないといけなほど狭いものだ。トンネルは、(イグマン山地方向) ブトミール地域からサラエボ空港の滑走路の下を潜って、ドブリニャ地区までつながっている。

サラエボ包囲中、セルビア系勢力 (RS/SDS) の迫撃砲や狙撃手からの銃撃から逃れ、安全に移動するための唯一の手段で、ボスニア政府軍は、このトンネルを使って食料や医薬品、武器弾薬を運び入れている。また怪我人の運搬にも使われていた。サラエボ市民が外部へ抜けられる唯一の道だったため、兵士の他、毎日数千の市民がこのトンネルを通っていた。トンネルは、どちらかの一方通行に時間ごとに決められていたため (狭いので対面通行は不可能だった)、とても混雑していた。皆、大きな物資を持っていたため、歩みは遅く、一人が立ち止まると後ろの人たちに影響してしまう。しかし、このトンネルは、成年男子だけではなく子供やお年寄りも利用していたが、とても辛く大変だったようだ。

オリンピック競技場

1984年の冬季オリンピックの開会式を行ったスタジアムだが、その隣には戦争の犠牲となった人々を葬るための広大な墓地が広がっている。かつてスポーツグラウンドだった土地が、増え続ける死者収容のために墓地に変えられていった。墓地にはまだ新しい白い墓標が並んでいる。ほとんどの墓標には「1992」もしくは「1993」という文字が刻まれていて、それを見るとわずか1、2年の間にあまりにも多くの人の命が奪われたことが伺える。今後も新たなお墓が増えつづけるため、オリンピックで利用され残されていた土地はどんどん墓地へと変えられていくことだろう。この広大な墓地は計り知れない重々しい雰囲気にも包まれた空間だった。



在ボスニア・ヘルツェゴビナ日本大使館

サラエボの中心地に位置していながら、あまり目立たないようにビルの二階にある。中に入ると警備は厳重で二重扉になっていた。そこで、疊（もたい）大使の話を聞かせていただいた。日本とのボスニア・ヘルツェゴビナ関係は、それほど強いものではない。ボスニア・ヘルツェゴビナに居住している人は23人程度で中国人は1000人以上、比較しても極端に少ないことが分かる。また、日本企業の投資もなく、交流は少ないということだ。そのため、私たちがボスニア・ヘルツェゴビナを訪れた事が日本とボスニア・ヘルツェゴビナの架け橋になれるといいと思う。特に日本では、紛争時の報道だけされ、復興段階であるという報道は取り上げられることが少なく、今のボスニア・ヘルツェゴビナの現状は知られていない。だから、私たちは日本での広報活動をしていかなければならない。

佐藤 麻美

Prijedor(プリエドール)での活動

<プリエドールとは>



セルビア正教会

ボスニアの北西部に位置する都市。ボスニア紛争中はセルビア人勢力の活動拠点となり、プリエドールのイスラム教徒（ムスリム）は近隣のコザラツに逃げた。プリエドールの周辺にはバニヤルカ・オマルシュカ・トルノポリの3箇所強制収容所があり、セルビア人兵士に捕まったムスリムはいずれかの収容所にいれられた。特にオマルシュカの収容所では、収容者を堅い軍靴で蹴りつけたり、女性をレイプするなど酷い拷問を行っていた。紛争が終結すると、収容者は解放され、クロアチアやドイツに逃げていた難民も戻って来たが、辛い体験を思い出すため、帰って来ることの出来ない人もいる。

現在は、崩れた家や真新しいお墓など紛争の跡を感じさせるものもあったが、10年で大分復興したように思われる。居住区域は、セルビア人側とイスラム教徒側で少し別れていたが、民族間の隔たりはなかった。道路も交通も整備され、電気や水といった生活要素に困ることもなかった。また、出会った人々も私たちに温かく受け入れてくれ、紛争を体験した辛さはあまり感じられなかった。

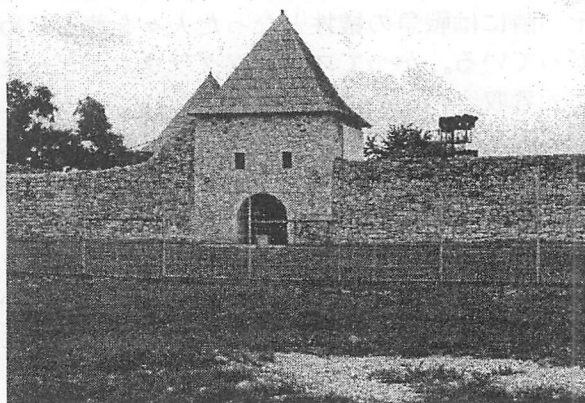
参考文献 伊藤芳明『ボスニアで起きたこと』岩波書店 1996年

8月28日

<プリエドール近郊視察>

Banja Luka バニヤルカ

本格的な活動は翌日からだったので、プリエドール近郊の視察を行った。最初にボスニア第二の都市であるバニヤルカを訪れ、オスマントルコ時代に造られた城壁（写真、右）、セルビア正教会を視察。建設中の教会もあった。セルビア正教会の特徴は、教会の中の壁に色鮮やかな宗教画が描いてあることで、どの教会も素晴らしかった。



Omarska オマルシュカ

バニヤルカ視察後、ボスニア紛争中に強制収容所として使われていたオマルシュカの鉱山へ。現在は石炭と鉱物の採掘処理を行っており、敷地内に入ることは出来なかったが、私たちが訪れた時も通常の業務を行っていた。その様子からはとても強制収容所であったとは考えられない。

Wooden church 木造の教会

オマルシュカの近くに、この地域では最も古い木造のセルビア正教会があるというので、見学に行った。木造の教会はオスマントルコ時代に造られ、馬が入って来られないよう入り口が小さく造ってあり、中は現在と変わらず鮮やかなフレスコ画が描かれていた。教会の外ではお祭りをしていて、ステージで伝統的な歌や踊りを発表していたり、出店があったりした。出店の中では、羊や鳥の丸焼きを食べていた。

8月29日

<NGO訪問>

今回私たちがプリエドールで活動する際のコーディネートでお世話になったNGOを訪問し、プリエドールでどのような支援を行っているのか尋ねた。

LDA (Local Democracy Agency)

イタリアのNGOであるLDAは、市民の民主化意識を向上させ、ボスニアがEUに加盟するための地域に根付いた活動を行っている。

主な活動内容は、小学生から15歳位の子供を対象とした民族共存のためのワークショップ、紛争中の辛い記憶を癒すための心のケア、20代～30代の若者に起業精神を教えるためイタリアへの企業訪問を行うなど、多岐にわたっている。私たちが今回活動を行ったHambarine(ハンバリン)とLjubija(ルビア)のユースセンターもLDAがサポートしている。

PREDA (Prijeđor Economic Development Association)

2003年に創設されたプリエドールの経済開発連合。主な活動は、青年の起業精神の訓練、起業のための教育、小・中企業のサポート、観光事業など。また、国内と国際的な組織との接触・協同の確立も行っている。



8月30日

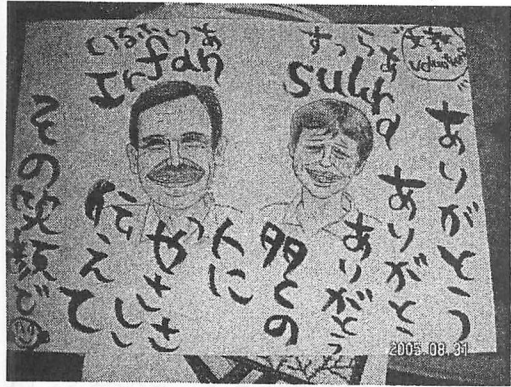
<ユースセンターでの活動1>

ユースセンターとは、その地域の子供たちが学校の後や休日遊ぶことのできる場所である。センターによっては、遊ぶだけでなくパソコンを教えたり、ドラッグやエイズの教育をしたりと、様々である。

最初に訪れたのはHambarine(ハンバリン)というムスリムが多く住む地域にあるユースセンターだった。このセンターの代表はAzra(アズラ)という女性で、センターができた経緯や行っている活動について話してくれた。

1992年の紛争開始後、多くの人々がハンバリンを離れ、外国に逃げる、またはトルノポリやオマルスカの強制収容所に送られた。紛争が終了して3年後の1998年に50人がハンバリンに帰ってきたが、住む家がなかったため現在のセンターで生活していた。翌年オランダのNGOが夫のいない女性・子供のために35の家を建て、スウェーデンのカトリック系NGOであるカリタスは老人・障害者のために物資を送った。そして、LDAの支援によってユースセンターを開くことになった。ユースセンターに来る子供は10歳～16歳で、中には7,8歳の子もいる。センターでは付近の清掃活動を行ったり、他のセンターとサッカー大会を行ったりしている。

センターについての話を聞いた後、近くの墓地まで歩いた。ハンバリンでは400～500人が紛争で亡くなったが、お墓は160程度しかなく、しかも皆新しくあった。墓地にはまだ遺体の見つかっていない人の墓碑があり、数え切れないほどの名前があった。



墓地から帰ると、アズラの家で昼食を食べた。食後、アズラの両親が紛争で体験したことについて話してくれた。

アズラには弟がいて、紛争当時モスタルの病院に入院していた。しかし、その病院は爆破され、弟は11歳で亡くなった。アズラと両親はトルノポリの強制収容所に連れていかれ、父は背中や足に怪我を負い、今も傷は残っている。アズラも口を殴られ、話すことに障害がある。2ヶ月後強制収容所を出てドイツに逃げ、カトリック系の団体に保護された。紛争終了後、99年にアズラ家族はハンバリンに戻ってきた。

辛い体験を涙ながらに私たちに話してくれた。紛争から10年経った今でも紛争で受けた心の傷は癒えていない。しかしアズラはセルビア人を憎いとは思っておらず、民族は互いに理解しあう必要があると話していた。

午後はセンターで私たちのパフォーマンスを行った。歌も踊りも子供たちに好評で、阿波踊りはみんなで輪になって踊った。センターの女の子たちからお礼の歌とダンスも見せてもらった。その後子供たちとお別れをしてセンターを出た。

<Sabic(シャビチェ)家で夕食>

ハンバリンを出て夕食をいただく予定になっているシャビチェ家へ向かった。シャビチェ家は7人家族。自給自足の生活をしていて、家の近くでは牛や羊、鶏などを飼っている。食事は水以外すべて手作りで、お酒も自家製だという。食後にはダンスを見せてくれて、お返しに私たちも阿波踊りを踊った。私たちがこうして食事をするによって、もてなしてくれた家族は現金収入を得ることができるのだと、今回企画してくれたLDAの方が言っていた。私たちにとっても地元住民と交流できる良い機会であった。

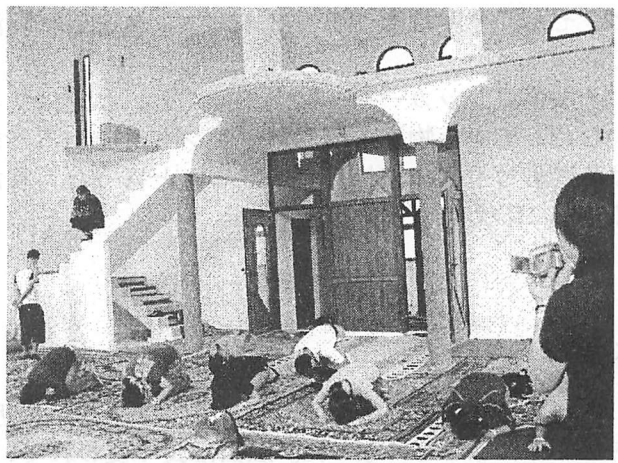
8月31日

<修復中のユースセンター、建設中のモスク>

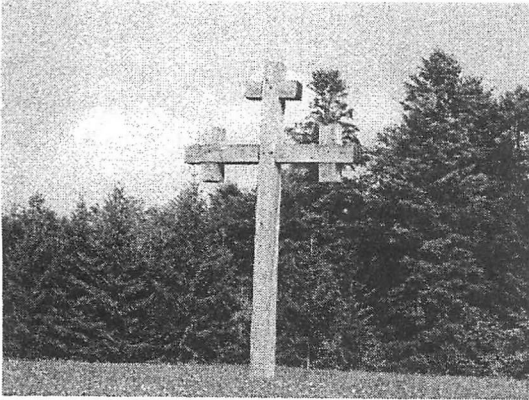
翌日はCharakovo (チャラコボ) に行き、アズラと共に修復中のユースセンターを訪れた。ここは地元の人々が場所を提供し、イタリアのNGOが修復のボランティアを行っている。建物は正面の壁がなく、階段もむき出しの状態、修復には相当な時間が必要だと感じられた。

その後、近くの建設中のモスクへ行った。モスクの中は、絨毯が敷き詰められているほかは何もなかった。二階へと続く階段を上ると、ミナレット(モスクの外郭に設ける細長い塔)の入り口があり、特別に登らせてもらった。ミナレットの中は狭く、螺旋階段が続くため、降りてくるとめまいがした。

昼食は前日同様アズラの家で食べた。二日間お世話になったアズラと両親に歌(ふるさと、I have a dream)と似顔絵、うちわ、祭りのポスターをプレゼントした。アズラと両親は私たちの歌を聞いて、言葉がわからないにもかかわらず涙を流していた。私たちは、短い間ではあったけれど温かくもてなしてくれた家族への感謝の気持ちでいっぱいだった。



<コザラ山>



午後はリエドールから近いコザラ山で活動した。

コザラ山はボスニア紛争中リエドールの人々がセルビア人勢力の攻撃を避けるために逃げた山である。コザラ山に登ると国立公園があり、公園には十字架に似たモニュメントがあった。それは第二次大戦時のコザラの人々の勝利を表したもので、第二次大戦の墓碑もあり、リエドールだけでなくさまざまな町の人の名前が彫られていた。

コザラ山ではイタリア学生ボランティアと現地ボーイスカウトと交流。高校生くらいの男の子と女の子が20名ほどいた。写真を撮ったり英語の歌を歌ったりしたあと、私たちのパフォーマンスを披露して皆で阿波踊りを踊った。

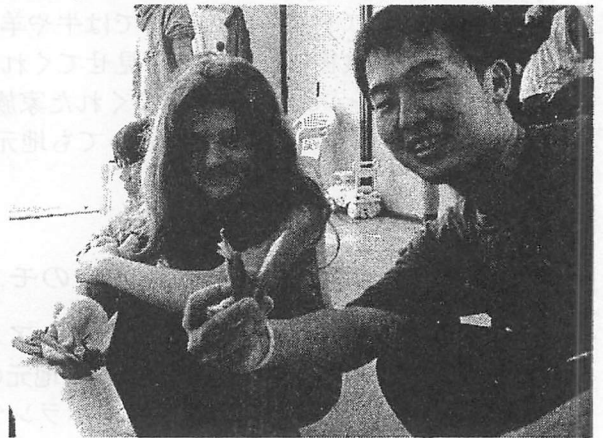
9月1日

<ユースセンターでの活動2>

9月1日はリエドールでの活動最終日。最後に訪れたのはステイ先から車で30分ほどのLjubija(ルビア)という地域にあるユースセンター。ルビアはムスリム人、セルビア人、クロアチア人が混在している地域で、国内避難民と難民が集合住宅に住んでいる。紛争前は1万8千人程が住んでいたが、現在は人の出入りが激しいので人数の確定はできないが、1万~9千人程に減ったという。ユースセンターは元々文化センターで、今は代表であるSanela(サネラ)が管理している。サネラは20代の女性で、足が悪く、歩くのに少し障害がある。また、サネラの母親が最近病気になり、サネラはセンターの管理と母親の看病の両方を行っている。センターはLDAのサポートによって始められ、夏にはイタリアから学生がボランティアに来ている。LDAの他にも、ルビアには病院がないため、ボランティアの医師が来たり、UNICEF(ユニセフ、国連児童基金)がパソコンとテレビを寄付したり、カリタスが財政支援を継続的に行っている。しかし、冬に盗難に遭いパソコンとステレオが盗まれてしまい、私たちが行った時には5台ほどしか残っていなかった。また、カリタスからの財政支援も2006年に切れてしまうため、その後のセンター運営が心配である。

センターの説明が終わると、センターに来ていた子供たちと日本のおもちゃで遊んだ。ダルマ落としやおはじき、折り紙、子供達はとても楽しそうだった。昼食後、センターの女の子6人がダンスを見せてくれた。皆大人っぽくて、上手だった。そして今度は私達がパフォーマンスをし、阿波踊りを皆で踊った。

子供達がサッカーをしに出て行くと、私達はサネラに日本から持ってきた物資を渡した。センターを出るとき、サネラは名残惜しそうに来年も来てほしいと言った。私達もその気持ちに応えたいと思った。

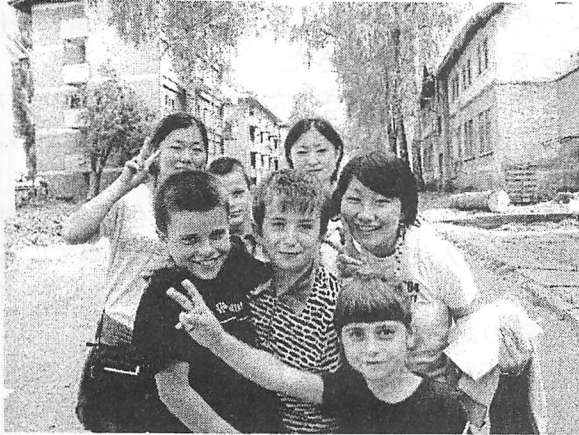


<鉱山見学>

ユースセンターを後にした私たちはセンターの近くにある鉱山を見学した。管理人が私たちに鉱山の中を案内してくれることになった。鉱山は長く使われていなかったが、来年からまた動き出すようだ。最初に湖ほどの大きさがある、採掘で出来た穴に雨水が溜まったところを見学し、その後鉱石を精製する施設も見学した。施設は長い間使われていなかったせいか錆びていて、来年から動き出せるのか不安に感じたが、早く鉱山に活気が戻ってきてほしいと思った。

<活動を終えての感想>

リエドールの活動では主にイスラム教徒が多く住む地域を訪れたが、私たちが出会った人々は、民族は共存すべきだという考えの人が多かった。紛争中に酷い仕打ちを受けたにも関わらず、憎むことなく共存の意識を持てることは心が非常に寛大で、強いと思った。



センターの子供たちとは短い時間ではあったが一緒に遊んだり、踊りを踊ったり楽しい時間を過ごせた。日本人が珍しいせいか、どこに行っても人気者だった。私たちは皆名刺を持っていったのだが、これが子供たちに人気で何枚も欲しがっていた。無邪気でかわいい子供たちと遊んでいるときは、そこが紛争地だったことを忘れていた。

私たちにはリエドールで見たもの、聞いたことを伝える責任がある。そして、一人でも多くの人に今のボスニアを知ってもらいたいと思う。

小林 直美

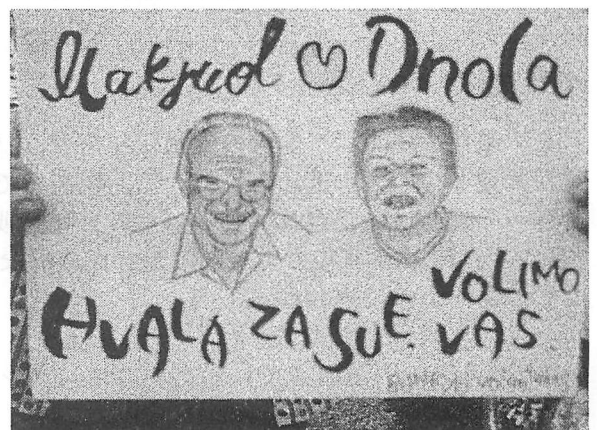
ホームステイ (Prijeedor : プリエドール)

8月28日から9月2日までの5泊6日の間、私達は、リエドールでムスリムの家庭に温かく迎えられ、ホームステイを経験した。ホームステイでの環境は、ここが10年前に紛争があったボスニアということを知ってしまう程、隅から隅までとても準備されており、大変良い環境で生活することができた。また、ここでの共同生活が、私たちの絆を更に深いものにさせた。ここでは、毎晩物資の仕分けやうちわ作りに奮闘した。

<宿泊先での家庭環境>

ホームステイ先は、モーウィッチ家のマックス（ホストファーザー）とドーダ（ホストマザー）の二人の温かい家族だった。二人は、いつも温かな笑顔で私達を迎え入れてくれた。言葉は通じなかったが、身振り、手振りや表情でだいたいことは察することができ、何より私達を受け入れてくれているという温かい笑顔が私達を安心させた。また、二人とコミュニケーションを行うにあたって、「ドブロ (Good)」、「フバラ (Thank you)」, 「Hello」をいつでもどんな場面においてもお互い使い合っていた。

朝食では、毎日違う手の込んだ家庭料理が出された。例えば、ボスニアの代表的な家庭料理であるブーレック(チーズや肉入りのパイ)、クレープ巻き、トルココーヒーなどが出された。また二人は、私達の事をディズニーの白雪姫に登場する七人の小人のようだと愛らしい表現で表してくれた。



<ホストファミリーのボスニア紛争での経験と現状>

紛争が始まり、家族は難民として1994年8月にボスニアを出た。現在、3人の子供達は難民として逃れ、そのままイタリアのミラノ、ドイツのミュンヘンに移住している。



戦時には、全ての財産が、セルビア人兵士に奪われた。また、家はセルビア人兵士に不利な誓約書を書かされ奪われそうになったが、戦争中であったということで誓約書は無効となり、家に戻ってくる事ができた。

プリエドールで、一晩で28人が殺されたことが一番辛い経験だと語っていた。二人は、ストレスで病院に通っていたこともあるという。

現在、二人は年金暮らしをしており、年金だけでは生活が困難なために、ホームステイの受け入れを積極的に行い、収入を得ている。そんな現状の中、私達がホームステイをし、二人の現金収入の一部になれたことは大変意義のあることであると思う。

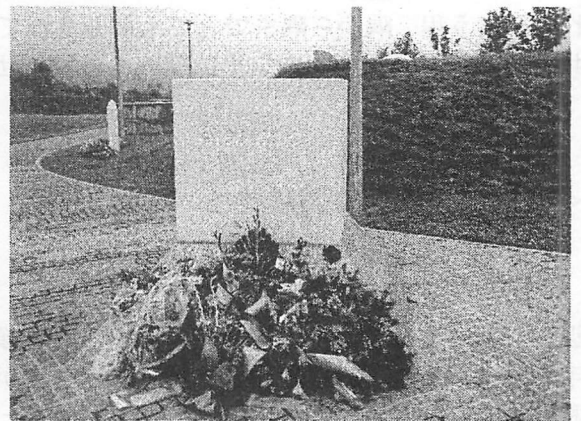
ホストファミリーにとっても恵まれ、充実したプリエドールでの生活を過ごすことができたことを、今またここで感謝したい。

後藤 沙夕梨

(バレーコ) Srebrenica(スレブレニツァ)

<スレブレニツァの悲劇から10周年>

2005年7月は、第2次世界大戦後のヨーロッパで最悪の戦争犯罪から10年という節目であった。ボスニアの小さな都市スレブレニツァでは、犠牲者の追悼式が行なわれた。追悼式にはその家族数万人と世界各国の政治家が出席した。EU外務委員ハビエル・ソラナやその他国際機関の代表が、ヨーロッパと国連は不名誉にも無力であった、と述べた。1995年7月にボスニアのセルビア人勢力が当時国連保護地域であったスレブレニツァと難民収容所ポトチャリを蹂躪した。その後数日間で彼らは約7~8千人のムスリムの男性と少年を殺害したが、オランダの国連軍はなすすべなく傍観した。この殺戮に主たる責任がある元ボスニアのセルビア人指導者ラドバン・カラジッチとその軍事面の責任者ラトコ・ムラジッチの行方は今なお地下に潜伏している。



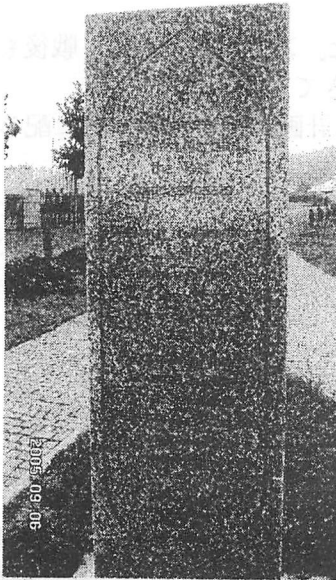
<難民について>

この数年のボスニア国内の緊張緩和を受け、包括和平でセルビア人住民多数となったスレブレニツァへの難民帰還も少しずつ進められている。現在まで広域スレブレニツァに老年層を中心に約4000人が帰還、市街部への帰還はまだ遅れている(IWPR「戦争と平和報道機関」7月6日付)。しかし青年層の帰還が進まない主因は、和平直後のような政治=民族的な理由から、山間の経済後進地域であるという経済的理由に移行しつつあるように思われる。

9月2日から9月6日まで、私たちはスレブレニツァ市内で活動をした。

<バッテリー工場>

メモリアルパークから、通りをはさんで向かい側にあるバッテリー工場には、紛争時たくさんの人たちが収容され、そこで殺害された。美しい景色の中の一本道にあるこの建物の周りだけ、暗く重い空気が漂っていた。



<メモリアルパーク>

戦争中には国連保護軍オランダ隊の本拠地だった場所に、2年前つくられた中央慰霊堂の横には、殺害され身元が確認された約 1800 体の広大な墓地となっている。現在も集団墓地などの発掘、身元同定作業が続けられているため、さらに増えることも予想されてたくさんの土地が用意されている。また、小さな写真展示施設や記念碑(写真、左)もあり、お墓の近くの記念碑には、“We pray to Almighty God, May grievance become hope! May revenge become justice! May mothers’ tears become prayers That Srebrenica Never happens again To no one and nowhere!”という言葉が刻まれており、人々が心から平和を願っていることが伺える。

<UNDP (国連開発計画) >

アレックス・プリエト所長と各国からの国連職員の方々が見え、パワーポイントを使って、UNDP のスレブレニツァでのプロジェクトについての説明を受けた。昨年の活動では資金を使いすぎたため、今年はきちんと使い道を絞っていかうというリアルな話も聞くことができた。スレブレニツァは戦前、3.6 万人ほどの人口だったのだが、現在は 1.2 万人ほどに減っているようだ。しかし常に人が動いているため、正確な人口を把握することはできないようだ。また、異なる民族間でのディスカッションの大切さも語ってくれた。オープンに話すことで、和解が実現できると考えている。

また、復興計画の一部として UNDP の支援を受けている酪農家たちを訪問した。家業の牛を提供し、技術指導をし、自分の食料の確保と同時に、ミルクなどを売って現金収入を作るプロジェクトを進めているという。この計画は、ドイツ、オーストリア、オランダの支援で行われている。これにより、生活が豊かになっている様子も見ることができた。

<ビジネスセンター>

ここは、地域新聞を発行する info center や図書館、町の歴史を紹介する博物館、300 人ほどが収容できる大ホールなどがある市の中心的な施設である。施設としてだけではなく、市のビジネスを活発にするための活動も行われている。仕事を持たない人へ起業の支援をしたり、観光の可能性を模索したりしている。また、スレブレニツァは道路や鉄道などの設備が十分ではないことから産業が活発になりにくい現状なので、改善する必要があるとおっしゃっていた。

ここの大ホールで、私たちはファイナルステージを飾ることとなった。たった二日で計画を練り、ポスターを作りスレブレニツァの人たちに広めた。当日は、満員とまではいかないが、子供から大人までたくさんの人が見に来てくれた。その中にはホテルのオーナー支配人、アブドラさんや UNDP のアレックスさんやギーさんも見に来てくれていた。浴衣と甚平に着替え、計画したとおりに、阿波踊り、合唱を披露し、最後には手作りのうちわをプレゼントした。公演中、入り口にはポリスが立っていて、警戒の強さを物語っている。終わった後はインタビューを受け、町の月刊ジャーナル誌には写真付で掲載されていた。



<Sase (サセ) の村>

ここサセという村には、未亡人の女性が住んでいて、お話を聞かせてもらった。この人たちは、戦後もボスニア人、セルビア人が一緒に暮らそうという意識が強く、手を取り合って生きているようだ。

この人たちは、自給自足の生活をしている。UNDP からの支援で、羊を配る計画があるが、実際に配るまでにはいろいろな調査の必要などがあり、莫大な時間がかかってしまうようだ。

この女性は、戦争中に夫や家族を失っている。しかし遺体が見つかっていない方が多く、今でも情報を待っている状態だという。愛する人が亡くなったのに、その人がどこでどのように亡くなっているか分からないという彼女たちの心境を考えると、胸が痛くなった。そして、そんな状況でも力強く生きている彼女たちは、私たちの想像を絶する強さを持っていると思う。

<高校生との交流>

映像の勉強をしている現地の高校生と、交流をすることができた。彼らは、オランダの NGO の支援で、機材や技術を得ているという。私たちは、紛争後のホテルをパロディ映画にしたものを見せてもらった。映画の中で、紛争前にはスレブレニツァ 1 だったホテルは、すっかり廃墟になっていた。映画を見せてもらった後、私たちは日本の紹介として用意してきたプレゼンテーションを発表した。まず日本の都市の紹介をし、文教大学、文教ボランティアズの紹介、少子化やフリーターなどの社会問題、戦争特に広島原爆投下についての発表をした。彼らはとても熱心に聞いてくれていた。あまり時間はなかったが、同世代の人と考えを共有できたことは、貴重な体験だった。



プレゼンテーションの後には、一緒に地域対抗のサッカー試合を観戦した。スレブレニツァ・チーム対隣町ミルチ・チームとの対戦であったが、この 2 チームでのサッカー試合は紛争後初めてのもので、およそ 15 年ぶりだそうだ。とても貴重な機会にめぐり合えたことを幸運だと思った。確かに、サッカー場の周りにはイタリア軍や EUFOR (国連平和維持軍を引き継いだヨーロッパ治安維持軍) 兵士がたくさんいて、なにか異様な雰囲気も感じられた。補足だが、このサッカー場は紛争時、病人を乗せ避難させたり、物資などを運び込むためのヘリの離着陸場として利用されていた。そういうことを考えると、何気なく接していたもの全てが、リアルに紛争というものを感じさせる。

<小学校>

セントラル小学校に物資を届け、校長先生と面会した。その先生はセントラル小学校とポトチャリ小学校の校長を兼任している。現在、ポトチャリ小学校には 18 人、セントラル小学校には 300 人ほどの生徒がいて、そのうちの 30% をボスニア人、70% をセルビア人、5% を少数民族のロマが占めている。教師のほうは 75% がセルビア人だそうだ。授業に関しては、まだ検討中なので「歴史」は教えていない状況だという。紛争中にはムスリムが多く住んでいた地域であったスレブレニツァだが、今ではセルビア人が大半を占めていることから、戦後 10 年の変化が伺える。

また、セントラル小学校は日本の支援もあって建てられたものらしく、日本への感謝状が飾られていた。ODA の JAPAN バスといい、ところどころで誇らしさを感じることができた。しかし同時に、大々的に日本が支援したことを強調していることに少し違和感を覚えた。

参考文献

「旧ユーゴ便り」 <http://www.pluto.dti.ne.jp/katu-jun/yugo/backnumb/yugo0083/>

「ドイツのニュース」 <http://page.freett.com/germtopnews/20050711.html>

「OSIPP NEWS LATTER」 <http://www.osipp.osaka-u.ac.jp/newsletter/97-00NL/97-4/7men.html>

外務省 海外安全ホームページ <http://www.anzen.mofa.go.jp/info/info4.asp?id=191>

パフォーマンス (歌・阿波踊り)

私達は、現地での交流をより意義深いものにするため、歌と阿波踊りを練習してボランティアに参加した。歌の指導では声楽家の伊丹芳子先生、阿波踊りでは国際学部教授の小林勝法先生の協力を得ることができ、有意義なパフォーマンスができた。毎回、試行錯誤を重ね、パフォーマンスは回を重ねるごとに上達していった。

歌

- ・ I have a dream
- ・ 今日の日はさようなら
- ・ ふるさと
- ・ 上を向いて歩こう
- ・ トトロ

阿波踊り

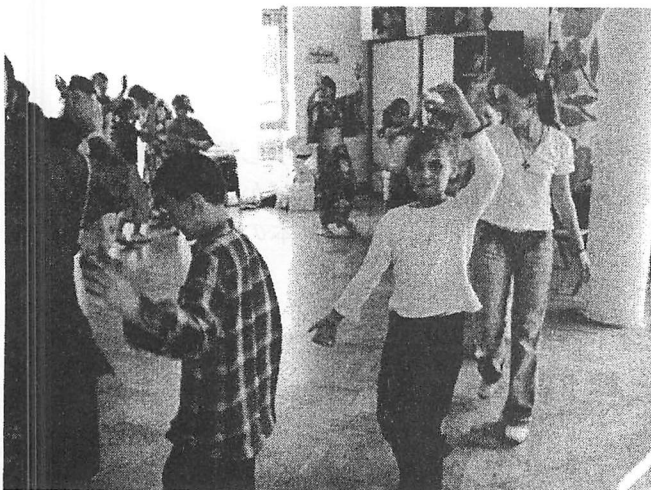
- ・ フォーメーション
- ・ 現地の人と輪踊り

<事前準備>

まず、歌については、昼休みや水曜日の集まりの時間に練習を重ねていった。I have a dream では、本格的にソプラノとアルトに分かれ行っていった。伊丹先生の指導では、基本的な歌い方や表情、また、歌うことの楽しさを再認識させていただいた。阿波踊りについては、小林先生の指導の下、男踊り、女踊り、鉦(かね)に分かれ、練習を重ね、7月末に大和阿波踊りにもにわか連として参加し、阿波踊りのおもしろさを認識していった。



<現地での活動>



現地でのパフォーマンスは、日本の文化を紹介、また阿波踊りでの男踊り、女踊りを分ける意味でも浴衣と甚平を着て行った。歌は伊丹先生によるピアノ演奏のCD、阿波踊りは小林先生が貸してくださったCDを使った。パフォーマンスは、ユースセンターでのパフォーマンス披露やお世話になった人への感謝とお礼を込めてプレゼントした。具体的に挙げてみると、Hambarine (ハンバリン) のユースセンター、夕食をいただいた Sabic (シャビチェ) 家のみなさんに阿波踊りのお返し、紛争中の体験を聞かせていただいた Azra (アズラ) さんの両親に歌のプレゼント、ボーイスカウトの前での披露、Ljubija (ルビア) のユースセンター、ホストファミリーに歌のプレゼント、Srebrenica (スレブレニツァ)

のホールでの公演、各国駐在大使の前での平和を込め歌った I have a dream と計 7 回、披露する機会があった。どの機会のパフォーマンスであっても、現地の人に受け入れられ、目には見えない現地の人との心と心のつながり、心と心のボランティアができたと思う。現地でのパフォーマンスは、大変意味があったと感じている。また、トトロの紙芝居の披露、手作りうちわの配布、文字入り似顔絵のプレゼント、みんなのメッセージ入り大和にわか連のハッピーのプレゼントなど、手作りのプレゼントはとても喜ばれ、意義のあるものだったと感じた。

後藤 沙夕梨

プレゼンテーション

事前に、高校、大学レベルのプレゼンテーションを用意していたのだが、小さい児童向けのユースセンターに訪れることが多かったため、急遽現地でプレゼンテーションを組み直すことにした。大使館からいただいたポスターを使い、日本の地理、都市についての簡単な紹介を新しく作り、児童向けにはそちらの発表をした。高校生と交流する機会が一度だけあったので、そのときに事前に作ったプレゼンテーションをした。

ユースセンターでの発表

ポスターと地図を用い、簡単な日本の都市
(東京・横浜・富士山・京都) の紹介をした。



スレブレニツァでの発表

自分たちが事前に用意した、日本紹介のプレゼンテーションを、パワーポイントで行った。

<亮太、麻美チーム>

文教大学、文教ボランティアズについての紹介。
日本語、四季、食べ物の紹介。

<舞子、直美チーム>

少子化、若者の政治離れ、フリーターなどの日本の社会問題の紹介。
⇒最も興味を示してくれ、質問の嵐でした！

<美穂、沙夕梨、彩チーム>

日本の戦争、特に広島での原爆投下についての紹介。



どの発表でも、聞き手の方は興味を示し熱心に聞いてくれていた。遠く離れた小さな島国、日本だから、彼らにとって知らないことが多かったと思うが、日本のことを少しでも知ってもらえたことをうれしく思う。

佐藤 彩

ボスニア・ヘルツェゴビナボランティア活動総括

はじめに

文教ボランティアズがボスニア・ヘルツェゴビナで活動を行うのは今回が3回目となる。私たちは紛争が終わってから10年が過ぎた地が現在どのような状況なのか、ボランティア活動によって少しでも現地の人々の役に立てるのか、日本ではできない体験を通じて自分が成長できるかなど、この活動に対して様々な思いを胸に現地へ行った。帰国後に行ったディスカッションでは全員が活動に参加したことに満足し、得るものがあったと答えた。そのディスカッションで議論されたことをもとに今回の活動によって私たちが何を得たのか、現地の人にどんな影響を与えたのかをまとめた。

日本国内での活動準備

現地では日本で準備したこと以上の活動は行えない。そのため、私たちは活動準備に力を注いだ。茅ヶ崎駅前での募金活動、物資収集活動、現地での交流のための阿波踊り、歌、日本紹介のプレゼン練習のほか自分たちの旅費を工面するためのアルバイトなどやるべきことは多かった。しかしその多忙な時期があったからこそ現地で意義のある活動ができたのだと思う。

準備段階で特に感じたことは、広報活動の重要性だ。今回、茅ヶ崎版のタウンニュースや、ふれあい朝日、神奈川新聞に私たちの活動の記事を掲載していただく機会があり、それによって茅ヶ崎市民の方々から多くの物資を提供してもらうことができた。周囲の人々の協力によって支えられている私たちの活動にとって、多くの人に私たちの存在を知ってもらうことはとても重要だ。

現場へ行くことの意味

紛争時に起こったことを知るには現地を訪れるよりむしろ日本で日本語の書籍を読み、映像や写真を見たほうが効率的だ。それでは過去の紛争地に訪れたことはどういう意味があったのか。それは傷跡を生で見て、人々と触れ合うことによって、紛争を肌で感じることだ。

日本で生活している私たちには紛争を身近に感じる機会はない。私たちはボスニア・ヘルツェゴビナの各地で10年前の紛争時の話を聞き、建物など紛争の傷跡を見た。その経験は私たちにとって衝撃だった。難民として外国へ出ていた人、親兄弟や配偶者が殺害された人、いまだに親族の遺体が見つからない人、銃が打ち込まれた跡のあるマンション、放火され外壁だけが残った家、同じ時期に建てられた無数の墓、虐殺があった強制収容所。ボスニア・ヘルツェゴビナ滞在時に紛争を感じないことはほとんどなかった。

帰国後に参加者全員で行ったディスカッションでは全員がこの活動に参加したことに満足していると答えた。その理由の主なもの、紛争をリアルに感じることができ自分の世界が広がった、世界で起こる様々な事件を身近に感じるようになった、といったものだった。私たちは当然これからも日本で生活していくが、国外の貧困、紛争、環境、人口問題などを以前よりも近くで起こっていることと感じ、日本に住む一人としてどう関わっていけばいいか考えるようになった。これは大きな変化であり、活動の成果だと思う。

学生によるボランティア活動について

私たちがボスニア・ヘルツェゴビナで行ったボランティア活動は、阿波踊りや歌、日本紹介などの国際交流と文房具などの物資支援、NGO活動のための資金支援の3つだ。何人かの参加者は活動の前半に踊りや歌などのパフォーマンスをすることが現地の人々にとってどのような意味があるのか、ただの自分たちの自己満足なのではないかと感じていた。

私たちのボランティア活動は住宅再建、経済開発といった国際機関やNGOなどが行うようなものではない。そのため現地の人々の役に立ちたいという思いが強いほど自分の無力さを感じてしまう。しかし私たちは活動をしていくなかで、学生だからこそできるボランティアがあるという結論を出した。

私たちは現地で多くの人々とコミュニケーションをした。そして日本の甚平や浴衣を着てパフォーマンスを

行い、時には阿波踊りを共に踊った。紛争後 10 年経ち、世界の関心も低くなったことで現地の人々は世界からの疎外感を感じていたかもしれない。遠いアジアの国からまったく違う文化を持つ学生が来て、パフォーマンスをするという私たちの活動はそれを払拭する機会になったのではないか。そして学生だからこそ相手も抵抗感なく私たちを受け入れ、このような活動が成功したのだと思う。学生には国際機関、NGO が行う目に見える支援とはまた違った、目には見えない形での支援ができるのだ。

今後の活動

私たちは現地での活動を無事に終えた。しかしこの活動はまだ終了したわけではない。今後は多くの日本人々に私たちが見てきたものを伝えなければならない。日本の募金や物資提供によって協力していただいた方々への説明責任はもちろん、それが私たちのために紛争時の体験談や現状を話してくれた現地の人々への恩返しになると思う。

友人にボスニア・ヘルツェゴビナでの活動を話すと、まず危険ではないのか、という反応が返ってくる。中にはまだ紛争中だと思っている人もいる。それだけ日本で生活しているとボスニア・ヘルツェゴビナの情報が入ってくることはないのだ。このマイナスイメージは現地経済の、特に観光産業の発展を阻害する。現地の正しい情報を伝えることは発展の可能性を広げることになるのだ。

また、私たちの報告を聞いてボスニア・ヘルツェゴビナやボランティア活動に興味を持ってもらえる可能性もある。それは私たちの活動の継続していくために不可欠だし、全く違うところで新たなボランティア活動が生まれるかもしれない。多くの人々に私たちの活動を伝えることで様々な可能性を生むことができると思う。

終わりに

今年も大きなトラブルもなく参加者全員が無事に帰国することができた。私たちのほとんどは紛争のあった地域に訪れた経験がなく、中には海外旅行が初めての者もいた。そのため出発前には不安を抱いていた者も多かっただろう。しかし現地では全く危険を感じるようなことはなく、全員がこの活動に参加したことに満足している。それは活動に参加する機会を与えて頂いた文教大学ボランティア委員会の先生方、多くの情報を提供して頂いた現地の国際機関や NGO の方々、茅ヶ崎市民や参加者の母校の方々、日本で活動をサポートしてくれた後方支援の学友や活動を理解し協力して頂いたすべての方々のおかげだ。私たちは文教ボランティアズを様々な面からサポートして頂いた全ての人々に心から感謝している。

竹中 亮太



Handwritten text at the top, including "9.6" and "2009".

Handwritten text in the upper middle section, including "Message" and "Peace".

LOVE & PEACE

Large block of handwritten text at the bottom, including names like "Mami", "Miko", and "Eto", and phrases like "人生に生かされる" and "愛を分かち合う".

東ティモール活動報告

2005年8月22日～9月4日

現地参加者

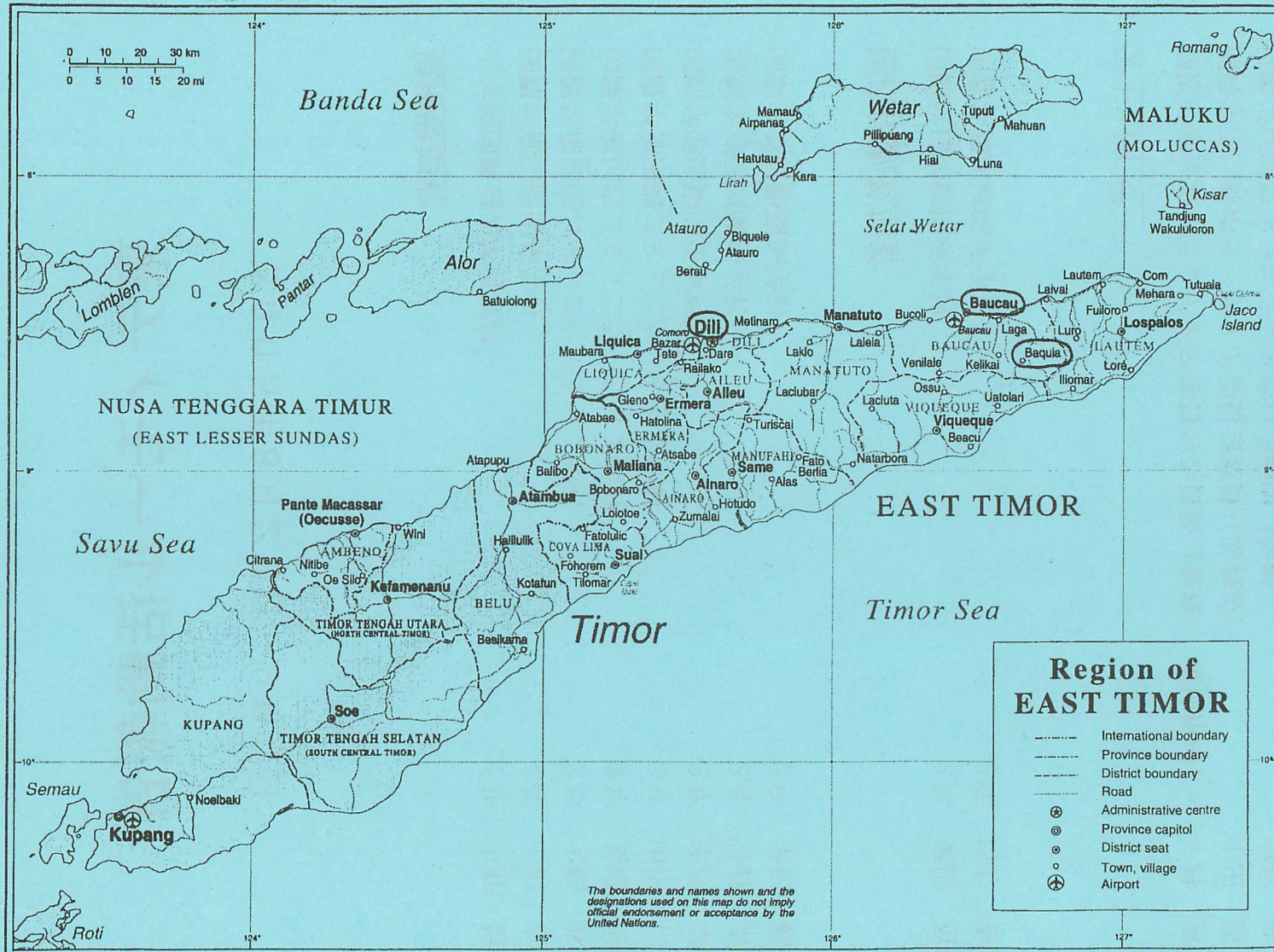
大学院国際協力学研究科	1年	中野	悠太
国際学部国際関係学科	4年	小椋	友季
国際学部国際コミュニケーション学科	3年	大嶋	麻美
国際学部国際コミュニケーション学科	3年	長南	尚実
国際学部国際コミュニケーション学科	3年	山田	和美
国際学部国際関係学科	2年	糸洲	幸恵
国際学部国際関係学科	2年	外谷	未来
国際学部国際関係学科	2年	米田	彩香

国内活動参加者

国際学部国際関係学科	2年	栗田	裕紀子
国際学部国際関係学科	2年	白井	希美

アドバイザー

国際学部国際ボランティア委員会委員長（教授，現地指導）	林	薫
国際学部国際ボランティア委員会委員（助教授）	生田	祐子
国際学部国際ボランティア委員会顧問（教授）	中村	恭一



Map No. 4117 Rev.2 UNITED NATIONS
January 2000

Department of Public Information
Cartographic Section

東ティモール 国内地図

出典 EU

東ティモール活動日程

8月22日(月)

【午後】

- ・成田空港に集合
- ・ホテルへ移動／ホテル成田に宿泊

8月23日(火)

【午前】

- ・成田空港へ移動
- ・成田まで送った支援物資を引き取りに行く
- ・出国手続き／成田空港発

【午後】

- ・シンガポール経由でバリへ入国
- ・デンパサール空港に支援物資を預ける
- ・ホテルへ移動／バリのホテルに宿泊

8月24日(水)

【午前】

- ・ホテルよりデンパサール空港へ移動
- ・デンパサール空港発／東ティモール着

【午後】

- ・ディリ市内にある DonBosco (Comoro) 着
- ・用意していただいた昼食をいただく
- ・移動／OISCA へ行く途中、一昨年行った植生の生育状況を見学。
- ・OISCA 着／OISCA の方々と Meeting
- ・農園見学やレタスを植える手伝いをする
- ・OISCA の施設に宿泊

8月25日(木)

【午前】

- ・施設内掃除／朝のラジオ体操
- ・農作業の体験とお手伝いを行う
(苗床作り・鶏小屋掃除・種まきなど)

【午後】

- ・農作業続き
- ・センター内に記念樹を植える
- ・OISCA (リキシャ) を出発／移動
- ・“LEADER”というお店で、孤児院で必要な備品や食料などを購入。
- ・DonBosco (Comoro) に宿泊

8月26日(金)

【午前】

- ・DonBosco でリトさんと植林で植える苗木など、事務的なことについての打ち合わせを行う。
- ・タクシーで移動／JICA へ訪問し、日本の支援活動についてのお話を聞く

【午後】

- ・ディリ市内で昼食をとる
- ・日本大使館へ訪問し、滞在内容を伝える
- ・サンタクルス墓地を見学
- ・2グループ毎に市内観光
 - ①世界銀行を訪問し、開発についての話を聞く
 - ②ディリ市内を離れ、キリスト像を観光
- ・ディリ市内で夕食を食べる
- ・DonBosco (Comoro) に宿泊

8月27日(土)

【午前】

- ・DonBosco (Comoro) 発
- ・ドライバーと合流しレンタカーで移動

【午後】

- ・DonBosco (ファトマカ) 着
- ・用意していただいた昼食をいただく
- ・次の日、孤児院へ向けての買出しをするため Baucau のマーケットを下見。
- ・DonBosco (ファトマカ) に宿泊

8月28日(日)

【午前】

- ・DonBosco (ファトマカ) 発
- ・Baucau のマーケットで必要な食料をかう
- ・バギア村孤児院へ向けて出発

【午後】

- ・バギア村孤児院に到着
- ・オリベイラ神父・ジャスティン (寮母さん) と Meeting。
- ・こどもたちと遊ぶ
- ・バギア村孤児院に宿泊

8月29日(月)

急遽、ホームステイが出来なくなってしまったため、【午前】
2グループに分かれて行動。

①買出しグループ

足りない分の食料を Baucau へ買出しに行く
また、孤児院で壊れてしまっていたものなども
あったため、それも一緒に調達することにした。

②孤児院グループ

【午前】

こどもたちと布団たたきや孤児院を清掃

【午後】

こどもたちと遊ぶ

・孤児院に宿泊

8月30日(火)

【午前】

- ・こどもたちと遊ぶ
- ・ソーラークッカーを作成

【午後】

- ・衛生教育のポスター作り
- ・中学校へ支援物資物資を運び、
小中学校の現状などお話を伺った。
- ・リウライ首長の家訪問
- ・こどもたちと遊ぶ
- ・孤児院に宿泊

8月31日(水)

【午前】

- ・植林活動を行うため移動
- ・植林をアフロロイカイ、オソフナ、
ハエコネの計3ヵ所で行う。
- ・地元の方に出していただいた昼食をいただく
- ・孤児院着

【午後】

- ・こどもたちと一緒にゴミ拾い
- ・こどもたちと遊ぶ
- ・デモンストレーションの準備のため
阿波踊りを練習する。
- ・孤児院に宿泊

9月1日(木)

【午前】

- ・植林活動を行うため移動
- ・アロワクラックで植林を行う
- ・孤児院着

【午後】

- ・デモンストレーションを教会前で行う
(ソーラークッカー、衛生教育、日本文化紹介、
絵本朗読)
- ・こどもたちと遊ぶ
- ・フェアウェルパーティー
(食事・こどもたちのダンス・歌の演奏・ダンス)
- ・孤児院に宿泊

9月2日(金)

【午前】

- ・身の回りの片付け／孤児院の清掃
- ・バギア村孤児院発

【午後】

- ・DonBosco (Comoro) 着
- ・今回の活動でお世話になったリトさんと夕食
東ティモールのお話を色々聞かせていただいた。
- ・DonBosco (Comoro) に宿泊

9月3日(土)

【午前】

- ・身の回りの片付け／清掃
- ・空港へ移動／入国審査
- ・東ティモール発

【午後】

- ・デンパサール空港着／バリへ入国
- ・バリで自由行動
- ・デンパサール空港発／シンガポール経由
- ・機内泊

9月4日(日)

【午前】

- ・成田空港着／入国審査／解散

東ティモール学生総括

学生代表 中野悠太

はじめに、今回の研修でお世話になった林先生を始め、ボランティア研修に協力して頂いた本学の先生方、現地でお世話になった OISCA のスタッフ、サレジオ会の皆さんとこの研修で出会った全ての方々に心から感謝を申し上げます。私たちが病気やけが、トラブルに巻き込まれることもなく元気に帰国することが出来たのは、多くの方々のご理解とご協力があったからです。

この東ティモールボランティア研修も今年で 6 回目となった。今回の研修では、先生を含む計 9 人のメンバーで、約 2 週間という期間で実施された。

私たちが向かった東ティモールは電気、ガス、水道といったインフラ整備が未だ不十分である。独立国となった今でも司法や行政組織が不完全であるため、国連や外国の支援が続いている。人々の生活はとても貧しく、五人に一人が 1 日に一ドル以下の生活を強いられている。雇用もほとんどないため、失業者が年々増え続けている。燃料となる薪を得るために過剰な森林伐採が発生し、禿山もおおく存在している。農業をするにも土壌が悪く、栽培に関する知識も持ち合わせていないため質のよい作物が収穫できない。問題は山積みである。

そんな東ティモールの研修に参加した目的はボランティア活動を通じ、開発途上国の現状を肌で体感し、自分たちに何ができるか、共存していくために何が必要かということを経験だけではなく心と身体で感じとる事であった。

そのために私たちは大きく分けて三種類のボランティア活動を実施した。

第一に、バギア村の孤児院・孤児の支援である。これは、東ティモールへの研修が始まってから毎年行っている。昨年と違い近隣住民のお宅でのホームステイはできなかったが、その分孤児たちと多くの時間を共有することができた。彼らの寂しさを少しでも癒すことができると、私達は日が暮れるまで遊び続けた。

第二に、バギア村における植林、その他地域での環境保全である。これも東ティモールの研修が始まってから持続して行っており、NGO 団体 OISCA の協力を得て実施した。今年は昨年まで活動していた地域に、新しい地域を 1 つ加えた計 4 ヶ所で植林を行った。植林は地道な作業であるが、森林伐採が進む東ティモールの人々に森の重要性を少しでも知ってもらいたいと思い、私たちは近隣の村人たちと一緒に苗木を植えた。

第三に、NGO 等への活動参加である。昨年の活動では実施されなかったが OISCA の農業支援センターにて現地の農業を体験した。私たちは東ティモールで農業をすることがどれだけ大変かということを実感し、一方で東ティモールに農業の発展は欠かせないことが理解できた。

そして、この研修を通じてメンバー全員が何かを得ることができた。あるメンバーは将来の方向性を、あるメンバーは開発というものへの疑問を、またあるメンバーは人の優しさを手に入れた。

考えること、感じたことはそれぞれバラバラであるが、少なくともこの研修を通して全員が、人間として一回り大きくなって帰ってくることであったのではないかと感じている。それだけでもこの研修に参加した意味はあったのではないだろうか。

東ティモールの現況

国名：東ティモール民主共和国 (The Democratic Republic of Timor-Leste)

面積：約 1 万 4000 平方キロ (長野県程度)

人口：約 92.5 万人 (04 年)

首都：ディリ

言語：国語は、テトゥン語及びポルトガル語。実用語にインドネシア語及び英語。その他互いに異なる方言が使用されている。

宗教：キリスト教 99.1% (大半がカトリック)、イスラム教 0.79%

(外務省ホームページより抜粋) 2005 年 1 月現在

<政治体制>

共和制による一院制。与党フレテリンが過半数の議席を占めている。独立を象徴する大統領は国民によって選出され、任期は 5 年である。立法に対し拒否権を持つ。現在は初代大統領シャナナ・グスマン。行政府の長である首相は、議会での選出後大統領が任命する。現在は初代首相マリ・アルカティリ。

<波乱万丈の政治プロセス>

1974 年 16 世紀末以降ティモール島を支配していたポルトガルで政変が起こり (その間オランダや日本にも支配された)、ポルトガルは植民地政策を転換、民族自決権を与えた。東ティモールでは 3 つの政治勢力が結成・対立し、内戦状態に陥った。

1975 年 内戦では 3 つの政治勢力の 1 つである“フレテリン”が制圧した。その後他の勢力がインドネシアへ統合し、インドネシア国軍の本格的な軍事介入が開始された。以降、インドネシアの統治下に置かれた。

1999 年 インドネシア、ポルトガル、国連は自治案の是非を問う住民投票を実施することで合意。東ティモールでの投票率は 98.2% に達し、78.5% が独立を支持した。治安維持はインドネシア政府に任せられ、国連は文民警察官・軍事連絡要員等から成る国連東ティモール・ミッション (UNAMET) を展開。

その後「軍事緊急事態」に基づき、インドネシア国軍が軍事行動を開始。国連安保理は東ティモールの治安維持を任務とする多国籍軍 (INTERFET) の設立を認める決議を採択した。2000 年にはインドネシア軍も撤退し、多国籍軍は「国連東ティモール暫定行政機構 (UNTAET)」へ移行した。

2001 年 憲法制定議会選挙が実施され、最大与党となったフレテリンを中心に第二次暫定内閣が発足された。

2002 年 大統領選。フレテリンの指導者だったシャナナ・グスマンが当選し、「東ティモール民主共和国」が発足され国連から統治権を引き継いだ。

<経済状況>

所得水準 (一人当たり GNI) は 550 ドル (2004 年)、国内総生産 (GDP) は 339 ドル (2004 年)。東ティモールの財政は他国よりの支援に大きく依存しており、2002 年の財政支出の約 90% は国際機関や先進国などからの支援によって賄われている。主要な工業製品の大半を輸入に依存している。

<産業>

未だ主たる産業が無く、全就業人口の86%が農林水産業に従事し、その生計を農業、特に稲作に依存している。しかしコメは国内需要を満たしておらず、需要の半分以上を輸入に依存せざるを得なくなっている。主な原因は農業インフラの未整備にあるため、現地に適応した農業開発を進めていくことにより自立発展的な展開が期待される。

期待される産業の一つとして漁業も挙げられる。同国は水産開発の潜在的可能性も高いが、国際的に認知された漁業区域が欠如していることが最も大きな障害となっている。

ティモール海の石油とガスによる所得をいかに使うかも今後東ティモールの経済発展を左右する要因になるであろうと思われる。しかし海底油田の寿命は20～30年と予測されており、持続しないだけでなく、為替レートが石油輸出により割高になる問題があり、またこの産業だけでは失業者を吸収しきれないため、この分野に頼るだけでなく、他の産業と平行して行っていく必要がある。

<医療>

医療水準は極めて低く、医師・物資ともに不足している。首都の大病院でも、オーストラリアから定期的に専門医チームが訪問し、時には医療機器の故障や在庫切れにより治療や検査が出来なくなるという状態だ。現地では不可能な治療の方が多く、国外への移送が必要となる場合も多い。

<環境>

薪が主な燃料となっているため、木々が伐採され、山林の荒廃がすさまじい。電気もほとんど通わない貧村では灯油を買う収入も無い家庭が多く薪にたよっているためだ。ごみ回収が未整備なため、大抵の家庭ではごみを家の前で燃やしてしまう。その際、プラスチックやペットボトルも一緒に燃やすため、土壌汚染の懸念もある。またごみの投棄や、生活排水の垂れ流しも問題となっている。

<開発援助>

国連東ティモール支援団（UNMISSET）が2005年5月20日に任期を終え、21日には国連東ティモール事務所（UNOTIL）が設立した。UNOTILは、今後一年間、東ティモールの「平和の定着」と「国造り」のために協力を継続する予定である。その他にも国連開発計画（UNDP）、国連児童基金（UNICEF）、国連教育科学文化機関（UNESCO）、国連難民高等弁務官（UNHCR）など様々な機関が東ティモールの開発のため、援助を行っている。

参考資料

- ・ 世界銀行東京事務所ホームページ http://www.worldbank.or.jp/04data/11data/data_top.html
- ・ OISCA ホームページ <http://www.oisca.org/project/etimor/index.htm>
- ・ 特定非営利活動法人 ADRA Japan ホームページ <http://www.adrajpn.org/menu.htm>
- ・ 在東ティモール日本大使館ホームページ
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/zaigai/list/asia/easttimor.html>
- ・ 外務省ホームページ http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/pko/et_haken.html

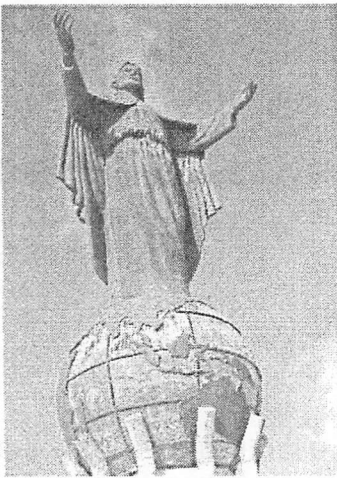
インドネシアとの和解プロセス

<ポルトガルからインドネシアの占領下へ>

東ティモールは、1974年までポルトガルの植民地領であったが、変政に伴い植民地主義も崩壊し始める。東ティモール国内は、インドネシア併合派（APODEI）と完全な東ティモールの独立を目指す独立派（ASDT、後のフレテリン）の抗争が激しくなっていた。

そのころインドネシアでは、スハルト政権が圧倒的な強さを持ち、大統領の側近の情報系将校による秘密特殊工作が東ティモールを不安定にし、国内への干渉、介入が激しくなった。91年に起こった「サンタクルス事件」のインドネシア軍の住民大虐殺は歴史に残る大惨事になった。このころから、独立運動が活発化した。私達は、この事件が起こった「サンタクルス墓地」に行くことができた。今は、あの何百人が犠牲となった大惨事があったとは思えない程、静かで落ち着いていた。

<独立に向かって>



その後98年に、アジア経済危機でインドネシア経済が破綻し、スハルト政権が崩壊し、民主化運動が高まる中で、ハビビ新政権が発足した。スハルト政権下での東ティモール人に対する人権侵害が、国際社会の中で大きな障害となっていたインドネシアは、その批判をかわすために東ティモールに対する政策の見直しを始めた。

そして、独立の是非を問う「住民投票」が同年8月に実施された。最大の問題は、投票をする環境にあった。インドネシア軍が撤退し、政治的自由、身の安全が保障されない限り、住民は安心して自分の自由な意思を投じることはできない。投票当日、有権者登録をした住民の98.6%が危険を承知で投票所に向かい、78.8%が独立を選択した。投票前から、独立を望む人々に対して脅迫や暴力が繰り返されていたことや、選挙キャンペーンができなかったこと、当日も起こった選挙妨害のことなどを考慮すると、この投票率は驚異的だといえる。

<インドネシア軍の報復>

しかし併合派の民兵とインドネシア側は、この結果を受け入れようとしなかった。その後も、各地で虐殺事件が増発し事態は混沌深刻を極めることとなった。インドネシア軍に支援された民兵による「焦土作戦」によって、東ティモール全体で70%、ディリでは90%もの建物が破壊された。今でも、いたる所に建物の残骸が生々しく残っている。犠牲者の数は、千人とも一万人ともいわれている。インドネシアは面目を守るために証拠隠しを行い、今でも正確な数はわからないままである。また、人口の3分の1にあたる27万人もの人々が西ティモールに連れ去られ、難民生活を強いられた。数多くの犠牲の後、各国のインドネシアおよび軍への避難が高まり、99年9月に、ようやく国際軍が入りディリから全土へと広がった。そして翌年の2月に国連平和維持軍に引き継ぐ運びとなった。

<インドネシア軍の人権侵害に対する調査委員会の設置>

99年9月にジュネーブで開かれた国連人権委員会で、「東ティモールにおける人道に対する犯罪の調査要求」が可決され、調査団が組織された。国連の調査団は11月下旬から現地入りし調査を始めるも、証拠物質の発見は困難を極め何人が亡くなっていて、行方不明なのか、はっきりした数はわからなかった。

インドネシアは02年に特別法廷を設置し、幹部らを起訴するも証拠不十分で無罪になってしまう。これに国連は反発した。裁判を改めて検証する調査委員会を設置し、インドネシアのユドヨノ大統領と会談をして、調査を開始したが、犯罪者の訴追、インドネシアとの協力が不可欠であり、難しい局面にある。また、東ティモールは政治経済的に、インドネシアとの関わりが強く、かつ依存しているためにインドネシアの批判を避けざるを得ない状況が否めない。

<真実和解委員会の発足>

05年3月9日に東ティモール人に対する人権侵害の問題を解決し、両国国民の和解を図るため、インドネシアのジャカルタにおいて、「真実和解委員会」を設立する共同声明に両国大統領が、署名した。この委員会は、同年8月2日に正式に開設された。

24年間の占領を経て、破壊、虐殺で深く傷ついた東ティモールの人々であるが、インドネシアに対する感情は、一部の15%の過激派を除いて、98%が平和的解決、友好関係を望んでいるということが、リトさんの話からわかった。今は国が発展することが一番の重要点であり、どこの国ともうまくやっていくことを望んでいる。

東ティモールにおける開発援助

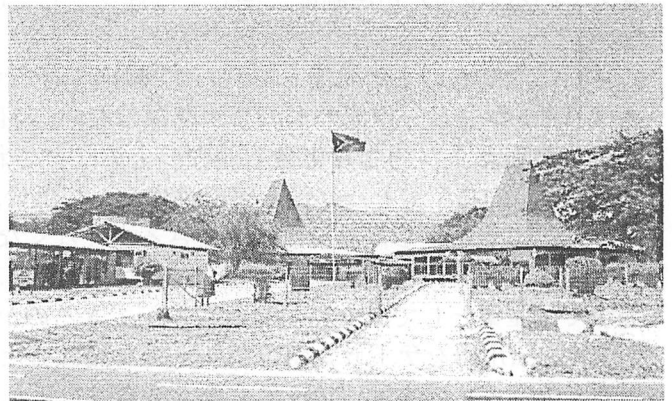
東ティモールにおける開発状況

<国際連合の統治>

東ティモールの現状にも記述されているように、東ティモールでは1999年10月に現地政府に変わる組織として国際連合暫定統治機構(UNTAET)が設置され、2002年の独立まで立法・司法・行政の権限をUNTAETに委任していた。

2002年5月の東ティモール独立以後、国際連合はUNTAETの規模を縮小し、国連東ティモール支援団(UNMISSET)に名称を変更した。UNMISSETは東ティモール政府の治安維持、行政制度のサポートに貢献し、2005年5月にその任期を終えることとなった。

現在は、UNMISSETの継続組織となる国連東ティモール事務所(UNOTIL)が設置され、東ティモールの開発支援に携わっている。UNOTILの活動は2006年5月迄となっており、その後は国連開発計画(UNDP)や多くの国際機関が東ティモールでの活動を本格化させることになっている。



<開発の現状>

現在の東ティモールでは世界銀行やアジア開発銀行、国連児童基金(UNICEF)等の国際機関が開発支援を行っている。世界銀行、アジア開発銀行は東ティモール政府の財政を支援するため東ティモール支援基金(TFET)や東ティモール政府の経常予算となるUNTAET信託基金(CFET)を創設し、国連の統治機構や東ティモール政府を財政面から支援してきた。

UNICEF、UNDP、国連人口基金(UNFPA)、国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)等も支援を行っており、2006年のUNOTIL撤退後から活動が本格化するといわれている。私たちが訪れたバギア村の孤児院や植林を行うために訪れた地域にも、国際機関の支援プログラムが実施されていることを示す表示(東ティモールと国際機関が合同で立てたプロジェクトの看板)が多数見られ、東ティモール全土に開発支援が進んでいることがわかった。

さらに東ティモールは二国間の援助においても多額の支援を受けており、その中でもポルトガルの支援は他の国家と比べ資金・プロジェクトの量共に群を抜いている。インドネシアの統治以前、ポルトガルは東ティモールの旧宗主国であった。その為、政府機関、国際機関を通じたものに加え、教会や地方自治体、大学、NGO、ポルトガルへの亡命者ネットワーク等、幅広いネットワークを通じて積極的かつ広範囲な支援を実施している。

支援活動の中核となるのは教育分野、経済・社会開発分野、行政開発分野の3項目である。特に教育分野への投資額はポルトガルの対東ティモール ODA の約50%を占めており、ポルトガル語の教育支援が重要な支援の一つとなっている。現地では昨年よりもポルトガル語の教育・普及が進んでおり、林先生やリトさんの話によるとポルトガル語表記の看板、新聞も昨年より増えているようだった。

日本においては、国際協力機構(JICA)や外務省がインフラ整備、農村開発、人材育成平和定着支援に力を注いでおり、2002年の独立までに約20億円の技術協力を実施している。現地では日本の援助は少なからず一定の効果を挙げているようであり、押し付けの援助ではなく、パートナーシップを築きながらの支援が続けられているようであった。

東ティモールに残された課題

<国づくり面>

東ティモールの開発はまだ多くの課題が残されている。

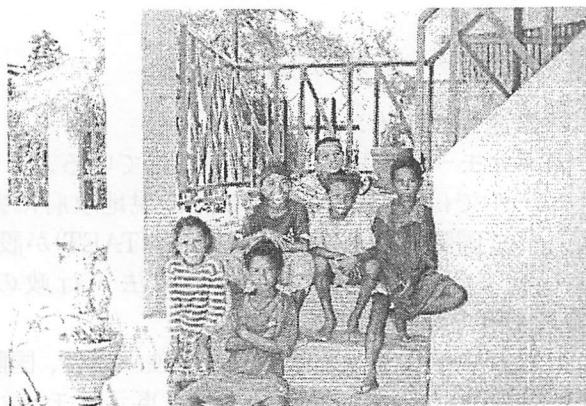
第一の問題として、国づくりの不完全さが考えられる。2002年の独立以来、行政機構においてはある一定の進捗が見えているものの、司法制度に関しては遅々として進んでいない。

さらに産業もいまだ発達しておらず、輸出できるものといえば石油、コーヒー程度のものしか存在しない。特に石油に関しては埋蔵量が約20年分しかないとの予測されているため、安定的な産業となり得る可能性は至って低い。その結果どうしても安定した農業に依存せざるをえなくなるが、食料自給率が非常に低く、市場へのアクセスが不便なこの国の現状では産業として成り立たせることができるのかは疑問が残る。

また、公用語をテトゥン語とポルトガル語にした結果、言葉による混乱が発生している。ポルトガル語は公用語となっているため、学校でも語学教育は行われているようであった。私たちがバギア村で出会った子どもの中にもポルトガル語を話すことができ子どもがおり、徐々にではあるがポルトガル語が普及していることが伺える。しかし、現在の学校教育を受けられていない子どももいまだ存在しており、成年層においては、一部のエリートかポルトガル植民地時代の教育を受けた世代しか読み書きできないのが現状であり、ポルトガル語が現地で流通するには当分の年月が必要となるだろう。また、英語の必要性も高まっていることから、学校教育でも英語が徐々に導入されている。

もう一つの言語であるテトゥン語は方言の種類が16種類も存在しており、語族でさらに分類すると30を超えてしまう。さらに、ポルトガル語と比較すると語彙が少ないため複雑な言い回しをすることができないといった問題もある。

現在東ティモール国立大学にテトゥン語の研究所が設置され、テトゥン語の開発が行われているようであるが、言語開発の現状がどうなっているのかはわからない。



<社会インフラ面>

社会インフラは年々復興が進んではいるものの、独立以前と比較するといまだに未整備な部分が多く存在している。首都のディリにおいては、度々停電が発生する状況はいまだ改善されていなかった。

さらに、郊外では電線や電信柱は存在しても電気が通っていないといった状況がいまだに発生している。穴だらけの道路やガードレールもない曲がりくねった悪路が多数残っている状況が続いており、復興支援のためのインフラ整備が急務であることを物語っている。

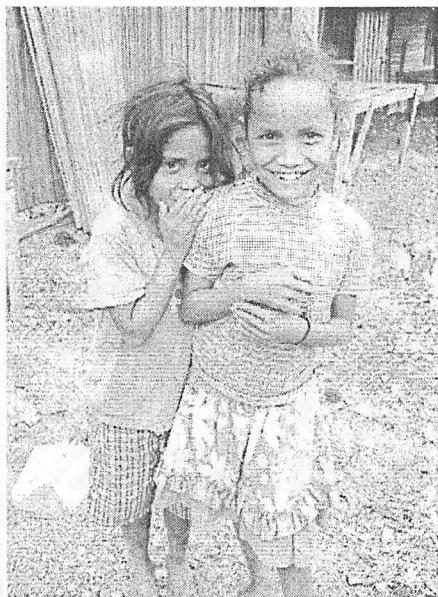
<人材面>

人材面においても多くの課題が残されている。行政の制度、インフラ整備はある程度短期間での復興が可能

となるが、人材の育成においては、長期の支援が必要となる。現在、こどもたちの学校教育を担当する教員や司法制度を動かす裁判官、医療を担当する医師や看護師、行政サービスを担当する公務員などがまだ不足しており、専門職の育成、専門学校の建設が急務となっている。また、毎年約1万6千人が就業年齢となっているのに対し、就職できるのはごく僅かとなっており、雇用の創出とともに東ティモールの発展に必要とされる人材を育成することが課題となる。

附録内容

今後の展望



現在の東ティモールは資源も少なく、独立して間もないため、人材も育っていない。さらに通貨が米ドルであること、国連や多数の開発援助機関人員が東ティモールに渡って来ていた影響などで物価が先進国並みに上昇してしまっている。また、今後石油輸出の増大で為替レートが割高になる可能性がある。これは物価には好影響であるが、他の輸出産業には不利である。

また、15歳未満の人口の割合は全体の40%以上であり、2015年には人口の約半分にまで増加傾向にある事がUNDPの統計から算出されているが、同時に失業率も依然として増加している。世界銀行の資料によると2001年の若者の失業率は43%となっており、こちらも増加傾向にあるが、具体的な政策ははまだ実施されていない。

多くの課題が山積みとなっている東ティモールではあるが、希望が残されていないわけではない。2005年に東ティモールの貧困削減戦略ペーパー(PRSP)が作成され、開発支援の具体的な枠組みが形成された。東ティモールのPRSPは貧困の削減と持続的な発展を中核としており、学校教育の普及、雇用創出、行政開発等といった発展を促進させる事項

が多数含まれている。この結果として東ティモールの開発支援が本格化することは間違いないだろう。

また、それにもましての大きな強みは人々の気質であろう。独立3年目の東ティモールは、国民全員で東ティモールを発展させようという意識が高く、開発援助に必要な市民の協力が得やすくなっている。

彼らの持つ国づくりに対する思いはどのような不安要素をも撃退する最強の資源となるだろう。

東ティモールのPRSPは2007年に効力を失う。この二年間で東ティモール政府がどのような制度を確立し、国内でどのような開発プロジェクトが実施され、国民の生活がどのように変化していくかが東ティモールの発展の鍵となると思われる。

東ティモール活動報告

国内準備

募金活動や支援物資収集の他に、東ティモール組として孤児院で行える支援を考え、それに向け準備を始めた。

まず、ボスニア組が阿波踊りを本格的にやるということもあり、ティモール組も一緒に教えていただき現地で披露することになった。それに関連し、こどもたちに少しでも日本を感じてもらえればいいなという思いから日本紹介を行うことにした。大きな模造紙に日本の風景やものをたくさん描いた。また、毎年孤児院ではタイスという現地の伝統的な織物をいただいていたため、そのお返しになるようなものを作りたいということで千羽鶴も折った。

昨年のフェアウェルパーティーで、こどもたちがカーペンターズの「Top of the world」を歌ってくれたと聞いたので、知っている曲であればこどもたちも喜んでくれると思い、笛やピアノを交えて練習を行った。

こどもたちに対しての生活改善においては、衛生面での安全が保障されない国なので「手洗い」「布団干し」などのポスターを作成した。また、ソーラークッカーによる資源（薪など）節約の効果を提案するため、専門家を訪ねてアドバイスを受けた。

国際協力機関である、JICA（日本国際協力機構）やJBIC（日本国際協力銀行）を先生方と共に訪問し、東ティモールの現状についてお話を聞くことが出来た。JICAの方には詳細な情報をたくさん教えていただいた。現在、進められている事業の状況も詳しく知ることができた。一般に、新しい資料や情報が乏しい東ティモールの現状を知ること、まだ見ぬ国のイメージを掴かめ、私たちも出来ることを精一杯やろうと大変勇気付けられた。



OISCA（農業訓練センター）

OISCA の活動

東ティモール滞在初日、私たちはリキシヤにある国際 NGO OISCA(オイスカ)の東ティモール研修センターに向かった。OISCA では農業を基盤とした国造りを進めるにあたり、敷地内にある農園で、野菜や果物を栽培しながら農業普及員の育成や植林・環境保護など様々な活動を行っている。

<マングローブ植林>

研修センターに行く途中、一昨年の春文教ボランティアズと OISCA が植えたマングローブを見学した。苗は水面から 20 センチほど伸びているだけであったが、全体の 85% が残っているという状況だった。苗は流されてしまい、水牛に食べられてしまうことが多いため、これはよく残っている方だという。しかしこの苗木が立派なマングローブ林になるまでは、まだ相当な年月がかかると思われる。

<研修センターにて>

まず、敷地内にある農園を見学した。1ヘクタールある農園ではナス、タマネギなど野菜16種類、バナナなど果物5種類を栽培している。また葉とワラと牛糞・馬糞で堆肥を作るコンポストや、鶏小屋もあった。そして乾季でも水不足にならないよう、ポンプで地下50メートルから水をくみ上げ、農園中に回していた。さらに、水分を確保するために雑草を抜かなかったり、枯れた枝や葉を切り落としたりと、いろいろな工夫をしていた。農業の発展のためには、まずこうした知識が必要不可欠である。

農業体験として1日目にレタスの苗植え、2日目は鶏小屋周辺の掃除・鶏のえさ作り班、バナナの枯れ葉落とし・畑の苗床作り班、植ええ・堆肥作り班の3グループに分かれ活動した。見学だけではなくこうした体験ができたのは、とてもよかった。

夜はOISCAの寄宿舎に一泊させていただいた。東ティモールでの初の宿だったため、初めはみな慣れないトイレや風呂に驚いていたが、電気や水道も整っており、話を聞いて想像していたよりも快適であった。電気は22時で流れないようにになっていた。

翌日は中央大学法学部の一行も視察に訪れていた。最後に文教ボランティアズで記念樹を植えた。



<黒ポットの贈呈>

日本から支援物資として持参した苗用の黒ポット約760個を贈呈した。東ティモールでは小さな黒いビニール袋のようなもので苗を育てており、これは苗を取り出す際に、日本型のように底に穴が開いていないため取り出しづらく、丈夫でないため破けてしまったりしていたので、日本の黒ポットは大変喜ばれた。日本では黒ポットは安く手に入るうえ、家庭でも余っているところが多いので、今後も継続していくべきだと感じた。

<OISCAを訪れて>

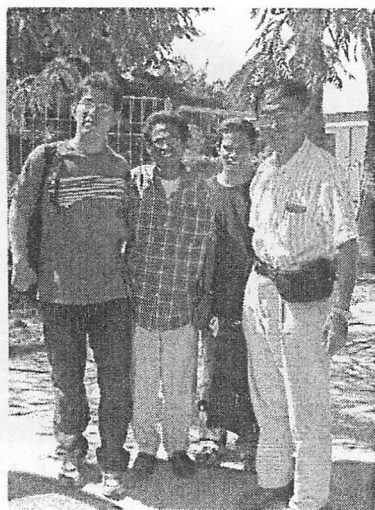
OISCAの農園で作られた野菜や果物は、ディリにある外国人向けホテルやレストランに売られ、食べられているそうだ。この作物は質がいいため、一般にマーケットで売っているものよりも、高く取引されると考えられる。



その資金でオイスカが運営されているとすれば、高く売れたほうがオイスカの今後の活動のためにはいいかもしれないが、現地の住民にこの質のいい作物が流通すれば品質向上への意識が高まり、東ティモール全体の作物の品質が向上するのではないかと考える。

OISCAの現地の職員の方は、はじめは静かで少し怖い印象だったが、慣れると色々と教えてくれ、とても親切だった。さらに日本語ができる人に加え、英語のできる人が多かったためコミュニケーションが取りやすかった。おかげでテトウン語をいろいろ教えてもらうこともできた。ここでテトウン語を覚えてもらったことで、その後の孤児院や買い物などでコミュニケーションにとっても役立った。

DonBosco 職業訓練校



私たちは2ヶ所の DonBosco (コモロ、ファトマカ) に宿泊させていただいた。

東ティモールの「失業問題」は深刻で、国連等の支援や政府の政策がまだ成果を上げておらず、依然として改善されていない。雇用機会を拡大するためには人材育成が急務である。DonBosco の職業訓練校はマザー・テレサが子どもたちや死に行く人々のために奔走したように、イタリアの神父 DonBosco が世界の子どもたちに教育を受けさせたいという思いから学校を設立した。現在 DonBosco の教育事業は日本を含めて100以上の国々に広まっている。公的な機関による教育システムが確立されていない東ティモールでは、独立以前から長年に渡り DonBosco 職業訓練校が人々に学ぶ機会を与えてきた。この学校は日本でいう工業高校や高等工業専門学校にあたる。訓練内容は、車の修理や機械の組み立て方、金属加工、電気工事、ブロックなどの建築材料製作等である。多くの生徒がここを卒業し、現在東ティモ

ルで活躍している。

DonBosco では、現地の学生が普段使っている（私たちの滞在時には空いていた）部屋に宿泊させてもらった。すぐ横では生徒たちも暮らしていたので、現地の生活を直接感じることができた。

ファトマカの訓練校は山奥にあるため、上手く連絡が取れていなかった。そのため、私たちが来ることを全く知らなかったが、せっかく来てくれたのだからと言ってディーノ神父やロカテリー神父は親切にも泊め下さった。旅人を泊める精神がまだここには残っており、本当に感謝気持ちでいっぱいになった。ディリにあるコモロの訓練校でもジャスティアーノ神父やオクタビオ (Brother) にも色々とお世話になった。ここでの生活は、身のひきしまる思いで時を過ごせたと共に、「人の優しさ・暖かさ」に触れることができた。

日本国際協力機構 (JICA)

東ティモールで日本がどのような協力を行っているのか、現在の東ティモールの状況はどのようなものなのか、ということを知らせていただくため JICA 東ティモール事務所を訪問した。現地へ入る前に日本の JICA でも東ティモールの現状について様々なことを教えていただいた。実際に東ティモールへ行き、それまで紙の上でしか知ることの出に來なかつた情報を、職員の方に直接お話を聞かせていただいたことは、私たちが東ティモールで活動するにあたり、とても良い機会となった。また、東ティモールの現状や問題点なども聞くことで、これから何をしなければならないのか、私たちにはその中で何ができるのかということを考えて行く上で勉強になった。

これまでの活動

<インフラ整備・維持管理>

2000年2月より、主要インフラ施設(道路、橋、港湾、灌漑施設、電力、水供給システム等)復旧のための復興計画の策定を支援するとともに、実際のリハビリ工事を行っている。

<人材育成・制度づくり>

政府運営を担う行政官の育成・工学系を中心とした技術者の教育・コミュニティ・レベルの人材育成・制度づくりを行っている。



<農業・農村開発>

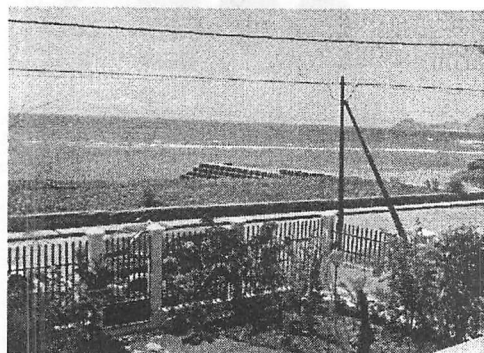
農林水産業分野の中期開発計画の策定・農業生産技術の改善や普及・住民の生計向上のための生産手段の改善を行っている。

今後の活動

今後は、施設の維持管理が適切になされるよう、水供給、道路、電力分野を中心に、施設の運転や維持管理の技術支援、政策助言、幹部候補生の育成等の協力を重点に協力を行っていく方針である。農業に重点を置いている東ティモールだが、農業人口の都市への流出に加えて、農業に使用される機械が破壊されて農業生産力が低下しており、コメを中心とした食糧の安定供給のために、農業生産力を上げることが急務になっている。これまで国家運営の経験のない東ティモール人にとって、行政を運営する人材を育て、行政制度をつくっていくことは、なによりも重要な課題だ。すべての分野で人材が不足しているが、特に、専門知識を有する行政官や、技術者の不足が深刻である。



世界銀行



国際機関の一つである世界銀行は1999年の独立以前から、復興開発支援の枠組み作りの中心的な役割を果たしており、現在も復興支援の中枢に位置している。

今回、私たちは東ティモールにおける現在の開発状況と今後どのような支援を行っていくのかを伺うためにディリにある世界銀行のティモール事務所を訪れた。

現在、東ティモールの財政は世界銀行によって設立された(Trust Fund for East Timor :TFET)東ティモール信託基金、(Cocildated Fund for East Timor :CFET)が中心となっている。今後はこの2つを一本化し、ティモールの一般財政へと組み込む方向でいるとの事だった。さらに石油収入が今後見込めることからこれまで問題とされていた財政ギャップがなくなると思われる。世界銀行では、新たな財政支援を考えているが、東ティモールの政府方針としては原則として支援は無償において受け付けており、借款は受け入れていない。そこで、世界銀行の組織の一つである国際開発協会(International Development Association ;IDA)からの贈与を中心とした支援を考えているとの事である。

また、東ティモール政府の重点政策である教育分野への支援に関しては、公用語がポルトガル語になったことで、できることが限られるようになった。そのため非常に当惑しているとの事であった。

バギア村孤児院



訪問先：バギア聖ジョセフ教会付属孤児院

滞在期間：8月28日～9月1日 5日間

人数：65人

訪問時の人数：15人程度。(夏休みの帰省と重なっていた為)

孤児院周辺に住む子供たちが、孤児院・隣接している教会周辺に遊びに来ているため実際に活動を共にした子供たちは30人程度。15人の孤児たちのうち、女子はわずか3人。

年齢：7歳～14歳

その他、オリベイラ神父が雇っている孤児たちの世話兼孤児院の運営役として、ジャスティーナ(27歳)・アナスタシア(25歳)が孤児院で一緒に暮らしている。

孤児・孤児院の現況

<衛生状態>

こどもたちが使っている水は山から引かれ、孤児院の奥にある貯水槽に貯められていた。しかし、その貯水槽の衛生環境は悪く、汚れが溜まっているまま使用していた。

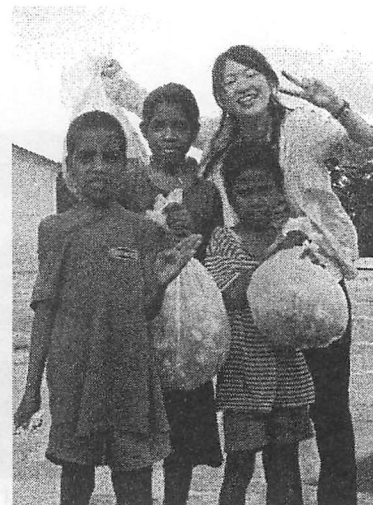
水浴び、着替えは涼しい時間帯(朝、夕方)にまれに見受けられたが、手洗いも含めほとんど行われていない。着替えは2～3日に1回程度しているようだ。もちろんパジャマに着替えることもない。

洗濯、水浴びも一日に多くて2、3人しか見かけない。各々が3～4日に一度程度のペースで洗濯、水浴びをしているようだ。しかし、全員が毎日洗濯・水浴びをできるほどの山水が貯水槽に溜まらないのも現実である。

ケガの治療は基本的には自然治癒にまかせている。こどもたちの大半は、ビーチサンダルを履いているが、遊びだすとビーチサンダルを履かずに走り回る子供も出てくる。足、足の裏に切り傷・すり傷を多く見かけたが、消毒・傷口を水で洗うこともなさそうだ。放置した為に傷口が化膿しているこどもも何人か見かけた。

手洗いもほとんどしない。トイレに手洗い場がない事や、貯水槽が孤児院の一番奥にあることも一原因ではあるが、手洗いに対する意識がほとんどない。他ボランティアグループが貼ったとみられる「Fase-Liman(テトゥン語で手洗いの意)」のステッカーが貯水槽脇に貼ってあったが、こどもたちの意識は変わっていないようだった。

飲料水も、生水を直接飲んでいる。薪代・手間・保存方法の関係もあり、ボイルドウォーターが飲料水になるまでにはまだまだ時間が掛かりそうである。

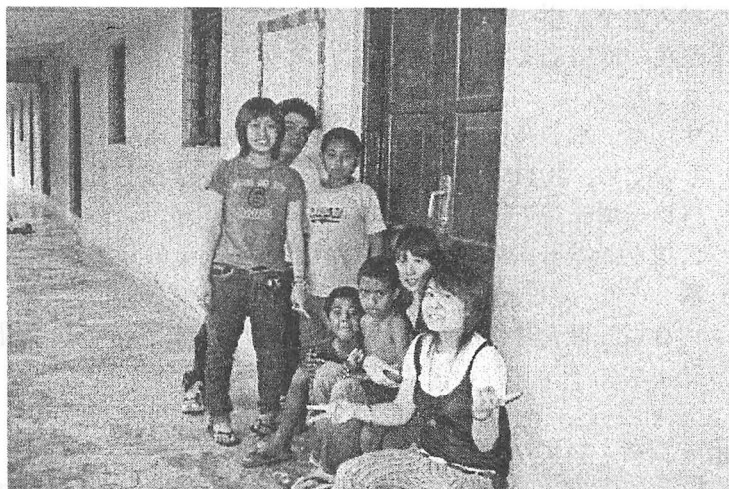


孤児院周辺のゴミの散らかり様には驚かされた。プラスチックゴミ、生ゴミ問わずゴミは孤児院の外に投げ捨てている。私たちがゴミの投げ捨てを止めた時は「なぜ？」と疑問がっていた。ゴミ拾い活動も最初は気がすすまない様子であったが、最終的には遊び感覚で一緒に時間を過ごすことを楽しんでくれたようだ。「こんなに拾ったよ！」と得意げに大きなゴミ袋を見せるこどもたちもたくさんいた一方、「なぜゴミを捨ててはいけないのか」と何度も質問し、「理解できない」といった態度を示すこどもも、ゴミ袋いっぱい集めたゴミをすぐさま投げ捨てようとするこどももいた。文教ボランティアズの継続的な活動を通してゴミに対する意識が少しずつ変わってくれればと思う。

<食生活>

基本的には3食白米を食べている。夕食では、畑でとれた野菜（ごくわずか）やマーケットで買ったヌードル（インスタント麺 スープなし）、炒めた野菜、肉類をご飯の上に付け合わせる。しかし、肉類は高級品であるため減多に食べないとのこと。ご飯の上に味の付いたものをのせて食べる食習慣なので、日本のように副菜、汁物などはない。一度私たちのためにレタスとトマト、玉ねぎでサラダを作ってくれたが、それ以降子供たちの食事に出されていないので、日常的な料理ではないのだろう。

日中の自由時間には、フルーツ（大きなグレープフルーツ、オレンジ、ジャックフルーツ）を食べることもしばしばであるようだ。また、パンや炊き込みご飯のようなものを食べていることもあった。



孤児院での活動、様子、遊び

<デモンストレーション>

日本の紹介とより衛生的な生活の提案をするため、子供達を集め以下のデモンストレーションを実施した。



- ・ ソーラークッカーの作成とソーラークッキング、またその説明
- ・ 手作りポスターを使用しての、手洗い・布団干し等衛生教育
- ・ 日本文化紹介（模造紙に四季折々の風景や写真を貼った四季の紹介と阿波踊り実演）
- ・ ゴミ拾い ・ 絵本の読み聞かせ

通訳がない為に、こどもたちの興味を上手く取り込めず、次回をもっとこどもたちを巻き込んだデモンストレーションにしようという反省点が多くあがった。衛生教育は、孤児院で布団干しをする際、また食事の前の手洗いなど日常生活の中で粘り強く伝えることも大切である。

<子供たちの様子とコミュニケーション手段>

こどもたちの喜怒哀楽は、日本のこどもと比べても変わりなく、「孤児」という境遇に負けずに元気一杯遊んでいる様子に安心させられた。こどもたちとは言葉は通じなくとも遊ぶことを通して、初日到着して間もなく仲良くなることができた。

私たちが滞在した間は、英語で会話できる少年が1人と数人が単語程度で英語を話す以外は、みんな基本的にテトゥン語（バギア村独自の言葉：Baguia language）を使っている。こどもたちと私たちとの会話は、英語「Good」、「No good」、「Photo」以外はテトゥン語、日本語に身振り手振りをつけて何とか伝えていた。私たちがテトゥン語に興味を持つと同様に、こどもたちも日本語に興味を持ち、挨拶・「ありがとう」「ごめんなさい」など私たちが教える言葉を楽しんで使ってくれていた。テトゥン語はディリで使われていてもバギアでは通じず、地域によって使い方・意味が若干異なるようである。孤児院訪問前に OISCA 研修センターのスタッフ、ドライバーなどから教わっていたため非常に役立った。テトゥン語を教わることを、コミュニケーションの一つとしていたため、孤児院でも初日から自己紹介・ごく簡単な会話をすることができた。

<孤児院にあった遊び道具・遊び場>

- ・ バスケットボール

孤児院の横にある教会の前にはバスケットコートがあり、現地でも人気なスポーツのようだった。

- ・ サッカー

サッカーボールはないのか、バスケットボールやバレーボールなどを使ってサッカーをしていた。そのため、物資で贈ったサッカーボールはとても喜ばれた。

- ・ バレーボール

バスケットボールの次にみんなが出来る人気のスポーツだった。

- ・ 歌

到着して車を降りるとすぐにこどもたちは Welcome の歌を披露してくれた。歌はお互いのコミュニケーションを深めていく上で大切なものであり、こどもたちはたくさんの歌を教えてくれた。

<ボランティアズが紹介した遊び>



- ・ 「大きな栗の木の下で」「アルプス一万尺」「線路は続くよどこまでも」手や体を使った遊びはとても喜ばれ、こどもたちと一緒に一日 20 回以上もやるほど大人気であった。

- ・ **Top of the world**

最後のパーティーで披露しようと練習していた曲であった。しかし、遊んでいる時に歌ってあげるとすごく喜ばれ、特に年長のこどもたち数人は英語で歌うことが出来たので一緒にたくさん歌った。

- ・ 物資で贈られたリコーダー、ピアノ、タンバリン、カスタネット

リコーダー、ピアノはやはり難しかったようで、私たちが教えながら演奏する上では興味を持ってくれた子もいたが、継続的に教えられないということもあり、今後こどもたちが自ら持ち出して遊ぶことはないように思われた。タンバリンやカスタネットは叩けば音が出てすぐ使えるため、みんな楽しそうに遊んでいた。

<その他に>

- ・ カメラ

こどもたちはカメラが大好きだった。写真を撮ってもらいたいので私たちに毎日「Photo Photo」と言って来た。特に撮った写真をすぐに見られるデジタルカメラが大好きだった。

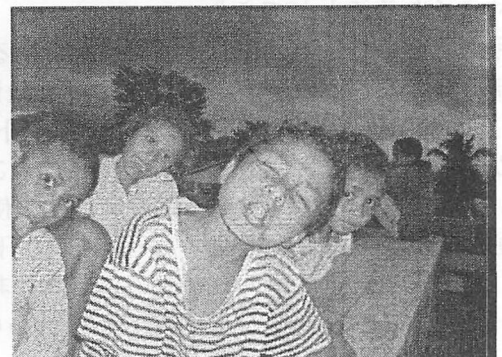
- ・ 「Good」「No Good」

こどもたちはよくこの言葉を使っていて現地でも流行っているようだった。何かと何かを、誰かと誰かを比べて「No Good」と言っただけでからかっていたりしていた。また、写真はもうたくさん撮ったから終わり、と伝えるともっと撮ってもらいたいらしく機嫌を損ねてしまう。そうすると「○○○ No Good」と言われ、この言葉には私たちが少し戸惑ってしまった。

<こどもたちとのコミュニケーション>

ここでこどもたちとの遊びの様子を一つ紹介したいと思う。

昨年の活動報告から「アルプス一万尺」「線路は続くよどこまでも」は人気があったと報告されていたが、今年も大人気だった。孤児院を訪れた初日に廊下で遊んでいると、わたしたちの手を握って何かをして来た。私たちはすぐに昨年やってあげた手遊びだと気づき「アルプス一万尺」を歌ってあげると嬉しそうにやってくれてとても上手だった。まわりにいたこどもたち自分もやりたい、というように手のジェスチャーで私たちに誘って来た。はじめは楽しむというよりは一生懸命覚えることに夢中だった。しかし、1~2日もすればすぐに覚えてしまい、そのうち余裕まで出てきてお互いの手を交差して叩くところでは、相手の手を強く叩いたりしてやんちゃぶりを発揮していた。手遊びをやりたい時にはいつも私たちの手を握って来て、この遊びをはじめる前に「せっせっせ〜の、よいよいよい」と言うけれども、その最初の言葉をこどもたちも分かっ



たようなので「せっせっせ、せっせっせ」と言って誘って来た。私たちも大好きな遊びとなった。

また、今年は「大きな栗の木の下で」がとても喜ばれ、歌が覚えやすかったのかよく一緒に歌っていた。一生懸命わたしたちの動きを見て、踊ったり歌ったりと本当にかわいい姿であった。

<孤児院での活動を終えて>

孤児院は、日本の孤児院と違い閉ざされた雰囲気を持たない。むしろ、教会や広場とも隣接していて近所の子供たちの溜まり場、共有のスペースのような役割を果たしているように感じた。

苛酷なインドネシア支配のなかで培われたのか、親戚や地域の人たちが孤児たちの面倒を見ていることが多いという。また、孤児発生の原因を突き詰めていくと、問題の根底はインドネシアとの独立戦争に行き着く。そのため、孤児は社会全体で支えていかなくてはならないという意識が根付き、公共性を持ち合わせる開かれた存在になっているともいえるようだ。(OISCA リトさん談)

今回の訪問は夏休みの里帰り重なったため65人中50人が帰省していた。帰省先は、実家、親戚の家、故郷とさまざまであるようだ。孤児院を利用している理由は様々である。「孤児」の定義としては、両親を失った子供・身寄りのないこどもがあげられるが、東ティモールではむしろ「親に育てる力がない」と言ったほうが妥当であろう。両親とも生きていますが、こどもの学費を稼ぐのに精一杯で育てる力がない、片親が病にかかっている、また両親ともおらず地域の人たちに育てられたと言うケースもあるだろう。

実際に私たちが滞在した5日間でも、一晩だけ里帰りするもの、日中孤児院を出て夕飯前に帰ってくるものと様々。帰宅時のごく自然で、特に気がかりな様子も見受けなかった。



孤児院滞在中、私たちはこどもたちの助けを借りながら自炊していたわけだが、そこで残念なことが一つあった。おたまや水汲み等の調理器具、掃除用具を雑に扱うことだ。現在東ティモールは最貧国とされ、国民一人当たりのGDPは約450ドル、小学校1ヶ月あたりの授業料は約1ドル、とされている現実下で「モノを雑に扱う」という意識が、「モノを大切に使う」習慣を持つ私たち日本人には分らなかった。私たちが大切に運び、協力して下さった日本の方々からの気持ちが沢山詰まった物資もこのように扱われてしまうのだろうか考えると、なんとも切ない気持ちになった。

また、他ボランティア団体が届けた手付かずの物資(大量の携帯ラジオ)を見かけた。これらからは、必要な物資を見極めること、物資をただの「モノ」として与えるのではなく「気持ちのこもったプレゼント」として渡すことが大切だと考えられる。現に、物資の一部としてプレゼントしたボール類・空気入れは大変喜ばれた。毎日のように子供たちから遊ぼうと手を引かれ、単にボールだけではなく、私たちとの友情や心への癒しをもプレゼントすることができた。

引率して下さった林先生や、現地でお世話になったOISCA東ティモール支部代表のリトさんからもお話があったが、文教ボランティアズ最大の強みは独立戦争の被害を受けて孤児となったこどもたちの「心を癒す」ことができることだ。どんなにお金を出しても買えない「心の底からの笑顔」や「友達となり心を支える友情」を私たちは築くことができたであろう。

参考文献

資料1 : Project funded by UNICEF East Timor, Assessment of the Situation of Separated Children and Orphans in East Timor, May 2001

バギア村の人々の生活

<生活環境>

今年のバギア村へのアクセスは、首都ディリから約3時間かけてバウカウへ、バウカウから4時間かけてバギア村へという具合に、2段階に分けて行った。バギア村はバウカウ県に所属し、小さな10の集落に約10772人2403世帯が住んでいる。バギア村には毎日開かれるマーケットはなく、週に2日（月・金）ほど小さなマーケットが開かれるだけだった。あとは、孤児院のすぐそばに、小さな店があった。村民の交通手段としては、トラックを使った乗り合いバスがあり、私たちがバギアに向かう途中、何度もすれ違った。1台のトラックに20～30人は乗っているように見え、細い道をすれ違うときなどは、命がけだった。事故で大けがをする人も、しばしばいるようだ。

私たちの今回の滞在では、通訳がいなかったり、ホームステイがなかったりしたこともあって、現地の人の生の声を聞くことが出来なかった。今年は私たちが行く直前に、グスマン大統領がバギア村を訪問するということが、道が舗装されていることを期待していたが、実際は去年とほとんど変わっていないかった。変わったところを挙げるとすれば、警官がいるようになったことだ。しっかりと警官の服を着て、村を監視していたが、常駐しているかは定かでない。電気は、基本的に夜の7時から12時までだが、これもまちまちらしい。バギア村の孤児院では、水を山の上から引いて貯水槽のようなものに水を貯めていたが、近所の人とその水を汲みに来ている様子を何度も見かけた。水は山から引いているため絶対の安全性は保障されていない。



<現金収入>

現在の農業は豆やピーナッツ、玉ネギ、コーンなどが主流であるが、5年前まではジャガイモやキャベツも収穫していた。生活は自給自足できるが、主に子供たちの学費を稼がなければならないため現金収入が必要である。現金収入を得たい場合には、地元のマーケットで売るか、大きなマーケットのあるバウカウやディリにまで売りに出かけるかのどちらかである。バギア村から売りに行く手段はいずれもバスであるが、バギアからバウカウまでの乗車料金は一人約4ドル、ディリまでは約8ドルも掛かる。これでは、売った利益がなくなってしまう、結局は現金収入をほとんど得ることは出来ない。こういった状況がバギアでは未だに物々交換の習慣を成り立たせており、よりいっそう現金収入を得ることが難しいのである。

<道路>

バウカウからバギアの道は、全く舗装整備もされておらずガタガタだった。日本のような普通の道路というより、山道や崖道などの険しい山道といった感じで、車での移動はまるでアトラクションに乗っているかのような乗り心地だった。道路状況に関しては、去年とはあまり変わっていない様で、道幅は狭く、対向車とすれ違うのも危険であった。さらに雨季ともなれば、道路自体が通れなくなってしまう。

<バギア村の発展>

今後どうすればバギア村が発展するかは、本当に難しい問題であるが、やはり第1はインフラ整備である。バギア村は前述のとおりお店がほとんどないので、村民は自給自足の生活をしている。農業をもっと盛んにすることも、バギア村の大きな発展につながると思う。

バギア村の教育について

・ 小学校 (6~12歳)

生徒数：約900人 (生徒を午前と午後の2部に分けて授業をしている)

先生の数：12~13人 (うち5人が教会や政府からの派遣) 授業料 (1人)：1ドル/月

・ 中学校

生徒数：179人 先生の数：12人 (うち、9人が政府、3人がサンホセ教会からの派遣)

授業料 (1人)：2.5ドル/月

教科 (選択制)：言語 (テトゥン、ポルトガル、英語) 数学・地理・物理・芸術・体育・経済・宗教
※物理や化学の難しい分野には、インドネシア語で書かれた教科書を使用している。

話を伺う中、孤児たちと生活していく中で、教育面で3つの大きな問題が挙げられると感じた。

<学費>

1ドル/1日の収入といわれているティモールの実際は、自給自足の生活ができるにも関わらず、子どもの学費を払うために、働いているケースが多く見られる。それゆえに、1ドル/月の授業料の小学校と比べ、2.5ドル/月の中学校に進学している子どもの数は少なくなっている。ちなみに、旅先で出会った人たちに目立ったのが、兄弟の多さである。二桁の数の兄弟がいることもざらである。これは、発展途上国独特の多産の傾向だが、それだけ多くの人数の学費を工面していくのはかなり困難である事が分かる。



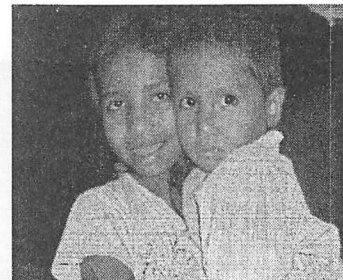
<言語>

小学校では、国が独立するまではインドネシア語、現在はポルトガル語を主として習っているようだ。つまり、ある年齢を境目として、違う言語を習得していることになる。これは、国の将来としても深刻な問題になりかねない。国の体制を整えていく上で、語彙が少ないテトゥン語は弊害が多く、国際分野に出ていくことを考えると第二言語が重要だが、バラバラなのが現状だ。中学校という段階で4つの言語が交錯する環境は、日本の中学生とほぼ同じレベルの内容に触れているにしても、身につくづらさに違いない。実際に英語を学ぶある高校の卒業生は英語を喋れる点で収入が確実によくなっているのを感じると、国の選択は国民に強く影響している。



<人数>

上にも挙げたとおり、多産である。それゆえに、教員の数が入り足りない。そもそもポルトガル語を使える教師がいないのは深刻な問題だ。バギア村の小学校900人を掘っ立て小屋のような教室に収容するのは、実際に見ることはできなかったが、想像しただけでも、勉強をするのに好ましい環境とは言えない。



このように、東ティモールの教育分野は、国そのものが抱えている問題がかなりダイレクトに反映されてしまっている。支援していく段階でも以上のような問題を視野に入れた上で、本当に必要とされるものを選定する必要がある。ゆえに、私たちが政治的にアプローチできるならば、こういった現状を抑え、なるべく広くティモールの人々が、よりよい教育を受けることができる体制をイメージしておく必要があり、それに伴う子どもの労働や、金銭面の流通などに関しても配慮していく必要があると感じた。

環境と植林

東ティモールの自然環境

まず空港に降り立った瞬間に、禿山が目についた。禿山には木があまりなく、表面に草が少し生えているだけのようなのだ。特にディリ周辺は、緑豊かな山は見られなかった。またディリからパウカウに向かう途中で砂山のようなものもあり、雨で土壌が流され、生えている木が傾いていたところもあった。そこは他の地域より雨が少ないため、土がやせ、もともと作物や木々が育ちにくい土壌だそうだが、そのまま放っておいたのではより砂山が拡大し土砂崩れも深刻になるだろう。

木が少ない原因としては、気候によるものに加え、燃料が主に薪であるため過剰伐採が進んでいることが挙げられる。私たちがファトマカからバギア村に向かう途中寄った薪の販売所でも、周辺には薪にするため幹のみ残し、枝を全部切り落とされた木や、焼かれている木などがたくさんあった。さらに貧しい地域では幹さえも切り倒していた。違法伐採をするものも多いという。この過剰伐採により、実際に近年東ティモール全土において、森林の再生が追いつかず、各地で地滑りや落石、鉄砲水が頻発しているようである。

バギア村での植林活動

孤児院滞在中 2 日にわたり、アフォロイカイ・オソフナ・ハエコネ・アラワクライックという山奥に入った 4 つの集落で 50 本ほどの植林を行った。植林後の管理を任せるため、すべて学校の敷地内に植えた。穴を掘るのは技術が必要で、孤児院の子供たち、もしくは現地の人でディッキングスティックで穴を掘ってくれ、私たちは土をかぶせた。土は苗木が乾燥するのを防ぐため、空気が入らないようしっかり入れた。

4 つのうち 2 つの集落は昨年の活動でも植林を行った所だが、苗木と思われるものは 2 本しか残っておらず、きちんと管理ができていないようであった。主に作業を行ったのは現地の人であったが、その地域の人自身が植えることにより、愛着が湧き、大切に管理されるのではないかと考えられ、啓発になったように思う。



植林の問題点と今後の対策

<植林後の管理>



昨年植えた苗木がほとんど残っていなかったことから分かるように、管理がしっかりできていないようだった。この国では家畜が多いため、せっかく苗木を植えても育つ前に食べられてしまうことが多い。そのため苗木を木の枠で囲み、家畜から守ることが大切である。一部の学校で囲いがしてある苗木が少しあったが、作りが雑なため大きく隙間が開いていた。やはり管理者の意識が低いことがうかがえる。林先生が帰国後、東洋大学で開催されたシンポジウムで東ティモールのラモス・ホルタ外務協力大臣に私たちの活動を紹介した際に、ホルタ氏から「住民に森林保護についてのインセンティブ（動機）を与えなければ植林は成功しないだろう」というコメントをいただいたことから、住民にもっと意識を高めてもらえるよう啓発していく必要があると感じた。そのため、私たちのような外国人が木を植えるというのは、啓蒙になったのではないかと思う。また、知識もないようなので環境教育の必要性も感じた。

<リトさんのお話から>

バギア村からディリに戻った際に、リトさんと夕食をしながら話を聞くことができた。そこで森林荒廃や植林についても少し伺った。森林が荒廃すると雨によって土砂崩れが起き、豊かな土壌が流されてしまうため、農業従事者の多い東ティモールでは人々の関心も高まってきており、あと5年で木の伐採が禁止になるそうである。木が守られるのはいいことであるが、一方で早急に薪の代わりとなる燃料を探す必要があると考える。また薪を売ることではしかお金を得られない人々の今後の生活が気がかりである。

さらに、植林を行ったバギア村は緑豊かであるため、本当に木を必要としている禿山にこそ植林を行うべきだと考える。しかし禿山では管理する人がいないうえ、特別な技術が必要なため植林は難しいとのことだった。しかし今後研究が進んで植林が広がり、東ティモール全体が緑豊かになれば、土砂崩れなどの自然災害の減少だけでなく、森林の治水能力により水問題も解決するのではないかと考える。

活動の反省

<OISCA・DonBosco>

バギア村孤児院以外での宿泊は、OISCAの農業訓練校とDonBoscoの職業訓練校にお世話になった。ここではある程度安全が確保されているため、安心して過ごすことが出来た。また、私たちのことをとても気遣ってくれ本当に色々とお世話になり、東ティモールの人々の優しさを実感した場所でもあった。しかし、私たちのここでの行動は時間を守れないなど、迷惑を掛けてしまう機会が多くあった。私たちの活動目的はボランティアである。一人ひとりが自発的にこの国の人々のために何かをしてあげたいと思って参加しているのだから、ここで迷惑を掛けているようではボランティア活動をしに来た意味がない。孤児院だけでなくこういった宿泊施設においてもボランティア活動をしに来ているという意識をもっと高く持つべきであった。

<移動>

バギア村へ向かう際は3台のレンタカーを借り、何の問題もなく無事に孤児院へ行くことが出来た。しかし、バギアへ着いてからは植林をするための移動中に一台の車の調子が悪くなってしまった。また、バギア村からの帰りにはもう一台の車が2回もパンクしてしまったため、スペアタイヤがなくなってしまい動けなくなってしまった。その際、先生が乗っていた車とは離れていたためお互いの連絡が取れずに身動きが取れなくなってしまった。しかし、私たちの様子を見て声を掛けて来てくれた外国人の方に携帯電話を借りられたため、無事に先生と合流することが出来た。その後は先生が乗っていた車のスペアタイヤを付けることが出来たのでディリへ帰ることが出来た。

また、現地のドライバーはスピードをととても出す。3台の車が離れないように走るようお願いしても結局はどれか一台が離れてしまう。携帯電話は今年から東ティモールでも使うことが出来たので、来年は2~3台携帯電話を持ち、お互いに連絡が取り合えた方が安全なのではないかと思う。

<通訳>

私たちが活動するにあたって現地の情報を手に入れたりすることにおいて通訳はとても重要である。しかし、今年は協力を頼んでいたOISCAの方が忙しいということで通訳をする方と一緒に行くことが出来なかった。そのため、孤児院でのデモンストレーションでは英語が出来る子がいたので、その子に通訳してもらったものの、なかなか伝わりきらなかった。こういう事態に備え自分たちだけで出来る活動というものを考えなければならなかった。

しかし、逆に通訳がいなかったことによってお互いがお互いを一生懸命理解しようとした。私たちも少しでも気持ちが伝わるように、現地の言葉を覚えてしゃべり掛けるととても喜んでくれた。通訳がいなかったことによってマイナスな面もあったが、頼れる人がいないので積極的に自分たちから話し掛けるようにもした。子どもたちとの会話は基本的にほとんど通じていない。しかし、特に問題はなく毎日楽しく遊ぶことが出来た。

<孤児院での活動において>

私たちが孤児院で出来る事といえばやはり子どもたちと遊ぶことが主な活動になってしまう。それでも子どもたちのために何か出来ないか、ということで今年も衛生教育やソーラークッカー、ゴミ拾いなどをして子どもたちの意識改善に取り組んだ。活動内容としてはデモンストレーションを行って子どもたちに手を洗うことや資源の大切さを呼びかけた。また、孤児院周辺のゴミ拾いも子どもたちと一緒にいった。ゴミは捨てるものではなく捨てると拾わなければいけないのだということを教えるためである。しかし、どの活動も一日や1時間など短い期間のものばかりで子どもたちには理解しづらかった。単発的ではなく、私たちの滞在期間は5日間と短いけれども、その中でも毎日決まった時間にゴミ拾いなどをして子どもたちの生活の一部として取り込むことによって、もっと分かってもらえたように思う。「習うより慣れよ」の精神で、子どもたちの生活に直接つなげて行けるようにしなければならなかった。その点において、昨年と同様のやり方を取ってしまったので、今年の活動を昨年よりももっと意義あるものにすることが出来た。

<支援物資>

支援物資は現地のニーズに合ったものを持って行かなければ私たちの一方的な押し付けになってしまう。そのため、今年は現地の情報を元に何が必要なのかということ考えた。しかし、先にも述べたように細かな連絡を取ることが出来ないため現地の情報を手に入れることは出来なかった。文房具などに関しては、子どもたちが毎日使うものであるため必ず必要である。しかし、その他については、支援するものを見極めることはかなり難しく、結局私たちの押し付けになってしまう部分が多くなって来る。現地のニーズに合わせて確実な支援が出来る資金援助というものも重要であると思った。今年も昨年直したドアノブが壊れてしまっていたため新しいドアノブに交換し、テーブルクロスなどもボロボロになってしまっていたので募金活動でいただいた資金によって直すことが出来た。しかし、私たちの活動は協力していただける方々がいるからこそ成り立っている。そのため、その協力により集められた物資を無駄にすることは出来ない。この支援物資をもっと確実に子どもたちのためにつながらせていかなければいけない。そうしなければ、孤児院に対しては押し付けになってしまい、この活動に協力して下さった方々には失礼である。どうすれば、子どもたちのためになり、協力して下さった方々の思いを子どもたちに確実に届けることが出来るのかということを入り込んで考えて行くのがわたしたち学生の役割でもあると思う。

<帰国して>

事前準備では、現地の情報を多く手に入れたかった。しかし、現実的に現地とこまめに連絡を取りあうことは難しいため、孤児院の「今」の状況を知ることは出来なかった。また、昨年の報告書からだけでは現地の様子を詳細に把握できず、自分たちが何をすべきなのかを明確にすることが出来なかった。自分たちには何が出来て何が出来ないのか、子どもたちは一体何を求めているのか。

私たちが直接現地へ行き何が必要なのかある程度は理解出来たように思われる。1年で大きな変化をし、わたしたちが来年引き継いで行きたいと思っていた活動が無駄になってしまうかもしれない。しかし、それでもこまめな連絡を取れない以上、私たちの活動においては昨年の活動が一番新しい情報となってくる。そのため、私たちの現地での活動は2004年9月4日に成田空港に降り立った瞬間に終わってしまったが、それでも東ティモールへ直接行った一人として次へ向けて考え、来年に引き継いで行くという意味においては大きな役割がまだ残っていると思う。



友情から生まれたもの

国際学部 4年 小椋友季

東ティモールが独立を果たして、約3年。ディリを離れると、電線の切られた電柱や、焼け焦げたコンクリートの家など戦争の悲惨な跡形が目飛び込んでくる。独立戦争は20万人もの犠牲を出し、その影響は孤児の増加にまで及んだ。

私たちの主な活動は孤児院に滞在し、孤児たちと生活を共にすることだった。子供たちと遊び、不慣れたテトゥン語を使って会話をする。ただこれだけの活動を聞いてどれほどの人達が共感し、応援をしてくれるだろうか。もちろん1日1ドル以下の生活を強いられている東ティモールでは、資金援助や支援物資なしでは孤児たちの通学、孤児院の運営は困難なものであろう。しかし、5日間の滞在を通して物質的な支援だけでなく、孤児たちは確実に人の温もりを求めていることを実感した。私たちはこの国の展望に欠かせない、子供たちを「友情」を通して継続的に支えていきたいと思う。そして多くの人に現地の現況を伝え、特別な技術や資金はなくても、きっと私たちにできる事があると伝え続けていきたい。

「Collega! (コレガ; テトゥン語で“友達”という意味)」この言葉に何度笑顔をもたらしたことだろうか。たった5日間の孤児院滞在ではあったが子供たちは、私たちをコレガと呼ぶ。キッチンから寝室までのわずか5~6メートルの廊下でさえ子供たちは私たちの手を取り、笑顔で手をつなぎたがる。普段甘える相手がない環境で暮らす彼らは、私たちをすぐに受け入れ「コレガ!」と呼んでくれた。私たちボランティアズの意識が変わり始めたのもこの言葉が始まりかもしれない。

私たちが訪れたバギア村は、首都ディリから車で片道約8時間のところにある。まだ舗装されていない赤土の道や、山水を引く壊れかけのパイプ、決して綺麗だとは言えないマーケットを目の当たりにして、私たちはまだ自分たちに何が出来るのかと不安を抱えていた。学生ボランティアの私たちには、最も必要とされているインフラ整備や孤児院の生活を変えるような技術やお金もない。しかし、それでも何か力になりたいという思いが私たちを突き動かし、不安と大量の物資を抱えて孤児院があるバギア村に向かっていった。

私たちのボランティアに対する意識が「物質」から「友情」に移るのは孤児院に到着して間もなくのことだった。「No home(家はないんだ)」とつぶやく子供や、「遊ぼうよ」と目を輝かせてせがむ子供たちを見て、子供たちの心を癒してあげたいと誰もが強く感じた。

物質的な援助との違いの1つに、「限度」がある。彼らの友達となり、彼らの心を支えることに限度はない。「側にいて遊んであげる」ことはこの先どんなことがあっても協力という意味において、友達でいる限り終わることはないのだ。これこそが文教ボランティアズ最大の強みである。お金を出せば誰にでもできる物資やインフラ整備と違って、子供たちの心はお金では癒しきれないのだ。私たちは、子供たちの側にいて遊ぶことに重点を置き、滞在時間のほとんどをそれに費やした。

東ティモールにはまだ国を支える産業が樹立していない。そのため、2002年に独立を果たしたものの、農産物以外のほとんどのものはインドネシアに依存している。OISCA 東ティモール支部代表のリトさんとお話した際「依存と協力は違う」と力強く話してくれたことは今でも記憶に残っている。物質的な独立にはまだ時間がかかったとしても、決して精神的な独立は諦めてほしくはない。彼らと寝食を共にして築いた友情が、少なからず彼らの精神的な独立の支えになり、将来を作る彼らの気持ちの一部になってくれることを願ってやまない。

「モノは消えても、思い出は消えない。」

彼らに対する希望と同時に、私たちが互いに芽生えた友情が今後の私たちをも突き動かし続けると言わんばかりに帰国後よくこの言葉を口にするようになった。

今私たちにできることは、現地で得た経験や感情を一人でも多くの人に伝え、彼らの証を伝えていくことである。実際に自分の目で見て感じたことを伝え、関心を持ってもらうことが、更に大きな協力を呼ぶからだ。これは経験したものの使命でもあり、また彼らの願いでもあろう。

ボランティアは、自発的に提供するだけではなく、彼らの優しさに触れ感謝の気持ちを持った時再び「何か力になりたい」という行動の連続であるように思う。東ティモールという最貧国の現状を自分の目で見てみたい、何か自分にできることはないかとそれぞれの目的を持って集まった9人が、今回の活動を終えて共通に思うことがある。

「また東ティモールに行きたい！」

皆それぞれの目的に答えを見つけ、学生ボランティアの意義や帰国後自分達に何ができるかなど、私たちが支援したこと以上に多くのことを学んだボランティア研修でもあった。そして帰国後もなお彼らのために何かできないかと模索し、情熱を持って動き続けるのも彼らとの間に友情があるからだろう。

今回の東ティモール研修では、多くの方々のご協力のおかげで全員無事に充実した研修を終えることができた。国内活動でお世話になった茅ヶ崎市民の皆様をはじめとする地域、学内の方々や、ティモール国内ではNGO、国際機関の方々の助言を受け、開発過程の生きた東ティモールを肌で感じることができた。

そして、今年度もまたティモール研修を実施して下さった先生方に心からの感謝を申し上げたい。

最後に、この報告書を読んで下さった皆様が我々の活動に何を感じていただけたらだろうか。もちろん私達はまだまだ勉強不足であるため、事実関係などに関しては少なからず間違いもあるかと思う。しかし、あの暑い太陽の下で私たちが触れ合った人々は、今も海の向こうで生活している。この報告書は彼らの生きる証であり、友情の産物である。NGOや国際機関、政府官報とは異なった学生からの視点だからこそ、柔軟かつ純粋な感覚で彼らを表すことが出来たのではないだろうか。報告書を読んだ皆様が、東ティモール、さらには開発途上国に生きる人々を身近に感じ、彼らの為になんかをしたと思ってもらえたら幸いである。

東ティモールで出会えたすべての人々の笑顔が、いつまでも輝き続けていきますように。



ボスニア・ヘルツェゴビナ、東ティモール活動報告

<ボランティア支援募金>

総額		¥483,552
(内訳)	湘南キャンパス内	¥23,719
	茅ヶ崎駅 街頭募金	¥147,671
	団体 募金	¥182,542
	振込み	¥1,000
	東ティモール指定	¥26,243
	ボスニア・ヘルツェゴビナ指定	¥102,377

- * 湘南キャンパス内は、7月4日から7月8日に学生へ呼びかけた。
- * 茅ヶ崎駅では、4日間通行人の方に呼びかけた。趣旨を理解してもらうために、チラシを配布し、写真や地図を準備し説明した。
- * 団体とは、松林中学校・サポートセンター・鶴峰高校・国際交流協会から趣旨を理解してもらい、支援を受けた。
- * 振込みは、新聞やチラシを見て振込みという形で支援を受けた。
- * 「指定」は、募金していただく際に地域指定があったものだ。指定募金に関しては、指定先の支援活動費に充てた。
- * ボスニア・ヘルツェゴビナ指定募金には、35ユーロを含む。
(1ユーロ=142.02円で換算・2005年8月22日時点のレート)

東ティモール活動会計報告

<活動費>

総額		¥203,709
(内訳)	昨年の活動費繰越金	¥120,952
	昨年の共益費繰越金	¥21,243
	募金	¥61,874

換金日時&レート	換金前	換金後
8/18(\$1=113.03)	¥110,592	\$889
8/30(\$1=113.03)	¥79,121	\$700

- * 事前に国内で\$889 換金したが、現地で米ドルが不足したため、共益費の米ドルと活動費の日本円の換金を行った。レートは一定を保つために国内で事前に換金した時のレートを使用した。

国内支出		¥46,717
(内訳)	支援物資	¥12,365
	国内輸送費	¥14,400
	映像支援制作費	¥19,952

- * 文教大学から成田空港までの物資輸送費は、荷物が少なかったことで、昨年よりも減額している。支援物資に含まれているものは、孤児院のパフォーマンスで使う材料や文具、ラジカセとカセットテープ、DonBosco と孤児院でプレゼントした千羽鶴の折り紙、調理道具が入っている。映像資料制作費は、帰国してから作成した、資料保存のための写真現像代、ビデオ資料が含まれている。

現地支出		\$1,365.45
(内訳)	活動物資購入	\$206.45
	孤児院へのファンド	\$500.00
	植木の苗木	\$75.00
	ドライバー代	\$78.00
	レンタカー代	\$490.00
	住民との食事	\$16.00

- * 物資はほとんどをディリにある大型スーパー「リーダーズ」で購入した。内訳は、洗濯バケツ、掃除用具、調理用具などである。他には、孤児院に入ってから、昨年新調したテーブルクロスや、ドアノブ、スイッチが痛み壊れていたため、急遽バウカウの市場で調達した。
- * 孤児院のファンドは昨年と同様\$500 である。今年も孤児院を管理しているオリベイラ神父に手渡すことが出来た。
- * 昨年のファンドは、こどもたちの授業料と学用品にあてられていた。運営費は、孤児院の維持費やこどもたちの学費、食費、雑費等を合わせると年間\$16,165 かかるとのことであり、莫大な費用がかかる。日本円で約 200 万円に上る中の\$500 は、わずかであるが、大切なことは金額ではなく気持ちであると思う。少しでも運営の助けになれるのなら、微力であるがこれからも孤児院へのファンド支援を続けて行きたい。
- * 植木の苗木は、50 本 OISCA から手配してもらった。
- * ドライバー代は、学部予算からも負担している。レンタカーは 3 台調達し、活動費、共益費、学部予算で 1 台ずつ負担した。昨年と比べ物価が上がっていたため、ドライバー代とレンタカー代は増額した。

<総支出>

活動費	現地支出	国内支出	総支出	残高
¥203,709	\$1,365.45 (¥154,336)	¥46,717	¥201,053	¥2,656

<来年への繰越金>

活動費 残金	ルピア 残金	共益費からの寄付
¥2,656	Rp 187,000	¥15,646

- * 今年は全体的に物価が上がっていたため、来年への繰越金を多く残すことが出来なかった。そこで、小額ではあるが、共益費の一部を活動費へ寄付することにした。バリ島で換金したルピアは日本で価値はあまりないため、換金はせずにそのまま来年へ持ち越すことにした。

ボスニア・ヘルツェゴビナ活動会計報告

<活動費>

総額	¥279,843
(内訳) 円	¥89,973
ユーロ (€1,335)	¥189,870

換金日程とレート	換金前	換金後
8/22 (€1=¥142.02)	¥184,899	€1,300

国内支出	¥29,241
(内訳) 準備費	¥14,841
国内輸送費	¥14,400
残金	¥60,732

現地支出		€1,260
(内訳)	LDA ユースセンター支援 (ハンバリン)	€200
	(ルビヤ)	€400
	スレブレニツツア支援	€100
	通訳宿泊費	€60
	通訳代	€500
	残金	€75

- * LDA とは、プリエドールでお世話になった NGO 団体。その活動の一部であるユースセンターの子供への支援に寄付させていただいた。
- * 残金は、次回の活動に繰り越す。

<総支出>

活動費	現地支出	国内支出	総支出	残額
¥279,843	€1,260 (¥179,218)	¥29,241	¥208,459	¥60,732+€75

<来年への繰越金>

活動費 残金	ユーロ残金
¥60,732	€75

- * 今年は活動費が円とユーロを含め多額の金額が残金として残ってしまったため、来年に繰り越すことにした。ユーロは来年にまたボスニア・ヘルツェゴビナまたはコソボを訪れることを考慮し、円に換金せずに来年に持ち越すことにした。

支援物資収集

今回、支援物資を集めるにあたって、多くの方々からご協力をいただいた。物資収集はメンバーそれぞれが母校や恩師を通じて行った。また、広報活動を通じて私たちの活動を知り、賛同して物資を提供して下さった方々もたくさんいた。そうして集まった物資を東ティモール組、ボスニア組で半々に分けて現地へ届けた。

私たちは1人につきダンボール1箱、全部で8箱の物資を個人の預け荷物として飛行機へ乗せボスニアへ運んだ。通常は預け荷物の最大重量が20kgのところ、事前に西鉄旅行を通じて航空会社と交渉をした結果、+15kgの超過が認められたため超過料金がかからずにすんだ。しかし、この交渉はスムーズに行かず非常に苦労した。そして、自分たちの荷物も含めて35kgなので限られた量しか届けられず、歯がゆい思いをした。この問題の解決策を考え、より多くの善意を届けることがこれからの課題であると思う。

東ティモール支援物資一覧

<文房具>

- | | | |
|---------------------|-------------|------------|
| ・鉛筆 約500本 | ・定規 10本 | ・らくがき帳 14冊 |
| ・ペンケース 36個 | ・三角定規 19個 | ・絵の具 280本 |
| ・鉛筆削り 22個 | ・色鉛筆 300本 | ・絵の具セット 5個 |
| ・消しゴム 126個 | ・色鉛筆 4セット | ・パレット 2枚 |
| ・ノート 132冊 | ・虫めがね 18個 | ・筆 5 |
| ・下敷き 111枚 | ・クレヨン 24セット | ・のり 18本 |
| ・クリアファイル 8枚 | ・らくがき帳 14冊 | ・はさみ 7本 |
| ・10色半分鉛筆+鉛筆セット 1セット | | |

<楽器類>

- | | | |
|-----------|------------|------------|
| ・ピアノカ 14個 | ・カスタネット 8個 | ・リコーダー 33本 |
| ・タンバリン 2個 | ・マラカス 2セット | ・鈴 1個 |

<遊び道具>

- | | | |
|-----------|-------------|--------------|
| ・縄跳び 17本 | ・ビーチボール 9個 | ・スーパーボール 17個 |
| ・フリスビー 5個 | ・サッカーボール 4個 | ・バスケットボール 1個 |
| ・こま 12個 | ・折り紙 3.75kg | ・シール 83枚 |

<その他>

- | | |
|---------|-----------------------|
| ・キルト 6枚 | ・苗用黒ポット (OISCA) 約760個 |
|---------|-----------------------|

「苗用黒ポット」はOISCAに届けた。これは苗を作るにあたって重要なものであり、とても喜ばれ、来年も続けて届けていければいいと思う。他の支援物資についてはバギア村孤児院と近隣の小中学校へ届けた。小中学校は夏休みだったということもあり、直接こどもたちに渡すことは出来なかったが、昨年もお世話になった先生に預け今年もその先生からこどもたちの手に渡されることになった。

ボスニア・ヘルツェゴビナ支援物資一覧

<文房具>

- | | | | |
|--------|-------------|-----------|------|
| ・ノート | 272冊 | ・サインペン | 275本 |
| ・筆箱 | 69個 | | 5セット |
| ・鉛筆 | 未使用・・・1186本 | ・色つきボールペン | 98本 |
| | 使用済・・・220本 | ・蛍光ペン | 196本 |
| ・鉛筆削り | 82個 | ・定規 | 10本 |
| ・色鉛筆 | 23セット | ・三角定規 | 26本 |
| | 未使用・・・46本 | ・下敷き | 110枚 |
| | 使用済・・・147本 | ・メモ帳 | 162冊 |
| ・消しゴム | 199個 | ・クレヨン | 28箱 |
| ・ボールペン | 310本 | ・画用紙 | 3セット |
| | 13セット | ・スケッチブック | 3冊 |

<遊び道具>

- | | | | |
|----------|--------|---------|-------|
| ・サッカーボール | 8個 | ・ビーチボール | 7個 |
| ・空気入れ | 3個 | ・折り紙 | 23セット |
| ・シール | 169セット | ・虫眼鏡 | 24個 |

以上の物資をプリエドールにあるハンバリンのユースセンターとルビヤのユースセンター、スレブレニツァにあるセントラル小学校の三ヶ所に分けてそれぞれ届けてきた。

ハンバリンのユースセンターでは届けた物資を、アズラさんが子どもたちのニーズに合わせて1人分ずつパック詰めして渡してもらった。

東ティモール、ボスニア・ヘルツェゴビナへ物資を届けて

ボスニアにおいても、東ティモールにおいても物資を受け取った子どもたちは目を輝かせて物資を手に取り、とてもうれしそうな様子だった。物資収集から始まり、梱包、移動、現地についての仕分けなど大変なことも多かったが、直接子どもたちに手渡し、そのうれしそうな様子を見ていると届けられて本当に良かったと思った。そして今一度、物資を提供してくださった多くの方々へ心より感謝したい。

国内募金・支援物資・広報活動の協力者

茅ヶ崎市民のみなさん
茅ヶ崎市国際交流協会
茅ヶ崎市立松林中学校
茅ヶ崎市民活動サポートセンター
(株)タウンニュース社 茅ヶ崎編集室
神奈川新聞社 茅ヶ崎支局
ふれあい朝日 編集部
ジャスコ茅ヶ崎店
千葉県柏市立高野台保育園
神奈川県立神奈川総合高等学校

千葉県柏市立富勢小学校
千葉県立柏高等学校
神奈川県立大原高等学校
千葉県我孫子市立根戸小学校
神奈川県立鶴嶺高校
静岡県 学習塾アフタースクール
山形県高島市立第三中学校
文教大学学生、教職員、卒業生、父母
山形県米沢市立南原小学校

*皆様のご協力を心から感謝いたします。

広報活動

今回東ティモール、ボスニア・ヘルツェゴビナへの支援物資・募金を集めるにあたって新聞、タウン紙での広報活動を行った。合計5回、3社に文教ボランティアズの記事を掲載させて頂いたことにより、私たちの活動を広く、大勢の人に知ってもらえ、県立鶴嶺高校 JRC 部からもご協力頂いた。また、茅ヶ崎市民活動サポートセンターに物資収集箱を置いたことで、市内外の方々からの物資も収集しやすかった。このように広報活動が行えたのは、茅ヶ崎市民活動サポートセンターの皆さんの協力があったからだ。サポートセンターには新聞社を紹介してもらった他、ジャスコ茅ヶ崎店、茅ヶ崎市立松林中学校も紹介してもらい、いずれも物資収集に協力してもらった。

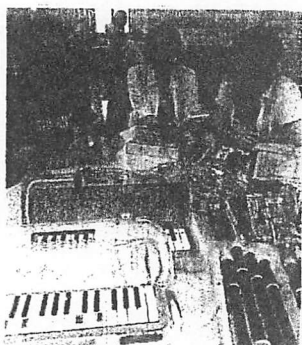
帰国後の広報活動では、タウンニュース茅ヶ崎版に現地での活動報告を連載することになり、東ティモール8回、ボスニア・ヘルツェゴビナ7回を予定している。タウンニュースは毎週金曜発行で、連載は10月28日から始まる。

ご協力頂いた新聞社

- ・ (株)タウンニュース社茅ヶ崎編集室
- ・ 神奈川新聞社 茅ヶ崎支局
- ・ ふれあい朝日 編集部
- ・ スレプレニッツァジャーナル

(注) 治安情勢悪化が予想されたため、8月に急遽コソボからボスニアに活動地を変更した。

文教ボランティアズ掲載紙



地域の活動 世界へ

文教大生らが援助物資募集 内戦で傷ついた子支援

内戦で傷ついたセビリアモンテネグロのコソボ難民や東ティモールの支援として、文教大生(茅ヶ崎市行各)の文教ボランティアズが代表を務めるが八月十日まで、援助物資を募集して、八月下旬に現地を向かい、児童施設や学校の支援活動をする。

内戦で傷ついたセビリアモンテネグロのコソボ難民や東ティモールの支援として、文教大生(茅ヶ崎市行各)の文教ボランティアズが代表を務めるが八月十日まで、援助物資を募集して、八月下旬に現地を向かい、児童施設や学校の支援活動をする。

活動の打ち合わせをする「文教ボランティアズ」のメンバー
＝茅ヶ崎市民活動サポートセンター

今年で五年目になる文大生の理解を得るために市内大学の国際協力センターの学校や地域で協力を呼び掛ける「文教ボランティアズ」が八月十日まで、援助物資を募集して、八月下旬に現地を向かい、児童施設や学校の支援活動をする。

茅ヶ崎市民活動サポートセンター



校JRC部をかねてから文大生は上巻を予定されている。世界の紛争、内戦、貧困などの問題に解決、自国でできることをしたいと、多くの人が共感し、企業や市民団体など継続的な支援ネットワークが広がることを期している。

神奈川新聞 7月29日(金)

神奈川新聞 8月14日(日)

コソボ・東ティモールの

子どもたちを助きたい

文教大学の学生で組織する文教ボランティアズで、今夏の長期休みを利用して、コソボと東ティモールの孤児院や学校でボランティア活動を行う。たぐいま



茶ヶ崎駅前前で現地の写真を手に募金を呼びかけた文教ボランティアズ

「自分たちができることを直接現地でやりたい」と、救援物資の募集や、茶ヶ崎駅前前で募金活動を行った。「独立して3年が経った東ティモールはまだ経済が安定していません。現地の人々はなかなか仕事を獲得することができません。コソボでは民族紛争の結果、まだ十分な生活ができていない人が多くいます。少しでも多くの協力をお願いします」とスタッフは語る。

品目は鉛筆・消しゴム・ノートなど未使用の文房具、子供服のシャツ、短パン、ピアス、靴、カステタネット、サッカーボール、バレーボール、縄跳びなどの遊具など。募集期間は8月12日(金)まで、収集箱はサポートセンターに設置されている。
問合せは☎090(6933)4977まで。

タウンニュース茅ヶ崎版

7月29日(金)



子供たちに寄付する

文房具・楽器・遊具などを募集
文教ボランティアズ 8月に東ティモール、コソボへ

文教大学(茅ヶ崎市行谷)の学生有志による「文教ボランティアズ」が、8月下旬から9月上旬にかけて、「東ティモール」、「コソボ」を訪れ、ボランティア活動を行う。2001年の発足以来、毎年行っている活動で、今年で5年目。学生らは、現地の子供たちのための支援物資と募金の協力をお願いしている。

現地では、NGOの協力のもと、孤児院の清掃活動、学校支援、植林などを行う予定。昨年初めて東ティモール・バギア村を訪れた竹中亮太さん(4年)は、「とにかく電気や水の供給が不十分でした。また、病院も薬もないので、ケガをしてもそのままの状態。学校では文房具などが不足していて子供たちは十分な教育を受けられない状況です」と、そのときを受けた衝撃を切々と訴える。

物資収集期間は8月12日(金)まで。「ご家庭に眠っているものがあつたらぜひ協力していただきたい」とのこと。

18世紀～1974年までポルトガルの植民地。1975年、独立宣言。直後にインドネシアが東ティモールを併呑。以後インドネシアが事実上併呑したが、2002年に独立。独立に際して、各地で「15年戦争」が起きた。2002年、東ティモールの独立を承認した。2002年、東ティモールの独立を承認した。2002年、東ティモールの独立を承認した。



▲茅ヶ崎駅北口前で行われた募金活動の様子(7月9日)

◎支援物資募金ヶ崎市民活動サポートセンター(茅ヶ崎駅北口徒歩10分)設置の収集箱または電話メールにて連絡。鉛筆・消しゴム・ノート・鉛筆削り・定規・クレヨン・百ペニアカカスタネット・ボール・縄跳び・子供服など。現物でもできる限り未使用のもの。状態の良いものを募金。みずほ銀行茅ヶ崎支店281口番番号1022600「文教ボランティアズ代表者佐藤真実」の連絡先。☎090-6933-4977事務局。メール

ふれあい朝日 7月21日(木)

戦後復興国の子どもへ

支援物資を募集

文教大学の学生で組織される文教ボランティアズで、今年8月下旬から9月上旬にかけてコソボと東ティモールの孤児院や学校でボランティア活動を行う。たぐいま



支援物資を手にとり嬉んでいる子どもたち(昨年の様子)

支援などを行ってきた。今年は8月下旬から9月上旬にかけてコソボと東ティモールの孤児院や学校でボランティア活動を行う。たぐいま

タウンニュース茅ヶ崎版

7月8日(金)

竹中亮太さん ☎090(6933)4977 または bunkyo_voi@shonan.bunkyo.ac.jp

今月6日(土)・10日(日)・16日(土)・17日(日)

の4日間、午後1時から茅ヶ崎駅前前で現地に届ける支援金の募金活動も行われる。

Japanci nastupili u Srebrenici



Grupa studenata, članova umjetničke grupe iz Japana boravila je ovog mjeseca u Srebrenici i u saradnji sa članovima KUD „Vaso Jovanović“ organizovan je javni nastup u Domu kulture. Grupa Japanaca nastupila je sa nacionalnim igrama, plesovima i pjesmama, a članovi folklorne sekcije izveli su „Ciganku“ u koreografiji Ahme Begića. Zabavno veće upotrijunili su magistar Milorad Miličević izvedbom narodnih kola na fruli, te članovi muzičke sekcije KUD „Vaso Jovanović“ – klavijaturista Snježan – Bata Grujičić i bubnar Salim Salimović. (S.S.)

スレブレニツァジャーナル 10月号

コソボ視察活動

2005年3月1日～8日

参加者

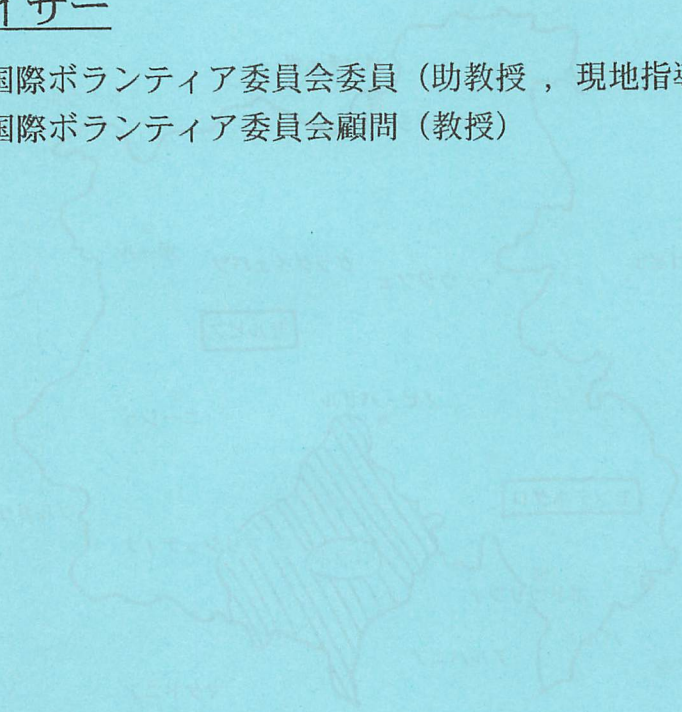
国際学部国際関係学科
国際学部国際関係学科

3年 三野 舞子
3年 吉澤 良介

アドバイザー

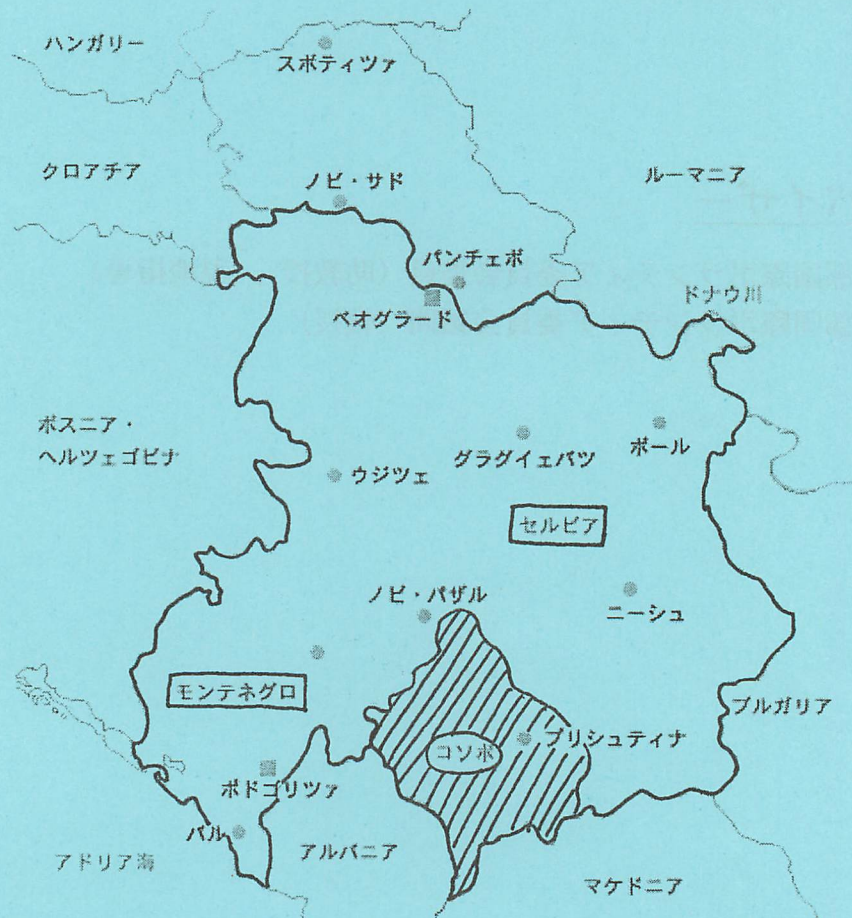
国際学部国際ボランティア委員会委員（助教授，現地指導）
国際学部国際ボランティア委員会顧問（教授）

生田 祐子
中村 恭一



視察スケジュール

- 3月1日（火曜日）・・・コソボ自治州の首都プリシュティナ着。
- 3月2日（水曜日）・・・コソボ西部の都市ペーヤに移動。
- 3月3日（木曜日）・・・ペーヤにあるアートスクール（オディセ・パスコリ）を訪問後、同じくペーヤにあるモスクを訪問。
- 3月4日（金曜日）・・・セルビア人地区とアルバニア人地区、両方の学校を訪問。その後デチャニのセルビア正教会・修道院を見学。
- 3月5日（土曜日）・・・ペーヤの市街地を散策。プリシュティナへ移動。
- 3月6日（日曜日）・・・アルバニア人が大量虐殺されたラチャック村を視察。その後、ラツァニツァのセルビア正教会を見学。
- 3月7日（月曜日）・・・NGOのコソボワールドビジョンとヘンディファーが行っている障害者支援活動のブリーフィングを受けた後、シェムシーアさんの家庭を訪問。
- 3月8日（火曜日）・・・ミトロビツァで高校生のファットメイラさんに会い、彼女が行う平和活動について話を聞く。



コソボ

コソボ自治州 基礎データ

- 面積・・・ 10,887k m² (岐阜県とほぼ同じ大きさ)
- 人口・・・ 約 190 万人 (国勢調査を拒否する人がいるため正確にはわからない。)
- 首都・・・ プリシュティナ
- 民族・・・ アルバニア系 (88%)、セルビア系 (6%)、スラブ系ムスリム (3%)、ロマ系 (2%)、トルコ系 (1%)
- 言語・・・ アルバニア語、セルビア語、ボスニア語、その他の少数民族の言語
- 宗教・・・ イスラム教、セルビア正教、カトリック
- 政体・・・ 国連による暫定統治
- GDP・・・ 20 億ユーロ (一人当たり 944 ユーロ)

参考 外務省ホームページ <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/yugoslavia/cl>

視察の目的

大学に入学し、国際関係や国際協力について学んできたが、授業や新聞、本から、そこで生活している一人ひとりのことやその国の雰囲気を読み取ることは難しい。

しかし、これからより深く国際関係を学ぶ上で、世界で起こっている様々な問題や紛争について、そこに住む人々の目線に立って考えることが求められる。

今回、コソボ行きを決めた理由は、紛争を他の国の出来事として考えるのではなく、同じ地球上で起こった自分たちの問題として考えられるようになりたいと思ったからである。そして、そのためには紛争復興地域を自分の目で見て、そこに住む人々の話を聞き、紛争とはどういうものなのかを肌で感じる必要があると感じたからである。

視察活動

<アートスクール (ODHISE PASKALI: オディセ・パスコリ) 訪問>

コソボ滞在 2 日目の 3 月 2 日に、州都プリシュティナからコソボ西部のペーヤに移動した。そして 3 月 3 日にペーヤにあるアートスクールを訪ねた。

この学校は 1949 年創立でコソボ、そして旧ユーゴスラビアの中でも唯一の芸術系の学校であるので、生徒はコソボだけではなく、様々な近隣国からもやってくる。今年は生徒数 370 人に対し、入学試験では約 680 人が受験した。生徒の中にはコソボの中の少数民族であるロマの生徒も二人いて、授業で使われるアルバニア語がわからないので、学習をサポートするシステムが出来ているという。

授業はグラフィックデザインや陶芸、演劇などの 8 つの科に分かれていて、とても多彩で、学習内容が充実している印象を受けた。しかし、校舎は古く、設備が充実しているようには見えなかった。この学校は公立の学校であるので、授業料は無料であり、校舎などの改修にも政府の助けが必要なのだが、政府は小学校や中学校への援助を優先するために、このような専門学校は後回しにされてしまうのである。

ここに通っている生徒は卒業後、コソボや海外の大学へ進学する人が多いようだが、経済状態が悪いために (現在の失業率は 60%) 専門性を身につけても大学卒業後に就職するのはとても難しいようである。



<デチャニのセルビア正教会（ネマネッチ教会）>

セルビア人の小学校を訪問した後、ペーヤから程近いデチャニにあるセルビア正教会の教会へ行った。中にいた1人の修道士が、この教会は13世紀のセルビア王国が一番優勢だったころに建てられたものであることや、セルビア王国の中心地であったコソボには多くのセルビア正教会があったが、1999年以降、159の教会が破壊されたことなどを話してくれた。ここでこの修道士から興味深い意見を聞くことができた。それは2004年3月に起こったミトロビツアの事件についての意見である。この事件はアルバニア人の子どもが遊んでいるところを犬に襲われて、川に落ちて亡くなってしまったという事件である。



これに関して、アルバニア人はセルビア人がわざと犬を放したと主張している。しかし、セルビア人はありもしない話をアルバニア人がつくっていると主張している。この修道士もミトロビツア事件はアルバニア人が事実が無いことをでっち上げていると断言していたのは印象的だった。

実はこの教会に来る前、お宅にホームステイさせてもらっており、一緒にセルビア人の小学校にも同行してくださったアルバニア人のアリ・アスラーニ (Ali Asllani) さんと昼食を食べているときに、この事件の話になったのだが、彼はセルビア人がわざと犬を放したと言っていたのである。このように、同じ日に両者の異なる主張を実際に聞いたのは貴重な体験であった。

そして修道士はコソボ紛争の発端について、アルバニア人とセルビア人だけの問題ではなく、外国のメディアが大きく加担したと言っていた。事実はわからないが、とても貴重な意見を聞いたと感じた。

三野 舞子

<アルバニア人地区の学校訪問>

3月4日は、アリさんの子供たち（アンティアン君、アニーラちゃん）が通う小学校を見学した。この学校は、生徒と先生の数の不均衡、教室数の不足などの理由から学校の授業が午前と午後に分かれている。そのため、高学年のアンティアン君は午前中に授業を終え、低学年のアニーラちゃんは午後から授業に行くという。私たちが見学をさせてもらったのは午後だったので、アニーラちゃんの授業風景を見させてもらうことになった。まず、校長先生にあいさつに伺い、その後にアニーラちゃんのクラスを訪問した。教室に入ると、子供たちは興味津々な様子で私達を見つめていた。先生が、私たちが日本から来て、アニーラちゃんの家ホームステイしているということを説明してくれた。その後、自己紹介をしたり、鶴を作ってあげたり、質問を受けたりした。他のクラスからも来てほしいと言われ、低学年のクラスも見学をさせていただいた。中には保育所のようにかなり低年齢の子供たちを扱っているクラスもあり、元気いっぱいの子供たちがいる学校に訪問することができ、うれしく感じたのと同時に、とても貴重な時間を過ごすことができたと思った。

<セルビア人地区の学校訪問>

私たちの乗る車はKFORの検問を通過して、セルビア人地区に入っていった。少し人気のない寂しい感じのするところだという印象が残っている。車が進むにつれて、少し大きな建物がぼつんと立っていた。そこが私たちの訪れた学校だった。少し古めの校舎の隣には広いグラウンドがあり、そこに車を停めてもらい、校舎内に入った。校長先生にあいさつをし、少しお話を伺った。この校舎は国連の協力の下に造られたそうである。その次に子供たちの授業を見せていただくことになった。僕らが見せていただいたのは、地理の授業と英語の授業風景。地理の授業に関しては、私たちが特別ゲストとして訪問したので、先生が特別に日本について授業をくださった。日本の場所、人口、首都などについて、先生が問題を出せば、みんな一斉に手を挙げて答えていた。中でも一番私達を驚かせたのは、「日本に火山はいくつある？」という先生のクイズにも必死になって手を挙げて「56個！」と私たち日本人でさえ知らないようなことを答えていたことだった。それにはさすがに仰天させられた。授業の時間を何分か割いてもらい、鶴の折り方をみんなに教えた。みんな目を輝かせて鶴を折っていた。授業が終わってから、メールアドレスの交換をしにみんなが駆け寄ってきた。最後には、みんなで写真を撮った。私たちが帰ろうとすると、見送りについてきてくれる子達も何人かいた。この日は、

アルバニア人の子供たち、セルビア人の子供たち、両方の子供たちの輝いた姿を見ることができ、本当に素晴らしい日だった。

吉澤 良介

<フェリザイの障害者家庭訪問>

3月7日、コソボ東部のフェリザイに行き、障害者の家庭を訪問した。

まず、プリシュティナにあるNGOのコソボワールドビジョンのオフィスへ行き、ここで働く日本人の本田ひとみさんと同僚のアルベン (Arben Godanca) さんと一緒にフェリザイに向かった。本田さんは障害者を支援しているフェリザイのNGO・ヘンディファーと一緒に仕事をしていて、今回そこを通じて、私たちに障害者の家庭を訪問する機会を作ってくださった。

私たちはまず、障害者の家庭を訪問する前に、ヘンディファーのオフィスで活動について話を伺った。

ヘンディファーは障害者の生活を向上させるための様々な活動を行っているNGOで、特に力を入れているのが障害者の雇用を手助けする活動である。障害者の雇用に関してはフェリザイ市役所も協力的で、市役所の駐車場に障害者の人が座って、入ってくる車から駐車料金をもらうという仕事を提供している。そしてこの先はさらなる雇用対策として、ワールドビジョンとヘンディファーが協力して、車椅子の修理工場を作るそうだ。

コソボでは障害者に関する問題が山積みである。たとえば、医療設備が悪いので、近隣国のマケドニアやアルバニアへ行き治療を受けなければならない場合が多いが、その旅行が障害者にとって大変な負担になっているという問題や義足、松葉杖が必要な人々に届かないという問題がある。

またコソボ全体の失業率が60%と大変高いので、障害者が仕事を見つけられるのはまれであるそうだ。そのため、フェリザイの障害者とその家族の約80%が貧困層に属している。しかし、政府の障害者に対する手当ても条件が厳しく、ほとんどの人が該当しない上に月50ユーロと少額であるのでまったく役立たないという。

オフィスで話を伺った後、知的障害をもつ22歳のシェムシーアさんの家庭を訪問した。彼女は父親を病気で亡くし、母親と2人の弟と暮らしている。9畳ほどの一間で家族全員が暮らしている。電化製品や家具はほとんど無く、とても貧しい印象を受けた。近所の人の援助で洗濯機と水道がやっと最近入ったそうだ。弟の1人は経済的理由から高校を中退しており、もう1人の弟は靴が無くて学校へ行けないそうだ。母親は働きたいと思っているが、24時間シェムシーアさんから目が離せないことや、自分自身も紛争中の精神的ストレスから体を壊してしまい、働きにいけないという。

そのため家族の収入は貧困家庭に対する手当ての60ユーロと障害者手当ての50ユーロのみで家族4人が生活するにはとても厳しい状態である。しかも政府からは障害者手当てを受け取っていることを理由に、貧困家庭に対する手当てを打ち切るといわれているそうだ。それに対して、ヘンディファーがこれまでと同様に両方の手当てを受け取れるようにと政府に働きかけている。

紛争中この家族はシェムシーアさんの父親が病気だったので、今住んでいる場所から離れられず、近くの山に身を隠していた。一週間何も食べられなかったこともあったという。そのために母親は病気がちになり、今でも頭痛と首の痛みで悩まされているが、経済的理由から病院に行くことが出来ないでいる。

この家庭を訪問して、また違うコソボの現状が見えた。この家庭を訪問するまでは貧困の状況を実感することが出来なかった。経済状況が悪く、失業率が高いといっても街にはスーパーがあり、食べ物がたくさん売っている。そして、レストランや商店なども多くあったからである。しかし、それは都市部の話で、少し都市から離れ、特に障害者がいる家庭ではシェムシーアさんのような家庭がほとんどだという。今回この家庭訪問を通じて、表に見えないコソボの現状が見えてとても勉強になった。また、援助の必要性を強く感じた。



<ファットメイラさん>

3月8日、前日と同様にNGOのコソボワールドビジョンの本田さん、アルベンさんと共にコソボ北部のミトロピツアにあるコソボワールドビジョンのオフィスに向かった。

ここで17歳のファットメイラ (Fatmire Feka) さんに会い、話を聞くことが出来た。彼女は2002年からコソボの平和のための活動をしており、その活動に賛同したコソボワールドビジョンが彼女をサポートしている。

彼女は紛争中に兄弟の2人が行方不明になっており、未だに見つかっていないというつらい経験をしている。彼女自身もそのつらい過去を忘れることは出来ないが、セルビア人を許す努力をし、平和な社会をつくるために前に進まなければならないと思ったそうだ。そう思い始めたきっかけは紛争中に泣き叫ぶ子どもや多くの悲しんでいる人を見て何かしなければならぬと感じたところにあると語ってくれた。活動を快く思っていない人も多くいるために身の危険を案じ、初め家族は反対したそうだが、今では彼女の活動に賛同して応援してくれている。

彼女が行ってきた活動のひとつは10人のアルバニア人の子どもたちと5人のセルビア人の子どもたちみんなと一緒にモスクと教会をそれぞれ訪れて、互いの宗教や文化を尊重して、宗教は紛争の理由にならないと感じさせるということだ。子どものうちに差別感を排除して仲良くなることは、子どもたちが大人になったときに平和な社会をつくるのに大きく貢献すると思う。また、2004年のミトロピツアでの事件の際には平和を訴え、行進もしたそうだ。

私たちがのように紛争の当事者でない者は、相手を許して共に平和を構築しなければならないと簡単に考えるが、当事者にとって自分の家族や友達を殺した人を許すことは容易ではない。しかし、彼女は平和な社会をつくるにはお互い許すことが必要だと声をあげた。

すばらしい勇気をもっているファットメイラさんに出会えて、彼女の意見を聞くことができ、とても勉強になった。これからもっと彼女の考えが認められて、賛同する人々が増えればアルバニア人とセルビア人の溝が埋まり、コソボに本当の平和が訪れる日も近いだろう。

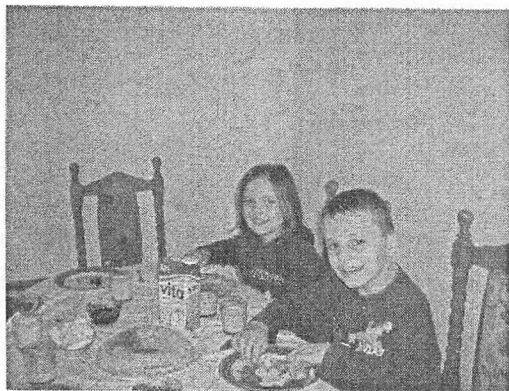


視察を終えて

同じ土地に住む民族が憎しみあい、紛争が起こり、今も同じ土地に線を引き別々に暮らしている。その状況を自分の目で見て、それぞれの土地を訪れ、話を聞くということはとても貴重な体験であった。

紛争の当事者ではない私たちが平和を訴えるのは簡単なことであるが、実際に紛争を体験し、大切な人を失った人々が相手を許して平和構築のために歩み寄ることが、いかに難しいことなのかを実感させられた。しかし、それと同時にファットメイラさんのように平和なコソボをつくるために勇気を出して立ち上がった人に出会えて、今後のコソボに対して希望が持てた。

これから国際関係や国際協力をより深く学び始める私にとって、今回のコソボ訪問はとても実りあるものであった。今までは客観的にしか見られなかった紛争というものが、少し当事者の目線から考えられるようになったと思う。この貴重な経験から学んだことを、これから先の勉強に大いに役立てたい。



最後に、コソボ人権センター (Kosovo Human Rights Centre) 代表のネシャッド・アスラーニ (Dr. Neshad Asllani) さんとそのご家族、ペーヤで通訳と案内をしてくださり、ホームステイもさせていただいたアリ・アスラーニさんとそのご家族、プリシュティナ滞在中に通訳と案内をくださったゼチャ・アデミ (Zeqir Ademi) さん、ワールドビジョンコソボの本田ひとみさんをはじめとするスタッフの方々、そして、コソボでお世話になったすべての人たちに心より感謝したい。

三野 舞子

ボスニア・ヘルツェゴビナ、 Kosovo の活動でお世話になった方々

[順不同・敬称略・すべてお世話になった時点での肩書き]

サラエボ(Sarajevo) :

疊 二夫 (もたいつぎお)

在ボスニア・ヘルツェゴビナ日本国大使館 臨時代理大使

室谷 龍太郎

在ボスニア・ヘルツェゴビナ日本国大使館 2等書記官 経済協力担当

斉藤 由美子

在ボスニア・ヘルツェゴビナ日本国大使館 Senior Advisor

Iacob Prada

Deputy Head of Mission, Embassy of Romania

泉谷 晃

JICA 援助調整専門家/ボスニア・ヘルツェゴビナ

政府対外貿易経済省アドバイザー

渡辺 松男

JICA 専門調査員/ボスニア・ヘルツェゴビナ政府

経済政策計画ユニット 経済政策首相アドバイザー

プリエドール(Prijedor):

Patrizia Bugna

Representative, Local Democracy Agency, Italian NGO

Simone Malavolti

LDA Internee, Trento University

Dragana Radanovic

Assistant, LDA

Igor Sovilg

セルビア語 (ボスニア語) 通訳

Sanela Avdic

Coordinator, Ljubija Youth Centre

Azra Novkinic

Coordinator, Hambarine Youth Centre

Dnola Mujic

プリエドールのホストファミリー

Makjud Mujic

プリエドールのホストファミリー

Crnki Sekana

プリエドールのホストファミリー

スレブレニツァ(Srebrenica):

Alexandre Prieto

Programme Manager, Srebrenica Regional Recovery Programme (SRRP), UNDP Bosnia

Guy Dionne

Programme and Evaluation Specialist, SRRP, UNDP Bosnia

Mokhtar Ahdouga

Economic Development Coordinator, SRRP, UNDP Bosnia

Natasa Tanasijevic

Women's Programme Coordinator, SRRP, UNDP Bosnia

Dragana Jovanovic

Project Coordinator, Werkgroep Nederland, local NGO

Abdulah Purkovic

"Misirlije" Manager (accommodation owner)

Boro Petkovic

Director, Oshcvlia Skcla

Kosovo (Kosovo) :

Dr. Neshad Asllani

Director, Kosova Centre for Human Rights

Ali Asllani

Child Human Rights Expert, KCHR

Sharon Burton

Director, World Vision Kosovo

本田 ひとみ

Programme Officer, World Vision Kosovo

ベオグラード (Belgrade) :

福田 啓二

在セルビア・モンテネグロ日本国大使館総括参事官

小宮 充浩

在セルビア・モンテネグロ日本国大使館三等理事官

福吉 正幸

在セルビア・モンテネグロ日本国大使館三等書記官

外務省 :

石元 明彦

欧州局中・東欧課課長補佐

河原 仁

欧州局中・東欧課地域調整官

竹矢 弘

欧州局中・東欧課外務事務官

廣瀬 誠

欧州局中・東欧課外務事務官

国内：

下村 朋史	NPO 法人「飛んでけ！車いす」の会代表
吉田 三千代	NPO 法人「飛んでけ！車いす」の会事務局長
小林 勝法	文教大学国際学部教授（阿波踊り指導）
伊丹 芳子	声楽家（合唱指導）

文教大学湘南キャンパス入試課

東ティモールの活動でお世話になった方々

(順不同・敬称略・すべてお世話になった時点での肩書き)

新屋敷 道保	OISCA-International 常任理事
高橋 径子	OISCA-International 地域第1部主任
狩野 ますみ	OISCA-International 地域第1部
飯田鉄二	独立行政法人 国際協力機構 (JICA) アジア第一部第一グループ 東南アジア第一チーム
和田 泰一	独立行政法人 国際協力機構 (JICA) 東ティモール事務所
Hanayo Hirai	国連東ティモール事務所 (UNOTIL) External Relations officer
泉 彰浩	在東ティモール日本大使館 三等書記官
西野 隆司	育英工業専門学校 デザイン工学科 講師
辻村 直	育英海外ボランティア (Ikuei Overseas Volunteers)
菊池 晶子	//
小林 勝法	文教大学国際学部教授 (阿波踊り指導)
鳥居 ヤス子	ソーラークッキングについての専門家 (アドバイスやお話を伺った)
ミランドリンド・アパリシオ・グテレス (リト)	OISCA 農業研修所所長
Edith Bowles	The World Bank (世界銀行) Consultant
Jose Ramos-Horta	東ティモール外務協力大臣
Father Oliveira de Marcos (オリベイラ神父)	
Father Justiano (ジャスティアーノ神父)	
Father Dino (ディーノ神父)	
Father Locatelli (ロカテリー神父)	
Brother Adriano (アドリアーナ神父)	
フィデロ	運転手
ジョゾ	運転手
マリウ	運転手
アルダ	OISCA 研修センター 研修生

OISCA 研修センターのみなさん
DonBosco 職業訓練校の Brother (修道士) と寮母さん

みなさまに心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

あとがき

「共に生きる」ということ

今年度の東ティモールにおけるボランティア活動から帰国して数日後、東京で東ティモールのラモス・ホルタ外務・協力大臣のスピーチを聞き、直接話す機会があった。ホルタ氏はペロ大司教とともに、東ティモールの平和と独立に対する功績が認められて 1996 年にノーベル平和賞が授与され、現在は新国家建設の中で中核的な役割を果たしている。スピーチでは東ティモールに対する国連の活動をはじめとする世界からの友情とパートナーシップによって東ティモールの平和構築と開発が着々と進みつつあることについて熱い思いが語られたが、その中で次の一言が心を打った。

「東ティモールの過去の歴史について罪や徳を独占する者はない (No one has a monopoly on virtues or sins)」

東ティモール政府は、インドネシアをはじめとする近隣諸国との友好関係を確立し、安定した国際関係の中で開発を進めていくことを外交政策の基本としている。国内にはインドネシア占領時代のさまざまな出来事から友好関係樹立の前に責任追及を行うべきであるという声も根強い。この発言はそのような声に対する「和解を重視する」という明確な政治的ステートメントであることは容易に理解できる。しかし、心を打ったのは「罪や徳を独占する国はない」に含まれる逆説的な含意—誰もが「罪や徳を分担している」というメッセージである。

オーストラリアは 1999 年の住民投票の際にいち早く多国籍軍の主力となる部隊を派遣し、東ティモール独立を達成する上できわめて重要な役割を担った。しかし、1975 年のインドネシアによる東ティモール占領、翌年の併合に対しては、当初は反対の姿勢を示したものの、その後占領を事実上黙認し、ティモール海の石油資源の利権についてインドネシアと交渉することに関心の重点を移して行った。

東ティモールの独立運動が「左翼」の性格を強くしていたことも冷戦下の国際関係では決定的だった。オーストラリアも米国も、東南アジアの最南端に左翼政権が成立することは容認できなかった。インドネシアは 1965 年の 9.30 事件後、徹底的な左翼の弾圧を行ってきた。このような中では米国にとってもオーストラリアにとっても、あるいは他の西側諸国にとっても、インドネシアの行動について賛成こそしなくても事実上黙認するか口先だけの非難にとどめておく十分な理由があったのである。また、宗主国のポルトガルが長年、東ティモールに対する物的、人的投資を怠り、未開発の状態にとどめてきたこともインドネシアの行動についての正統性の根拠を与えた。

そして日本はといえば、政府は一貫して、インドネシアの立場を擁護し、国連等におけるいかなるインドネシア非難にも反対もしくは棄権票を投じ続けてきた。長年、東ティモールに対する支援活動を行ってきた少数のグループを除けば、市民の間での東ティモール問題に対する関心は高くなかった。正直いって、途上国の開発を担当してきた私自身、東ティモールに対する関心を 70 年代、80 年代を通じも

ってきたかと問われれば、否と答えざるを得ない。

このような背景を考えた上でホルタ氏が言いたかったことを敷衍すれば、国際的な市民社会における一人一人の無関心の集積が、東ティモールの悲惨な歴史を生み出した究極的な「罪」であるということだろう。もし、市民がより多くの関心を払い続ければ、インドネシアが東ティモールを世界から遮断するような政策は取れなかったはずである。一方ホルタ氏がいう「徳」とは、1991年のサンタクルス事件の映像が世界に流れて以来、各国市民から東ティモールの状況への関心と支援の声が高まり、国々の政府をつき動かして東ティモール独立へ向けた国際世論を形成していったことであろう。

ボランティア活動に出発する直前に、参加する何人かの学生と封切られたばかりの映画「マザー・テレサ」を観た。冒頭、カルカット駅のホームで行き倒れのひととマザー・テレサが出会うシーンがある。倒れた人のそばを多くの人々が何事もなかったように通り過ぎていく風景は、現在でも世界各地で見られる光景である。多く的人是困難を抱えている人とはなるべくかかわらないようにしようとする。しかし、マザー・テレサは倒れている人に近づき、話しかけ、そこで「私は渴く I thirst」という断末魔の呻き¹を聞いて、自分とその人との決定的なつながりを理解し、その後の奉仕の人生を決定する。

世界の人々は全て何らかの関係性を持っている。無関心であることもネガティブな関係性を持つ。それはマザー・テレサの「愛の反対は無関心」という言葉に集約されている。「関心」は自覚することはできるが「無関心」は自覚することが難しい。しかし、「無関心」がなかなか自覚できないことを認識できれば、少しでも他者とあるいは世界と能動的に係わって行こうというアクションにつなげていくことができる。

二年間連続で学生とともに東ティモールに訪れ、バギア村の孤児院で約一週間過ごしている。いつも孤児たちに別れを告げるときは学生にとって一番つらい時間である。わずか一週間の滞在でも、孤児たちと生活をともにし、ともに活動し遊ぶなかで、共感が高まっていく。ボランティア活動としてなにができるのか、どのようなスキルがあるのか、そのようなことを問う声も学生の中にはあるが、一番大切なことは、わずかであっても「共に生きる」時間を持てたことだろう。東ティモールでの生活は楽ではない。道路などは整備されておらず、衛生状態もよいとはいえない。しかし、活動に積極的、能動的に参加することによって得られたものは大きい。それは、世界のどこの誰とでも自らかかわりあいを求めることによって「共に生きることができる」という経験である。

ボランティア活動を世界の人々の置かれた状況や問題により幅広くより大きな関心を払うきっかけにしていきたい。

林 薫

¹ キリスト十字架上のことば

「ボランティア活動に参加する学生たちへ」

「私たちの活動が、本当に現地の人の為になっているか疑問です」と紛争の傷跡が残るプリエドールの町を散策している時に、ひとりの学生から真剣な問いかけがあった。学生たちと訪ねた折、子供たちと交流し、文具等を届けたユースセンターは、紛争後10年の歳月がたっているが建物は荒れ果てたまま、街路にはゴミがあふれていた。黙ってゴミ袋をとりだし、ゴミ拾いを始めた学生たちがいた。

「何もかもはできないけど、何かはきっとできる」と湘南キャンパスに掲示されているワールドヴィジョンのポスターに気づいた人も多いかと思う。生まれながらエイズと戦う5歳の男の子、アリ君がじっと見つめながら語っている言葉どおり学生たちのボランティアは、まさに大海の一滴。

しかし「学生にしかできないボランティア」がある。国際機関や NGO とは異なり、届けることのできるのはほんの僅かな支援で、期間も限られ、厳しい現実を直視すると後ずさりしたくなる。一方、特別に現地の大使館や国際機関を訪問、一般家庭でのホームステイなどは、学生だからお願いできる特権でもある。

「学生主体の活動である」ほとんどの学生たちは現地に行くまでの数ヶ月、アルバイトをして渡航資金を捻出している。夏の暑い中、茅ヶ崎駅前募金活動、物資の収集などを含む、実に「地味な」準備活動を初期の活動から行っている。事後の報告活動やこの報告書の作成も、製本以外すべて学生の手作り作業である。表紙をデザインしてくれた情報学部の学生もいる。

「ボランティア活動に参加したいのですが」と研究室を訪問してくれる国際学部の学生が絶えない。これは先輩学生たちの功績である。先日、ヨルダンからの転送メールが入った。「アンマンでのテロに遭遇しましたが、無事なのでご心配なく」コソボと東ティモールへの活動に共に参加し、現在ヨルダンの国際機関で働くボランティア活動卒業生からであった。

「主義や主張より、行動」学生たちを動機づけるのはどうも価値観だけではなく、実体験らしい。国際ボランティア活動が、これからも国際学部の良き伝統になることを願う。

生田祐子

製作 文教ボランティアズ
発行 2005年12月3日
発行 文教大学国際ボランティア委員会
神奈川県茅ヶ崎市行谷1100
電話 0467-53-2111
e-mail : knkyo@shonan.bunkyo.ac.jp
: bunkyo_vol@yahoo.co.jp
協力 文教大学国際学部
文教大学湘南総合研究所
表紙デザイン 広報学科3年 佐藤 恵利子
印刷 株式会社 三光堂印刷
神奈川県藤沢市本町1-3-33



Kosova

コソボ

文教ボランティアズ